『金剛經解義』の諸本の系統と古形の復元

伊吹　敦

はじめに

私は先に、惠能に歸されるいくつかの『金剛經』の註釋書の檢討を行い、その結果、それらの成立が比較的新しく、しかも、その多くが、この『解義』の存在を前提としたものであることを明らかにした[1]。この事實は、端的に『解義』の傳來の古さを物語るものであるとも言える。

しかも、既に指摘されているように[2]、この本こそは、天安二年（858）に歸朝した圓珍（814-891）の將來目録に、

「能大師金剛經訣　一卷」[3]

と見えるものに外ならぬから、その成立は九世紀前半を降らないのであって、書誌學的見地から見て、惠能の眞撰である可能性の殘る唯一の註釋書であると言えるのである。

もっとも、先に論じたように[4]、その內容から判斷すれば、それを慧能の眞撰と認めることは困難なのであるが、この『解義』が、禪が正に形成されようとする時期に、しかも、その一翼を擔う形で登場したという點からすれば、その價値は、いささかも劣るものではないと言わねばならない。

そこで、次に問題となるのは、『解義』の諸本の系統の解明である。というのは、本書には、その傳承の古さを反映するかのように、中國、朝鮮、日本に亙って多くの異本が傳えられているので、それら相互の關係を明らかにし、その原形と變遷を辿ることは、『解義』に基づいて禪の形成過程を論ずる場合、避けて通ることのできない前提作業とならざるをえないからである。

もっとも、これについては、既に、

駒澤大學禪宗史研究會編著

『慧能研究－慧能の傳記と資料に關する基礎的研究』[5]

という先駆的な業績があり、後學に資するところ甚だ大であるが、なお、諸本の蒐集や事實認識などの點で十分でないと思われるところがあり、全面的な再考が必要である。

特に本書で問題なのは、諸本の系統についての研究が、そこに掲げられている校合テキストに全く生かされていないことであって、例えば、『金剛經』「非説所説分第二十一」の「慧命須菩提」の一節と、その解義について、

> 「この文のないのは、六地藏寺本のみであることは、一覧表の（ホ）の項目を見れば理解できるであろう。しかもない方が『解義』の古形を示していると考えられるのである。」(6)

と述べておきながら、「六本對校 金剛經解義」(7)では、その古形を殘す六地藏寺本ではなくて、京都大學人文科學研究所、松本文庫所藏の五山版を、その底本に採用しているのである。

しかも、ここで校合されている六地藏寺本の本文には、後述のごとく、編者による重大な過失があるうえに、これと同系統と見られる引用文がかなりの數知られているにも拘わらず、それらについても全く言及されていないのである。

そこで、本論では、このような現状に鑑み、從來、知られていなかった諸本を紹介するとともに、それを含めて諸本間の關係を解明し、その上で、可能な範圍でその原形の復元を行いたいと思う。

1．現存する諸本

前掲の『慧能研究』は、『解義』の異本について、單行本十三種と合糅本二種、その他、關聯文獻一種（『金剛經口訣』）の計十五種を擧げるが(8)、その中には記録にしか見えないものや、單なる他本の後刷も含まれており、實質的には九本を掲げるに過ぎない(9)。

しかし、これら九本によって、日本に傳わる異本が全て網羅されるわけでは勿論ない。同種の刊本は他所にも多く藏されているし、寫本として傳わるものも、恐らく、かなりの數に達するに違いない。

特に寫本については、その本文の檢討が絶對に必要となるが、私がその存在を確認したものだけでも、次の三本が知られるのである。

1．仁和寺御經藏藏本
2．叡山文庫、雙嚴院藏本
3．無窮會、織田文庫藏本

そこで、先ず最初に、私が目視した範圍で、日本に傳存する諸本を整理してみたい[10]。先ずは單行本から掲げる。

一．單行本

A．中國刊本

1．刊年不明、明版『金剛般若波羅蜜經』二卷[11]
   a．内閣文庫藏本（館藏番號、楓1-子-194-7）
   b．叡山文庫藏本（館藏番號、天海-内典-5-22-103）

B．朝鮮刊本

1．萬暦三年（1575）、大雄山報恩慈福安心廣濟院刊、昭和七年（1933）、韓龍雲後刷本『金剛經』（諺解本）二卷[12]
   a．駒澤大學圖書館藏本（館藏番號、253.1-1）
   b．天理大學圖書館藏本（館藏番號、183-タ-135）
   c．早稻田大學圖書館藏本（館藏番號、ハ-5-2710）
   d．東洋文庫藏本（館藏番號、Ⅶ-3-73）

2．同治六年（1867）、金剛山神溪寺普雲庵刊本『金剛經』一卷[13]
   a．東洋文庫藏本（館藏番號、Ⅶ-3-161）

C．日本刊本

1．刊年不明、五山版『金剛般若波羅蜜經』一卷[14]
   a．京都大學人文科學研究所、松本文庫藏本（館藏番號、松-1799）

2．明暦元年（1655）、中野小左衞門刊本『金剛經六祖解義』二卷[15]
   a．京都大學圖書館藏本（館藏番號、藏-5-コ-18）
   b．駒澤大學圖書館藏本（館藏番號、253.1-9）

c．龍谷大學圖書館藏本（館藏番號、2412-21）

d．東大寺圖書館藏本（館藏番號、32-378）

3．明治年間、藏經書院刊本『金剛經解義』二卷（續藏一-三八-四）[16]

D．日本寫本

1．『六祖註解金剛經義』[17]

a．六地藏寺藏、書寫年不詳（天文十九年（1550）補修）一冊寫本

2．『金剛般若波羅蜜經』[18]

a．仁和寺御經藏藏、書寫年不詳（寛文八年（1668）補修）一冊寫本

3．『金剛般若波羅蜜經義解』[19]

a．叡山文庫藏、書寫年不詳（文政九年（1824）以前）一冊寫本（館藏番號、雙嚴院-内典-5-1-218）

4．『金剛經六祖解義口訣』[20]

a．無窮會藏、書寫年不詳一冊寫本（館藏番號、織田文庫-1-オ-1798）

なお、『解義』のテキストには、これら單行本の外に、他の典籍と合本にしたものも存在する。それらの内で、『解義』の全文を含むものを掲げれば、以下の通りである。

二．合糅本

A．朝鮮刊本

1．世祖二年（1457）、信眉等再編『金剛經五家解』

B．日本刊本

1．編者不詳、寛永九年（1632）初刊、『金剛經註』（川老註）

これらについても、いくつかの刊本が知られているが[21]、それらの間に文字の相違は全くといってよいほど存在しない。それは、それら諸本の多くが、古い刊本をそのまま版下に使った完全なる覆刻であったためである[22]。これについ

ては附論で論ずるので、ここでは、これ以上の言及は差し控えたい。

このように、『解義』の傳存するテキストは意外なほどに多いが、なお、この外に引用という形で、『解義』の一部を傳えているものもあり、その代表的なものとして以下のごときがある(23)。

三．所引本

A．中國撰述

1．『従容録』（嘉定一六年〈1223〉行秀撰）
2．『金剛經集解（金剛經十七家解）』（紹定四年〈1231〉楊圭編）
3．『文獻通考』（成立年未詳〈宋末元初〉馬端臨撰）
4．『金剛經變相』（成立年未詳〈南宋？〉編者未詳）
5．『廬山蓮宗寶鑑』（大徳九年〈1308〉普度撰）
6．『金剛經註解（金剛經五十三家註）』（明太祖編？）
7．『金剛經集註（金剛經五十三家註）』（永樂二一年〈1423〉明成祖編）
8．『金剛經如是解』（順治七年〈1650〉無是道人撰）
9．『金剛經會解了義』（順治一八年〈1661〉徐昌治撰）
10．『金剛經彙纂』（乾隆五八年〈1793〉孫念劬撰）
11．『金剛經闡説』（嘉慶二一年〈1816〉存吾撰）

B．日本撰述

1．『菩薩戒問答洞義抄』（徳治三年〈1308〉英心撰）
2．『器朴論』（成立未詳〈一四世紀半〉託何撰）

これらのうち、三-A-2、三-A-6、三-A-7の三本は、系列をなす一聯のもので、

三-A-2 → 三-A-6 → 三-A-7

という關係にあるが(24)、このいずれについても複數の傳本が知られている。しかし、これについても別に附論で論ずるので、ここでの論及は差し控えたい。

ただ、ここで言い添えておかなくてはならないのは、この系統をなす諸本のうち、最も古い、三-A-2の『金剛經集解』については、極めて重要な資料價値を有するので、後にしばしば論及することになるであろうということである。

《圖表1》

		A本	B本	C本	D本	E本	F本	G本	H本	I本	J本	K本	L本
體裁	卷　數	1	4	2	1	2	1	1	1	1	3	2	2
	裝　幀	綫裝本	綫裝本	綫裝本	綫裝本	綫裝本	折本	折本	綫裝本	綫裝本	綫裝本	綫裝本	綫裝本
	慧能の註釋の體裁	一字空き追い込み	改行一字下小字	改行一字下小字	改行一字下小字	改行一字下	割註追い込み	割註追い込み	割註追い込み	割註追い込み	割註追い込み	改行一字下	改行一字下
	字詰め（經文）	20	9	14	17	19	17	15~18	20	18	17	20	20
	字詰め（解義）	20	16	18	18	18	24	15	20	18	17	19	19
	行數（本文）	各半葉14	各半葉6	各半葉9	各半葉9	各半葉8	各折6	各折4	各半葉9	各半葉9	各半葉7	各半葉9	各半葉9
	*題簽・外題	解金剛經六祖注	金剛般若波羅蜜經集註	金剛經	金剛經	金剛經	−	金剛般若波羅蜜經慧能解義	金剛經六祖大師解義口訣	金剛般若波羅密經義解	金剛經註	金剛經圓覺經	金剛經六祖解義
	慧能序の標題	a	−	b	c	d	e	e	e	f	e	g	g
	本文の標題	h	h	i	j	h	h	h	k	h	k	l	l
	本文の尾題	h	m	n	o	h	p	h	p	p	h	q	q
**内容	慧能の序文	○	−	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	金剛經啓請／淨口業眞言／安土地眞言／普供養眞言／請八金剛／請四菩薩／發願文／云何梵	−	○	−	−	○	○	−	○	○	○	−	−
	開經偈	−	○	−	−	○	−	−	○	−	○	−	−
	經文と解義	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	分目下の註記	−	−	−	−	−	−	−	○（イ）	○（ロ）	○（ロ）	−	−
	補闕眞言	−	○	−	−	○	○	−	○	○	○	○	−
	般若無盡藏眞言	−	○	○	−	○	−	−	−	−	−	−	−
	金剛心陀羅尼	−	○	−	−	○	−	−	−	−	−	−	−
	眞覺大師撰の過去宿債一覽	○	−	−	−	−	−	−	−	−	○	−	−
	六祖口訣後序	−	−	r	−	○	○	○	○	○	○	−	−

註記

○ は存在することを、− は存在しないことを示す　／　イ、ロは、内容に違いがあることを示す
* 傳本によって題簽・外題を異にするものについては、最も代表的なものを掲げる　／　** 内容に關しては、二種以上の異本に共通するもののみを掲げる
a：六祖注解金剛經義并序曹溪六祖大師慧能解義亦曰口訣／b：曹溪六祖禪師序／c：六祖金剛般若波羅蜜經序／d：金剛般若波羅蜜經六祖解序／e：金剛般若波羅蜜經（曹溪六祖大師慧能解義亦曰口訣并序）（J本は、慧を惠に作る）／f：金剛般若經（曹溪六祖大師慧能解義亦曰口訣并序）／g：金剛般若波羅蜜經序／h：金剛般若波羅蜜經／i：金剛般若波羅蜜經上／j：金剛般若波羅蜜經姚秦三藏沙門鳩摩羅什譯大唐曹溪六祖大鑑禪師口訣／k：金剛般若波羅蜜經姚秦三藏法師鳩摩羅什奉詔譯／l：金剛般若波羅蜜經卷上東晉武帝時後秦沙門鳩摩羅什奉詔譯梁昭明太子嘉其分目唐六祖大鑒眞空普覺禪師解義／m：集註金剛般若波羅蜜經／n：金剛般若波羅蜜經下／o：金剛般若波羅蜜經終／p：佛說金剛般若波羅蜜經／q：金剛般若波羅蜜經卷下／r：「六祖口訣」として、その一部を存す

また、上に掲げた現存諸本には、しばしば異本との校合などが註記されているが、それらの中にも、かなり古い形態の『解義』の本文を傳えると見られるものがあり、貴重である。

更に、『金剛經直解』や李文會の註のように、『解義』の影響を強く被った文獻の存在も重要であるが、これらは概して成立が新しい上に、その基づいた底本の形態をどれほど忠實に傳えているかはっきりしないので、以下においては特に言及しないことにしたい[25]。

2．現存諸本間の關係について

上に、今日に傳存する異本を列擧したので、次に、これら諸本の相互關係について考えてみたい。

上に掲げた十二種の異本のうち、續藏本については、既に指摘されているように[26]、明曆元年刊本の覆刻にすぎないから、ここで取り立てて論ずる必要はないので、これを除き、それに換えて、その全文は傳わらないものの、非常に特徴的な本文を傳える、『金剛經集解』本を取り上げたいと思う。

從って、當面、ここで問題にするのは、次の十二の異本ということになる（括弧内は、前節での符號）。

Ａ．六地藏寺藏寫本（一-Ｄ-１）
Ｂ．『金剛經集解』所引本（三-Ａ-２）
Ｃ．『金剛經五家解』合糅本（二-Ａ-１）
Ｄ．東洋文庫藏朝鮮版（一-Ｂ-２）
Ｅ．諺解本（一-Ｂ-１）
Ｆ．京都大學人文科學研究所藏五山版（一-Ｃ-１）
Ｇ．仁和寺藏寫本（一-Ｄ-２）
Ｈ．無窮會藏寫本（一-Ｄ-４）
Ｉ．叡山文庫藏寫本（一-Ｄ-３）
Ｊ．『金剛經註』合糅本（二-Ｂ-１）
Ｋ．内閣文庫等藏明版（一-Ａ-１）
Ｌ．江戸時代町版（一-Ｃ-２）

先ず、これら諸本の體裁を一瞥しておくと、前頁に示した《圖表１》のように

なる。

この對照だけによっても、おおよそ、以下のようなことは言いうるように思われる。即ち、

1．K本とL本は、末尾の「補闕眞言」の有無を別にすれば、全ての點で一致する。
2．E、F、G、H、I、Jの各本は、羅適の「六祖口訣後序」を有する點で、同系統と見做しうる。
3．I、J本は、分目下に同一の註記を有する點で、何らかの關係を有する。

しかしながら、體裁は偶然の一致ということもありうるし、その各要素については、他本から補われることもありうるから、その系統を明らかにするためには、何としても、その本文自體によって考察する必要がある。

問題はその方法であるが、なるべく客觀的な形で判定したいので、次のような手順を踏むことにしたい。

1．諸本間で異なる箇所を摘出し、一覽の形で列擧する。
2．それらの箇所について、各異本間で共通する箇所の割合を計算することで、各異本間の類似度を數値によって示す。
3．その數値によって、いくつかの系統に分ける。
4．各系統内の諸本間の關係を明らかにする。

從って、先ず、諸本間で異なる箇所を列記せねばならないわけであるが、それを全て掲げることは煩わしいばかりで意味もないから、ここでは、以下のような基準を設けることにしたい。

1．『金剛經』の經文自體については、異本の對校などによって改められる可能性が大きいので除く。
2．ある特定の本にしか見られない孤立した相違については、他本との關係を知るという點では全く役に立たないので、二本以上に共通する相違のみを問題とする。
3．異體字と認め得るもの、異體字でなくとも、「慧」と「惠」のように、人によっては區別されずに用いられるものについては、轉寫な

どの際に變化した可能性が否定できないので、これを除く。

4．字形が似ているために誤られやすい文字についても、傳承の間に變化した可能性が大きいので、これを除く。

5．本によっては、しばしば、本文中に他本にない「者」や「也」という文字が加えられている場合が見られるが、これらの文字は出版等の際に校訂などによって補われた可能性が否定できないから、問題にしない。

このような基準に合致するものを調査した結果、本文末尾の《附表１》に示した、總計二八五箇所を検出することができた[27]。

この二八五箇所について、各異本間の一致、不一致を検討し（その結果が、《附表１》に示した「パターン」に當たる）、その一致の割合を計算して百分率で示したのが、次頁の《圖表２》である。

これによって知られるのは、これら諸本が、次の三つの系統に分けられるということである。

Ⅰ．　Ａ－Ｂ

Ⅱ．　Ｃ－Ｄ

Ⅲ．　Ｅ－Ｆ－Ｇ－Ｈ－Ｉ－Ｊ－Ｋ－Ｌ

即ち、《圖表２》によって分かるように、これら各系統の諸本の間では、相互に80パーセント以上が合致しているのである。

次に、これら三つの系統のそれぞれについて考察してみよう。先ず、Ｉであるが、《圖表２》に見るように、Ｂ本の本文が知られる部分について言えば、《附表１》で検討した箇所の83パーセントは、Ａ本と一致し、兩者が密接な關係にあることは疑いえない。しかし、17パーセントの相違が見られることも、また事實なのであるから、その間の關係は、當然のことながら問題とならざるを得ない。

そこで、兩者間で相違する箇所を《附表１》によって列擧すれば、以下のごとくになる。

75、208、210、251、260、261、262

ところで、ここで注目すべきは、これら七箇所の多く（75以外の六箇所）において、Ｂ本がⅢの系統の諸本と一致、あるいは類似しているということであっ

《圖表2》

	A本	B本	C本	D本	E本	F本	G本	H本	I本	J本	K本
B本	36/43 = 83%										
C本	149/285 = 52%	11/43 = 25%									
D本	148/285 = 51%	10/43 = 23%	279/285 = 97%								
E本	128/285 = 44%	16/43 = 37%	58/285 = 20%	58/285 = 20%							
F本	108/285 = 37%	13/43 = 30%	37/285 = 12%	36/285 = 12%	251/285 = 88%						
G本	109/285 = 38%	12/43 = 27%	38/285 = 13%	37/285 = 12%	251/285 = 88%	283/285 = 99%					
H本	111/285 = 38%	13/43 = 30%	42/285 = 14%	41/285 = 14%	251/285 = 88%	279/285 = 97%	277/285 = 97%				
I本	108/285 = 37%	13/43 = 30%	37/285 = 12%	36/285 = 12%	251/285 = 88%	285/285 = 100%	283/285 = 99%	279/285 = 97%			
J本	108/285 = 37%	12/43 = 27%	41/285 = 14%	40/285 = 14%	248/285 = 87%	267/285 = 93%	267/285 = 93%	266/285 = 93%	267/285 = 93%		
K本	101/285 = 35%	14/43 = 32%	32/285 = 11%	31/285 = 10%	233/285 = 81%	251/285 = 88%	249/285 = 87%	251/285 = 88%	251/285 = 88%	243/285 = 85%	
L本	98/285 = 34%	13/43 = 30%	26/285 = 9%	25/285 = 8%	231/285 = 81%	251/285 = 88%	249/285 = 87%	249/285 = 87%	251/285 = 88%	249/285 = 87%	277/285 = 97%

て、このことは、B本がA本に遙かに近いものの、Ⅲの系統の諸本とも關聯を持ち、兩者の中間に位置するものであることを示すものである。

しかし、とりわけ重要なのは、251の、「慧命須菩提」の一節に慧能の解義が存在しない理由を述べる註記の存在である。A本に、この經文と註記がないのは、明らかに古形を留めるものであって、B本にこれが存するということは、それが後の改編を經たものであることを示すものと言えるが[28]、この經文と註記が、Ⅲ系統の諸本にも共通して見えるということは、Ⅲ系統の諸本がB本を承けていることの明白な證據と言えるのである。從って、これらの關係は、およそ、次のようにならざるをえない。

A本 ——→ B本 ——→ Ⅲ系統諸本

次に、Ⅱの系統に屬する諸本について考えてみよう。

Ⅱの系統に屬するC本とD本は、いずれも朝鮮に傳わった異本で、その97パーセントが一致し、實質的には全くの同本と認めて差し支えない。

この兩者の關係について、『慧能研究』は、

「五家解本と同治六年本は、成立の順序からいえば、五家解本が古い。そこで當然、五家解本と同治六年本が大變に近い關係にあるところから、五家解本から六祖の注解を獨立させたものが同治六年本であろうと推測される。またその説の逆の立場、つまり同治六年本の古い版によって、五家解本が成立したと斷定できる十分な資料があるとは今のところいいがたい。」[29]

と認めつつも、結局は、

「この論文では同治六年本古版 → 五家解本の底本と考えておく。」[30]

という結論を述べる。つまり、D本からC本への展開を考えているのであるが、しかしながら、既に、この論文でも認めているように、ここで想定されている「同治六年本古版」なるものは、その實物が知られないばかりか、韓國の種々の藏書目録によっても、その存在を窺わせるような記載は確認できないのである。

しかも、『慧能研究』では一顧だにされていないが、これに關して無視するこ

とのできない重要な資料として、この同治六年刊本末尾に附されている「書刻六祖金剛經跋」の存在があり、その中に次のような注目すべき記載を見ることができるのである。

「昔達磨西來。□直指人心不立文字。楞伽經四卷付之二祖。以佛語心爲密旨準繩。傳至五祖始以金剛經易之。盧行者暫聞一句。頓悟心本無住。得衣鉢爲六祖。遂口訣所證。令人持無相經。而捷入無念三昧。家寶不從門外入。如言定自腦中流故。高超名相。獨露眞理。其猶握摩尼而鑑物。物物流輝。擲太阿而揮空。空空絶迹。註疏家強逾八百。孰能其髣髴哉。<u>然此訣傳載講肆大本卷中。難容行脚巾匭裡。且五家各隨見解。讀誦者覬覦渺無涯涘</u>。撥□□□沙劫事。祖師所謂。誦經久不明。與義作讎家也。已有長老尼尚煒。頗爲相信所歸。專以興福科作己任。踵白蓮古事。結于普雲社。又聚十王甲會而念曰。金剛經閻羅王之常頂戴。宜鏤梓爲常住。起余而言及。乃刻口訣。因由告之。」(31)

ここで、慧能の「口訣」が「講肆大本卷中」に傳えられてきたと述べ、更に、「五家」に言及するのは、今日に傳わる『金剛經五家解』が、一般に大判であるのと正しく呼應する。從って、この文面は、長老尼の尚煒が『解義』の刊行を思い立った理由が、それを合糅する『五家解』が大判で携帯に不便であったことに存したことを示すものと見做しうる。

このような出版の經緯からすれば、ここには明記されてはいないものの、この際の出版の底本が『五家解』そのものであり、それからの抽出によって刊行されたのが、この同治六年本であったと考えるべきことは當然であろう。

從って、兩者間の關係は、次のようにならざるを得ない。

C本 ――→ D本

最後に、Ⅲ系統の諸本について考えてみよう。

《圖表２》に見るように、Ｆ、Ｇ、Ｈ、Ｉの四つの本、ならびに、Ｋ、Ｌの二本は、相互に97パーセント以上が一致するので、事實上、同一本と認めてよい。從って、Ⅲ系統の諸本は、次の四つの系統に下位分類することができる。

イ．Ｅ本

ロ．Ｆ本、Ｇ本、Ｈ本、Ｉ本

ハ．Ｊ本

ニ．Ｋ本、Ｌ本

先に見たように、このうち、イとロには、羅適の後序を有するので、兩者が同一の祖本に基づいたことは疑いえないように思われる。ところが、《圖表２》に見るように、兩者間の一致率は、80パーセント代後半に留まっており、全同とは言いがたい。ロのうちのＦ本が宋版の完全な翻刻であり(32)、從って、羅適刊行本の原型をほぼそのまま傳えるものと見做しうることを考慮に入れれば、このことは、イのＥ本の本文が何らかの改變を施されたものであることを強く示唆するものと言える。

そこで、《附表１》によって有意な兩者の相違箇所を列擧してみると、以下のごとく、總計、三十四箇所に上ることが知られる（ロの代表としてＦ本を取り上げ、これをＥ本と比較した）。

９、11、31、33、37、45、52、74、76、80、82、84、94、107、109、114、118、119、141、151、152、154、163、164、189、194、201、204、216、231、241、250、267、276

このうち、９や33などは、ロに見られる註記をイが缺いている例で、兩者の關係を知る上で極めて重要な示唆を與えるものといえる。

これらの註記は、羅適の後序に、

「適少觀檀經。聞六祖由此經見性。疑必有所演說。未之見也。及知曹州濟陰。於那君箇處。得六祖口訣一本。觀其言簡辭直。明白倒斷。使人易曉而不惑。喜不自勝。又念。京東河北陝西人。資性質朴信厚。遇事決裂。若使學佛性。必能勇猛精進。超越過人。然其爲講師者。多傳百法論上生經而已。其學者。不知萬法隨緣生。緣盡法亦應滅。反以法爲法。固守執著。遂爲法所縛。死不知解。猶如陷沙之人。力與沙爭。愈用力而愈陷。不知勿與沙爭。即能出陷。良可惜。適遂欲以六祖金剛經口訣。鏤板流傳。以開發此數方學者佛性。<u>然以文多脫誤。因廣求別本勘校。十年間凡得八本。惟杭越建陝四本文多同。因得刊正冤句</u>。董君遵力勸成之。且率諸朝士。以資募工。士大夫聞者。皆樂見助。四明樓君。常願終成其事。嗚呼。如來云。無法可說。是名說法。夫可

見於言語文字者。豈佛法之眞諦也。然非言語文字。則眞諦不可得而傳也。學者因六祖口訣。以求金剛經。因金剛經。以求自佛性。見自佛性。然後知佛法。不止於口訣而已。如此則六祖之於佛法。其功可思議乎哉。」(33)

ということからして、羅適自身が異本を對校して附したものと見られるが、イにこれらを缺くのは、それが用いた底本がロと系統を異にしていたことを示すものではない。というのは、77や181では、同様の註記がイとロの雙方に見られるし、37の箇所では羅適の註記の一部をイが殘しているのを見ることができるからである。つまり、イは、ロ系統の諸本と同じく、羅適本を底本としつつも、これら、いくつかの註記を削ったのである。

ところで、上で觸れた三箇所（9、33、37）以外の相違箇所を検討して氣づくことは、その多くにおいて、イがI系統やII系統の諸本と共通する文面となっているということである。即ち、

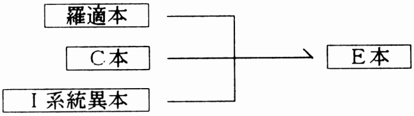
11、31、52、74、76、80、82、84、107、109、114、119、141、152、163、164、194、201、204、241、250、267、276

の二十三箇所がI系統の諸本と一致し、また、

11、31、74、80、84、94、107、109、114、141、151、152、154、163、164、194、201、204、216、241、250、267、276

の二十三箇所がII系統の諸本と一致するので、結局のところ、三十一箇所のうちの二十七箇所は、I系統、あるいはII系統の諸本と共通するのである。

このことは、イのE本が、ロ系統の底本に基づきつつ、IやII系統の諸本をも參照して、そのテキストを作り上げたことを示すものと言えよう。この本が、C本の成立にすぐ續く時代に編まれたことを考えれば、これが據ったII系統の異本が、實はC本そのものであったことは、先ず間違いあるまい。つまり、これら諸本の關係は次のごときものであったと推定されるのである(34)。



ロ系統の諸本が、ほとんど同一の本文を持つことは、先に述べた通りである。しかし、わずかながら相違も見られるので、ここで、それについて論じておこう。

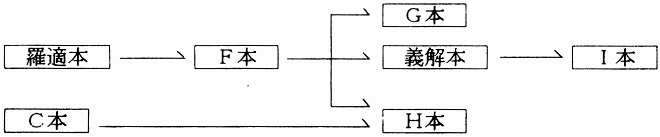
G本がF本と異なるのは、77、201、251の三箇所に過ぎず、このうち、201に關しては、A本、C本、D本、E本、J本と共通するが、この一箇所のみで他系統との關聯を云云するの差し控えるべきであろう。從って、この本は、F本の轉寫と認めてよいと考えられる。

H本がF本と有意に異なるのは、11、37、73、114、168、276の六箇所であるが、このうち、11、73、114、168、276の五箇所については、Ⅰ、Ⅱ系統との關聯が想定できる。即ち、A本とは168以外の四箇所で、C本とは五箇所全てにおいて共通しているのである。從って、H本が羅適刊行本に基づきながらも、Cの五家解本などによって、その本文に、一部、改變を施していることは疑いえないと思われる。

I本は、《附表1》で檢討した箇所のみについて言えば、F本との間に全く相違は認められないから、少なくとも、その本文に關しては、それをそのまま承けたものと認めて差支えない。

しかしながら、これが「金剛經義解」と題して標題を異にしていることや、各分章の下にF本に見られない註記を有していることなどからすると、この本が直接底本としたものは、實は、F本そのものではなく、それに基づく翻刻であったと考えるべきかと思われる。

從って、この系統の諸本の關係は、次のようになる（I本が「義解本」に基づくという點に關しては、なお大いに疑問の餘地があるが、今は假に、こう考えておく。これについては附論も參照せられたい）。



次に、ハのJ本について考えてみよう。先と同樣、ロのF本を基準として、有意な相違箇所を列擧すると以下のようになる。

2、9、11、18、37、41、68、73、74、90、141、181、185、201、

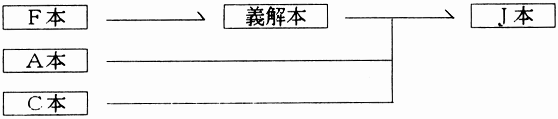
216、240、241、272、276、282

これらの中には、他に一致する異本がなく、編者が私見によって改めたと考えられるものや、單なる誤りと見做しうるものも多いが、これらのうち、

9、11、18、74、201、216、241

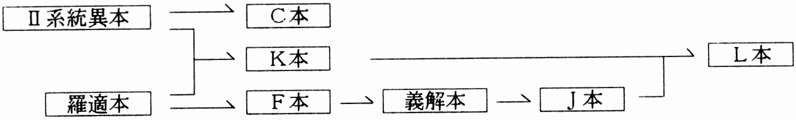
などは、C本と共通し（9、11、74、201、241は、A本とも一致する）、また、41や73などでは、F本とA本やC本とを合した形になっているので、直接にかどうかは明らかでないが、I系統やII系統の異本（恐らく、その源は、A本、C本と認めてよいであろう）を參照していることは間違いないものと思われる。

後に附論で觸れるように、このJ本が底本としたのは、直接には、I本の底本ともなった、『金剛經義解』であったと考えうるから、これらの關係は、以下のようになる。



最後に、二の系統の二本であるが、《圖表2》に見るように、K本とL本は97パーセントが一致し、ほとんど同一本と見てよいが、わずかに見られる兩者の相違[35]に着目すると、興味深いことに、それらが、ほとんど全てJ本と一致していることが知られるのである[36]。その中には、J本以外には全く見られないものも多く含まれているので[37]、それがJ本に基づくものであることは疑いようがない。即ち、L本は、K本を底本とし、それにJ本を校合することによって成立したことが知られるのである。

問題は、K本の素性である。基本的には羅適刊行本を承けるものと見做して問題ないが、F本と比較した場合、他の異本に全く見られず、從って、この本が獨自に改めたと考えられる箇所も多く[38]、また、31、33、37、73、76、80、114、141、173、181、276、278などのように、一部にI系統やII系統の諸本と共通する部分もある。特にII系統との關聯は密接であるから[39]、恐らくは、この系統の異本を參照しているのであろう。それゆえ、次のような關係が想定される。



残る問題は、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲという三つの系統間の關係である。そこで、次に、各系統を代表する異本として、それぞれ、A本、C本、F本を取り出し、それについて考えてみよう。

先の《圖表２》に見るように、A本とC本の一致率は52パーセント、A本とF本の一致率は37パーセント、そして、C本とF本の一致率は12パーセントとなっており、三者の本文の近接度にはっきりとした差異を認めることができる。

次に、《附表１》によって、その内譯を調べてみると、以下のようになる。

イ．A本、C本、F本に共通するもの（一九箇所）

19、22、55、68、78、117、122、153、157、158、159、160、162、218、233、272、274、277、282

ロ．A本とC本のみに共通するもの（一三〇箇所）

1、2、3、4、5、6、7、9、11、13、14、15、16、27、29、30、31、32、33、37、60、73、74、77、80、84、90、93、99、101、104、107、108、109、111、114、115、116、123、125、126、128、131、132、137、138、139、141、142、144、145、146、147、152、155、163、164、169、170、171、172、173、178、179、181、182、185、186、187、188、189、191、192、194、195、196、197、199、200、201、202、203、204、205、206、208、209、210、212、213、214、215、217、219、221、222、225、226、227、228、229、230、234、235、236、241、243、244、245、246、247、248、249、250、254、255、260、261、262、265、266、267、268、269、271、275、276、279、281、285

ハ．A本とF本のみに共通するもの（八九箇所）

8、10、12、18、20、23、24、26、28、36、42、43、48、49、50、

51、53、54、56、57、58、59、62、63、66、69、70、72、75、83、85、86、91、94、95、96、97、98、100、103、105、106、112、113、120、127、130、133、134、140、143、148、149、150、151、161、165、166、167、168、174、175、176、177、180、183、190、193、198、211、216、223、224、231、232、237、240、242、252、253、256、259、263、264、270、273、278、280、283

ニ．Ｃ本とＦ本のみに共通するもの（一八箇所）

34、35、38、39、40、41、44、52、65、67、79、81、82、89、118、121、124、220

ホ．三本とも相違するもの（二九箇所）

17、21、25、45、46、47、61、64、71、76、87、88、92、102、110、119、129、135、136、154、156、184、207、238、239、251、257、258、284

先に論及したように、Ｆ本がⅠ系統のＢ本の祖本に據ったものである以上、そのまた祖本ともいうべきＡ本と共通する點が多いのは當然としても、ここで特に注目すべきは、Ｃ本のみと共通する部分が少なからず存在するということであって、このことは、Ｆ本がＣ本のようなⅡ系統の異本をも參照していることを示すものと言える。

しかし、Ｆ本がⅠ、Ⅱ系統の異本から繼承したと考えられるところは、全二八五箇所のうち、Ａ本、Ｃ本の雙方と共通する一九箇所、Ａ本と共通する八九箇所、Ｃ本と共通する一八箇所の計一二六箇所に過ぎず、全體の半分にも滿たない。

從って、Ｆ本が、Ⅰ、Ⅱ系統の異本を參照していることは否定できないにしろ、その外にも、その本文の形成にかなり重要な役割を果たした、何らかの異本が存在したと想定せざるをえないのであるが、この事實は、先に掲げた、Ｆ本に附された羅適の後序に、

「然以文多脱誤。因廣求別本勘校。十年間凡得八本。惟杭越建陝四本文多同。因得刊正冤句。」

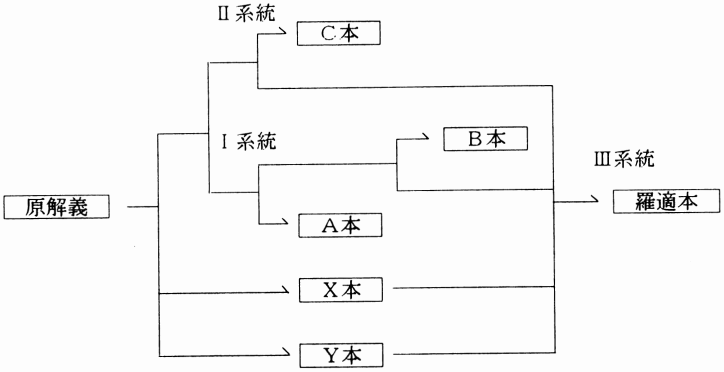
と、總計四本を校合したと言っているのと正しく對應するものである。

もっとも、Ⅰ、Ⅱ系統の二本が、それぞれ、羅適の言う「杭越建陝四本」のどれに當たるかは明らかではないが、いずれにせよ、羅適刊行本が、古くからそのような形で存在したものではなく、その刊行に際して、Ⅰ、Ⅱ系統の二本と、その他、二本（これを、假に、X本、Y本とする）とを校合して、全く新たに作り出されたものであることは間違いない。

ところで、先に見たように、A本とC本との間では、比較的共通點が多く見られる。このことは、A本とC本の分岐が比較的新しいことを示すものであり、兩者に共通する祖本がかつて存在したことを想定せしめる。

これに對して、C本とF本との共通點は、A本とF本とのそれに比較しても極めて少ないが、これは、F本が用いたX本、Y本が、A本とはある程度近いものの、C本とは全く異なる系統に屬するものであったことを示すものであろう。

つまり、これら諸本の關係は、以下のごときものであったと推定されるのである。



3．諸本に引用される『解義』について

既述のごとく、『解義』は様々な文獻に引用されているが、それらの中には、かなり成立の古いものも含まれているので、古形の『解義』の形態を知るためにも、それら引用文の系統の解明は、是非とも必要である。そこで、以下、比較的成立の古いものを中心に、それを行ってゆきたい。なお、『金剛經變相』は成立

も古く、比較的多量の引用文を含むという點で貴重であるが、これについては別に考察する豫定であるから (40)、ここでの言及は差し控えることにしたい。

イ．『従容録』所引の『解義』

『従容録』は、詳しくは「萬松老人評唱天童覺和尚頌古従容庵録」と言い、宋の天童正覺（1091-1157）の頌古を、元の萬松行秀（1166-1246）が評唱したものであり、その成立は、序文に附される「評唱天童従容庵録寄湛然居士書」によって「癸未」、即ち、太祖一八年（南宋嘉定一六年、1223）と知られる。

従って、前述のごとく、『解義』は非常に多くの文獻に引用されているのであるが、『従容録』は、それらの中でも『金剛經集解』とともに最も古く、その引用は、宋代に流布していた『解義』を髣髴させるものとして、極めて貴重である。

そこで、『従容録』の引用箇所 (41) を他の主要な異本と比較してみると、次のようになる。

	従容録所引	Ⅰ系統	Ⅱ系統	Ⅲ系統		箇所
		A本	C本	F本	K本	
1	持經之人	持經人	持經之人	←	←	447/11
2	合得	←	←	各得	←	447/11
3	人	天人	←	←	←	447/11
4	多生	←	←	前生	←	447/11
5	雖持此經	雖得受持諸佛如來甚深經典	←	←	←	447/11～12
6	敬養	人恭敬供養	←	人□□□養	人恭敬供養	447/12
7	持經	受持經	受持經典	←	←	447/12
8	我人	←	人我	←	←	447/12
9	有犯不校常修	心無惱恨蕩然無所計較念念常行	←	□無惱恨蕩然無所計較念念常行	心無惱恨蕩然無所計較念念常行	447/13
10	歴劫重罪悉皆消滅	曾無退轉以能如是修行故得從無量劫以至今生所有極惡罪障悉皆銷滅	曾無退轉以能如是修行故得從無量劫以至今生所有極重惡障悉皆消滅	行曾無退轉以能如是修行故得無量劫以至今生所有極惡罪障竝能消滅	←	447/13～448/1
11	先世	←	先世者	先世	生世	448/1
12	今世	←	今世者	今世	←	448/1
13	不能住	←	←	不得住	←	448/2
14	消滅	銷滅	消滅	←	←	448/2
15	菩提	菩提也	←	←	←	448/2

これによって、行秀が用いた『従容録』が、かなり古い形態のものものであったことが知られるであろう。即ち、2、4、13は、Ⅰ、Ⅱ系統の本と共通し、Ⅲ系統とは一致せず、特に8では、Ⅰ系統とのみ合致している。また、10

で、Ⅲ系統が「竝能」とする所を「悉皆」とするのも、Ⅰ、Ⅱ系統との親近性を示すものである。

3、5、6、7、9、10では、『従容録』の引用は他本と大いに異なるが、このうち、3などは單なる誤りと見てよいであろうし、その外については、引用が取意であるためと見做しうる。従って、これらによって、これが基づいたテキストがⅠ系やⅡ系と大幅に異なるものであったと考える必要はないと思われる。

ロ．『文獻通考』所引の『解義』

『文獻通考』は、宋の咸淳年間（1265-1274）の進士である馬端臨の撰で、宋末・元初の成立とされているが(42)、既に指摘されているように(43)、これには、

「禪宗金剛經解　一卷」

として『解義』が掲げられ、その解説の中で、慧能の序文の一部が引用されている(44)。その文章を諸本と比較すると以下のようになる。

	文獻通考所引	Ⅰ系統	Ⅱ系統	Ⅲ系統		箇所
		A本	C本	F本	K本	
1	至剛	至堅	←	←	←	419/14
2	なし	←	←	一本作破字	なし	419/15
3	なし	←	不見佛性是名衆生	←	←	419/16
4	なし	口雖誦經光明不生 外誦内行光明齊等 内無堅固	←	←	←	419/ 16～17
5	不知	←	山不知	←	←	420/ 1
6	亦	寶亦	←	←	←	420/ 1
7	鏨鑿	←	斬鑿	鏨鑿	←	420/ 2
8	烹煉	烹鍊	←	←	←	420/ 2
9	爲鑛	喩鑛	←	←	←	420/ 3
10	勇猛	←	←	猛勇	←	420/ 3
11	鏨鑿	←	斬鑿	鏨鑿	←	420/ 3
12	礦（三箇所）	鑛	←	←	←	420/ 4
13	烹煉	烹鍊	烹煉	烹鍊	←	420/ 5
14	以爲	爲之	←	←	←	420/ 5

このうち、2、3、5、10によって、この本が依用した『解義』が、Ⅰ、Ⅱ系の古い形態のものであったことが知られるが、特に、3、5によって、それが、六地藏寺本（A本）と同じ、Ⅰ系統のものであったことが分かる。

ハ．『廬山蓮宗寶鑑』所引の『解義』

從來、全く指摘されていないと思われるが、元代の白蓮宗の文獻である『廬山蓮宗寶鑑』巻十にも、『解義』の引用は見ることができる。即ち、「辯一合相」と題する箇所に、『金剛經』を引いた後に、

「六祖云。心有所得。即非一合相。心無所得。即是一合相。是也。」(45)

と述べるのは、正しく『解義』からの引用である。

そこで、この文を諸本と比較してみると次のようになる。

	蓮宗寶鑑所引	Ⅰ系統	Ⅱ系統	Ⅲ系統		箇所
		A本	C本	F本	K本	
1	心有	←	←	心存	心有	460/12
2	即	故則	故即	←	←	460/12
3	即是	是名	←	←	←	460/13

非常に短い引用であるため、これのみでは、何とも判斷しかねるが、『廬山蓮宗寶鑑』は、普度（?-1330）が大德九年（1308）に、宗内の邪説を正すために撰述したものとされるから、その成立は『文獻通考』からそれほど隔たってはいない。とすれば、それと同じく、これが比較的古い異本によった可能性も否定できないであろう。

ニ．日本の文獻に引かれる『解義』について

『解義』の引用は、中國のみならず、日本の文獻にも見ることができる。先ず、西大寺系律學を傳える英心（1289-1354）が、德治三年（1308）に著した『菩薩戒問答洞義抄』に次のように見えている。

「則所依金剛經曰。須菩提白佛言。世尊。頗有衆生。得聞如是言説章句。生實信不。佛告須菩提。莫作是説。如來滅後。後五百歳。有持戒修福者。於此章句。能生信心。以此爲實。當知是人。不於一佛二佛三四五佛而種善根。已於無量千萬佛所。種諸善根。聞是章句。乃至一念生淨信者。第六祖慧能大師註曰。若復有人能持大乘無相戒。不妄取諸相。不造生死業。一切時中。心常空寂。不被諸相所縛。則是無住心。於如來深法能信入。此人所有言説。眞實可信等 已上。」(46)

また、時宗第七祖の託何（1285-1354）が撰した『器朴論』巻上にも、

「故金剛經莊嚴淨土分。告須菩提。以實相教莊嚴淨土。其實相者名號也。註金剛經莊嚴淨土分云。假如以七寶莊嚴淨土者非也。六塵不染。當以定慧之實莊嚴。口念阿彌陀佛。諸佛淨土出生念佛故也。同註六祖解云。過去心不可得。前念妄心瞥然已過。追尋無有處所。是名佛 釋迦佛。現在心不可得。眞心無相。憑何得見。若心清淨。内離二法。外離諸相。無諸心。是名爲佛 彌陀佛。未來心不可得。本無可得。習氣已盡。更不復生。了此三心。皆不可得。是爲佛 彌勒佛。」(47)

と、『解義』からの引用がある。

これらを諸本の當該部と比較すると次のようになる。

	洞義抄所引	Ⅰ系統	Ⅱ系統	Ⅲ系統		箇所
		A本	C本	F本	K本	
1	若復	若	若復	←	←	430/13
2	則是	即是	←	←	←	430/14
3	無住心	←	無所住心	←	←	430/14
4	能	心能	←	←	←	430/14

	器朴論所引	Ⅰ系統	Ⅱ系統	Ⅲ系統		箇所
		A本	C本	F本	K本	
1	前念	者前念	←	←	←	453/ 5
2	瞥然	瞥爾	←	瞥然	潛然	453/ 5
3	所是名佛〈釋迦佛〉	所	←	←	←	453/ 5
4	眞心	者眞心	←	←	←	453/ 5
5	見若心清淨内離二法外離諸相無諸心是名爲佛〈彌陀佛〉	見	←	←	←	453/ 6
6	本	者本	←	←	←	453/ 6
7	是爲佛〈彌勒佛〉	是名爲佛	←	←	←	453/ 6

これによって見れば、兩者はほぼ同時の成立であるが、その基づいた『解義』が全く系統を異にするものであった可能性も否定しきれない。即ち、兩者とも正確な引用とは見られないので、確實なことは言えないのであるが、『洞義抄』の引くそれが、3によって六地藏寺本と同系統のものであったと見得るのに對して、『器朴論』が依用したものは、2によって羅適刊行本の流れを引く、五山版と同系統のものであったと考えられるのである(48)。

ホ．清代の『金剛經』の註釋書に引用される『解義』について

『解義』の引用は、清代に多く編まれた『金剛經』の註釋書にも、しばしば見ることができる。先に掲げた、

a．『金剛經如是解』（順治七年〈1650〉無是道人撰）
b．『金剛經會解了義』（順治一八年〈1661〉徐昌治撰）
c．『金剛經彙纂』（乾隆五八年〈1793〉孫念劬撰）
d．『金剛經闡説』（嘉慶二一年〈1816〉存吾撰）

などがその代表的なものであるが、これらは成立が新しいうえに、他書からの孫引きが多く、また、引用する態度にも問題があって、獨自の資料價値を有するものはほとんどない。

例えば、cの『彙纂』などは、既に示したように(49)、直接、『解義』から引用を行っているばかりでなく、『解義』に基づいて成立した『直解』や、『解義』からの引用を含む「五十三家註」にも依據しているうえに、『解義』からと認められる部分についても、必ずしも正確な引用ではないため、その系統を知ることは困難である。

同様のことは、aの『如是解』についても言える。これにも『解義』からの引用と『直解』からの引用が竝存するばかりか、『解義』からの引用も嚴密でなく、その系統を判斷するだけの材料に乏しい。

また、dの『闡説』についても、その引用箇所が全て「五十三家註」に見られるものである上に、その文字も多く一致するから(50)、これからの孫引きと見るべきである。

殘るは、bの『會解了義』のみであるが、これは、これらの註釋書のなかでは比較的成立が古いうえに、『解義』に直接基づき、しかも、引用文も豐富であるから、當時流布していた『解義』の姿を傳えるものとして、その史料價値は高い（もっとも、その引用は必ずしも正確でない）。

そこで、代表的と思われる、次の二つの引用文について、その本文を他本と比較してみると、次のようになる。

「如來指示三界九地衆生。各有涅槃妙心。令自悟入無餘。無餘者。無習氣煩惱也。涅槃者。圓滿清淨。貪求不生。度者。渡生死大海也。佛心平等。普願

一切衆生。同入圓滿清淨。同渡生死大海。」[51]

「應者唯也。唯如上所説之教。住無相布施。即是菩薩。」[52]

	會解了義所引	I系統	II系統	III系統		箇所
		A本	C本	F本	K本	
1	無餘無餘者無	無餘者無餘	無餘無餘者無	←	←	426/16
2	貪求	義令滅盡一切習氣	義滅盡一切習氣令永	←	←	426/17
3	なし	方契也	方契此也	←	←	426/17
4	なし	與	←	←	←	426/17
5	なし	無想涅槃	無餘涅槃	←	←	427/ 1
6	唯也	順也	←	唯也	←	429/10
7	唯	但順	←	但唯	←	429/10
8	無相	無住相	無相	←	←	429/10
9	即是	←	即	即是	←	429/10
10	菩薩	←	菩薩也	←	菩薩	429/10

このうち、3、4、5などは、引用の際の省略で、『會解了義』が正確に引用を行っていないことを示すものであろうが、1、8、9などによれば、本書が基づいた『解義』が、F本やK本と同様、羅適刊行本の系統を引くものであることは間違いない。K本の存在によって知られるごとく、この系統の本は明代に流布を見たのであるから、『會解了義』がそれと同系統の本を用いたというのは、ごく自然に理解できることである[53]。

4．諸本に校合される『解義』について

先にも言及したように、『解義』の現存する諸本には、しばしば異本との校異が註記されているが、それらは、當時存在した異本の本文を傳えるものとして、非常に重要な資料價値を有している。そこで、最後に、それらについて検討しておこう。

そのような註記が見られるのは、以下の諸本であり、その内容は、本文末尾の《附表2》に示した通りである[54]。

1．六地藏寺藏寫本（A本）

2．『金剛經五家解』合糅本（C本）

3．京都大學人文科學研究所藏五山版（F本）

4．仁和寺藏寫本（G本）

5．無窮會藏寫本（H本）
6．叡山文庫藏寫本（I本）
7．江戸時代町版（L本）
8．續藏經所收本

以下、順次、これらの註記について検討して行こう。

イ．A　本

A本の註記は、甚だその數が多いが、そのほとんどが、F本、J本といった、羅適刊行本系の諸本と一致する。しかも、40や49によれば、その所依は、J本のような江戸以降の本ではなく、F本のような、より古い形態の本であったことが知られる。

從って、恐らくは、鎌倉から戰國にかけてのある時期に、五山版、あるいは、その底本などと對校されたものであろう。

ロ．C　本

C本における異本の註記は、實は、69の一箇所に過ぎない。即ち、「離相寂滅分第十四」の慧能の解義の一節、

「声聞久著法相。執有爲解。」

の下に、

「爲解一作所解」

という註記が小字雙行で附されているのを見るのみである[55]。

この註記は、恐らく、得通（1376-1433）が本書を校訂した際のものであろうが[56]、『五家解』の末尾に附された得通の「決疑」には、他にも二箇所（42、64）ほど、異本の文字について觸れているので[57]、これも同一の異本に基づく註記と見做し、《附表2》では、一緒に掲げてある[58]。

これら三箇所の註記によれば、得通が對校に用いた異本が、A本、B本と同様、I系統に屬する古いものであったことは疑いえないであろう。三箇所のうちの二箇所は、I系統の諸本とのみ共通するからである。

従って、これによって、六地藏寺本のような古い異本が、古く朝鮮にも傳わっていたことが知られるのである。

ハ．Ｆ　本

Ｆ本に見られる註記が、羅適が本書を刊行するに際して、數種の異本に基づいて彼自身が附したものであることは、先述のごとくである。従って、これら註記が同一の異本に依るものであるかは極めて疑問であるが、その内容を見てみると、既に論じられているように(59)、その多くが六地藏寺本や五家解本といった比較的古い本と一致している。

これは、恐らく、羅適が底本に用いた本が、これら諸本と最も系統が離れていたため、註記すべき對象が、自然に、これら諸本に絞られたためであろう。

ニ．Ｇ　本

Ｇ本には朱書と墨書の註記が存在するが、墨書のそれは、朱書のものより時代が降るようである。そこで、ここでは、朱書の註記のみを問題にすることにしたい。この中には本文と全く同じ文字を註記したものも多く、その意味については問題が殘るが、一應、それも含めて《附表２》には掲げてある。

しかし、10と52の箇所ではＣ本と一致するのに、10と80の箇所ではＪ本と一致するといった具合で、そこに校合されている異本を、今日知られている諸本の中に特定することは不可能のごとくである。

ホ．Ｈ　本

Ｈ本の場合、例えば、32の箇所では、慧能の解義の「受」という言葉に對して、

「愛イニ」

という註記がなされているので、それが異本を對校していることは間違いない。しかし、この例に見るように、その内容は、單なる誤字の修正に過ぎないものも多く、必ずしも資料價値が高いとは思えない。

しかも、30の箇所などに依れば、恐らくは本文を確認するために、底本と同じ、羅適刊行本系の一異本と校合したに過ぎないごとくである。

ヘ. I 本

《附表2》に見るように、I本にも、二箇所、異本の註記と見られるものがあるが、そのいずれについても、その系統を決める手掛かりとはならない。しかし、このような些細な註記をわざわざ附しているということは、その本文に大きな相違がなかったことを示すものとも言えるから、やはり、同系統の異本と校合したものと見做すべきであろう。

ト. L 本

L本の場合、その基づいた異本は明確である。即ち、その註記總數、三一のうち、J本と共通するものが二七と、その大多數を占めている。しかも、その中にJ本とのみ一致する箇所が多く含まれているので、その註記の多くが、J本に基づくものであることは疑いえない。

J本と一致しない註記、四箇所のうち、三箇所については、他に一致する異本を見出すことはできないが、59の一箇所だけは、K本のみと共通する（L本のこの部分の本文は「此疑」で、J本などと一致する）。従って、K本が校合されたことも間違いない。

先に論じたように、このL本は、K本を底本にJ本を校合して成立したものと見られるのであるが、この事實は、この推定とよく一致する。即ち、L本は、基本的には、K本の本文をそのまま繼承したが、59の箇所に限っては、J本の本文を採用し、K本の本文は註記に回したのである。

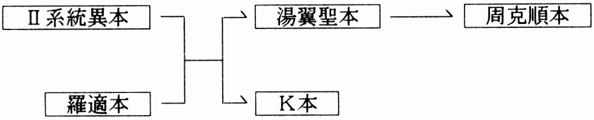
チ. 續藏本

續藏本に、編者の附した異本（「唐本」と呼ばれている）の校異註が存すること、更に、その註記が、恐らくは周克順が康熙六年（1667）に上梓した刊本によるものであることについては、既に『慧能研究』に言及がある[60]。

問題は、その異本の系統であるが、《附表2》で見る限り、その全てにおいて、K本、即ち、内閣文庫等所藏の明代刊本と一致しているから、その系統を引くものとみてよい。

續藏本の末尾では、周克順の「重刻六祖金剛經解跋」に先立って、順治十年（1653）の日付をもつ、湯翼聖の同名の跋文が置かれている。従って、周克順の刊本は、この本に基づくものと認めてよいはずである。つまり、これら諸本の關

係は、次のようになる(61)。



5．諸本の系統と古形への復元

以上に述べた事柄を綜合すれば、主要な諸本間の關係は、およそ、次頁の《圖表3》のようになろうが、この圖表からも知られるように、『解義』の諸本は、

1．羅適刊行本以前の形態を傳えるもの

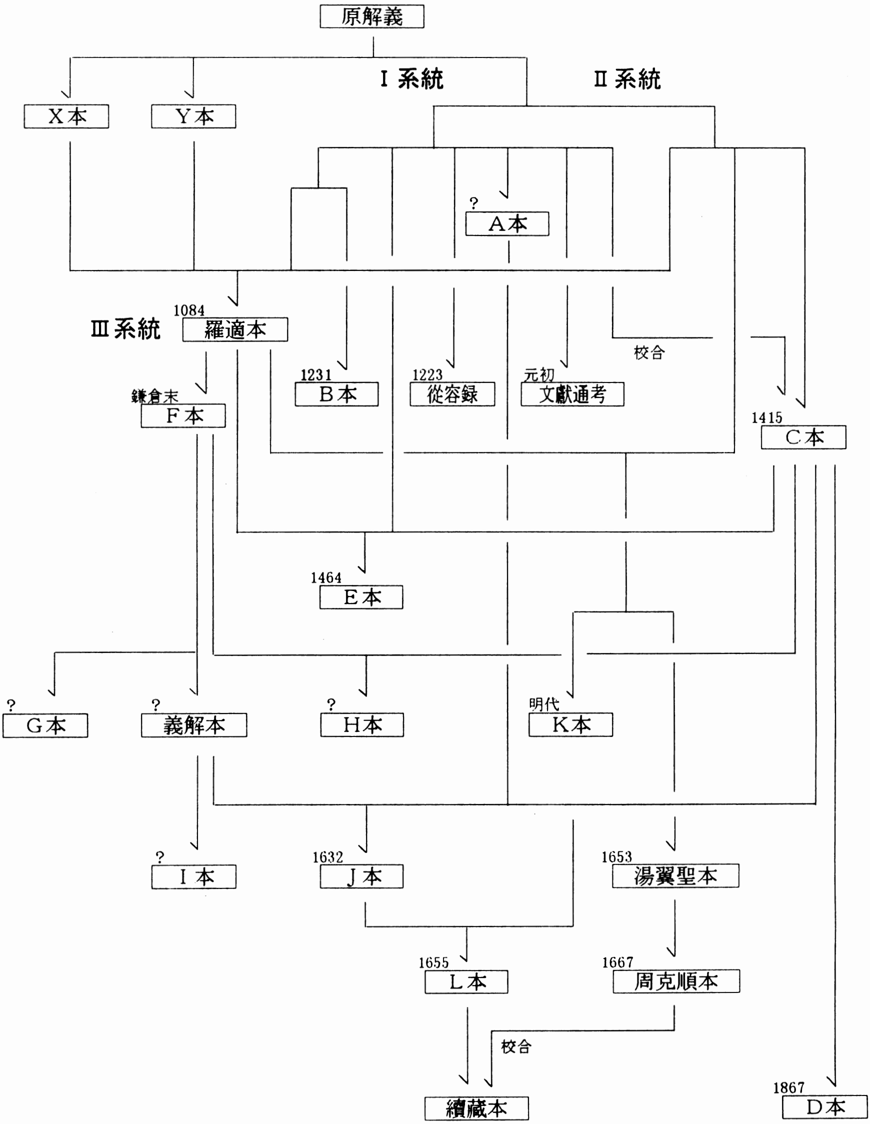
2．羅適刊行本の影響下に成立したもの

という二つに大別することができる。それほどに、羅適刊行本の影響は大きかったのであり、京都大學人文科學研究所所藏の五山版や、朝鮮の諺解本の存在は、その東アジア全域への擴大を示すものとも言える。しかし、上に検討したように、中國において、宋、元など、比較的早い時期に實際に流布していた本の多くは、それ以前の形態のものだったのであり、羅適本系の諸本が主流になったのは、明代以降であったと見てよいのである。當時は、從來から寫本で傳わったものも多かったであろうし、しばしば『解義』が開版されたことが知られるから、それらの中には、そうした古い形態のものを底本にしたものもあったと考えられる。楊圭が言及している「新州六祖註本」は、恐らく、そうしたものの一つであったであろう(62)。

明代以降、羅適本が流布したのは、それらの諸本が散逸したためであろうが、上の考察から明らかなように、實際には、それは古形を傳える善本などではなく、かなり特異なテクストを底本にし、それに種々の異本によって改變を加えた「羅適再編本」と呼んでよいようなものだったのである。從って、『解義』自體の思想を理解しようとしたり、それによって禪の形成過程を辿ったりしようとする場合、どうしても、それ以前の形態に復元する必要が出てくるのである。

上の論述によって、そうした比較的古い形態を傳えるものとして、數種の異本が存在することが判明したが、中でも注目すべきは、六地藏寺本の存在であろ

《圖表３》



原解義
Ｉ系統
Ⅱ系統
Ｘ本
Ｙ本
?
Ａ本
Ⅲ系統
1084
羅適本
1231
Ｂ本
1223
從容録
元初
文獻通考
校合
鎌倉末
Ｆ本
1415
Ｃ本
1464
Ｅ本
?
Ｇ本
?
義解本
?
Ｈ本
明代
Ｋ本
?
Ｉ本
1632
Ｊ本
1653
湯翼聖本
1655
Ｌ本
1667
周克順本
校合
續藏本
1867
Ｄ本

う。六地藏寺本は、先にも觸れたように、五山版（Ｆ本）などに見られる「非説所説分第二十一」の經文、

「爾時。慧命須菩提白佛言。世尊頗有衆生。於未來世。聞説是法。生信心不。佛言。須菩提。彼非衆生。非不衆生。何以故。須菩提。衆生衆生者。如來説非衆生。是名衆生。」[63]

を缺くばかりか、他本に見られる、

「靈幽法師加此慧命須菩提六十二字。是長慶二年。今見在濠州鐘離寺石碑上記。六祖解在前故無解。今亦存之。」（五山版）[64]

「幽冥禪師續加。」（五家解）[65]

などといった註記も見られないのであって、このことは、それが極めて古い形態を傳えるものであることを示唆しているのである。

更に、この本では、經文に關して甚だしい不備が存在する。即ち、「如理實見分第五」の冒頭において、

「須菩提。於意云何。可意云何。可以身相見如來不。不也世尊。不可以身相得見如來。何以故。如來所説身相。即非身相。」[66]

と經文を掲げた後、それに對する慧能の解義を擧げ、再び、

「何以故。如來所説身相。即非身相。」[67]

と、上と全く同じ經文を掲げたうえで、この句に對する解義を附しているのである。

また、「莊嚴淨土分第十」の冒頭において、

「佛告須菩提。於意云何。如來昔在然燈佛。於法有所得不。不也世尊。」[68]

と經文を擧げ、解義の後、再び、

「經。世尊。如來在然燈佛所。於法實無所得。」[69]

と經文を擧げるのであるが、この冒頭の「世尊」は、明らかに先の經文末尾のそ

れの重複である。

このような、初歩的な不備が殘されているということは、實は、この六地藏寺本が、ほとんど全く校訂を經ていないということを示すものに他ならない。從って、恐らく、六地藏寺本は、その成立の當初の姿をかなりの程度、忠實に傳えていると見てよいのである。しかし、問題は、どうしてこのように古い『解義』が日本に傳わっているのかということである。

ここで併せ考えるべきは、冒頭で言及した圓珍將來本の存在である。先に論じたように(70)、『解義』の成立が八世紀末から九世紀初頭にかけてであったとすれば、圓珍の入唐は、まさにそれに續く時代なのであって、果たして彼が『解義』を齎したとすれば、それは必ずや、極めて古い形態を留めるものであったに違いないのである。とすれば、圓珍將來本をもって六地藏寺本の祖本に比定しようとするのは、あながち不自然なことではないであろう。

このように、六地藏寺本が極めて古い形態を傳え、しかも、その傳承も、ある程度確かであるとすれば、『解義』の古形を復元するために、その底本として六地藏寺本を用いんとするのは、むしろ當然のことと言えるだろう。もっとも、六地藏寺本の本文は、既に『慧能研究』の「六本對校 金剛經解義」において、五山版に校合する形で示されてはいる。しかし、殘念ながら、それには極めて多くの錯誤が含まれているのである。

このような多くの異本の校合は、極めて繁雜な作業であるから、誤植などの技術的な問題はある程度やむを得ないにしても、特に問題なのは、この寫本は、後に註記の形で、より新しい系統の異本によって本文を改めている場合がしばしば見られるのに、『慧能研究』では、それを單なる寫誤の訂正と見做し、そのまま元來の本文と考えてしまったために、その校異によって復元される六地藏寺本は、實際にそうである以上に五山版に近いものとなっており、その獨自の意義が十分には傳わらなくなってしまっているということなのである。

例えば、『慧能研究』では、「大乘正宗分第三」に關して五山版の本文を次のように掲げる。

「令自悟入無餘。無餘者無習氣煩惱也。」(71)

『慧能研究』では何も述べられていないが、實は、六地藏寺本では、もともと

「無餘。無餘者無」の部分が「無餘者無餘」となっており、後に「無餘」の上に、註記の形で重ねて「無餘」と補っているのである。

これだけを見れば、確かに、この註記は單なる書き誤りの修正と見えぬことはない[72]。從って、『慧能研究』の編者が、特にこれに注意しなかったことも理解できないわけではないが、これを異本と比較するとき、これが實は、後の書き換えにほかならないことが明らかとなる。即ち、『金剛經集解』にも、この部分が引用されているのであるが、そこでは次のように、修正前の六地藏寺本と全く同じ本文となっているのである。

「令自悟入。無餘者。無餘習氣煩惱也。」[73]

こうした事實を目にするとき、我々は、これらの註記が、ほとんど全て、異本による本文の書き換えであると認めざるを得ないであろう。

とすれば、例えば「莊嚴淨土分第十」で、五山版などが、

「色身雖大。内心量小。不名大身。内心量大。等虛空界。方名大身。色身縱如須彌。終不爲大也。」[74]

とするところを、六地藏寺本が、

「色身大。内心量小。不名大身。内心量大。是名大身。」[75]

とし、註記によって、「是」を「等虛空界。方」に變え、末尾に「色身縱如須彌。終不爲大也」を補って、五山版等と全く同形に改めているのも、當然、異本による後の改變と見做すべきであろう。ところが、この場合も、『慧能研究』は註記すら行わず[76]、あたかも六地藏寺本が當初から五山版と同じ本文であるかのごとく扱っているのである。

このように、『慧能研究』の掲げる六地藏寺本の本文には、決して無視できぬ重大な問題が含まれているのであって、私がここで新たに校本を發表しようとする所以の多くは、實はここに存するのである。

こうして、六地藏寺本を底本として用いる場合、その本文の改變や抹消、註記の意味等を注意深く解釋する必要が出てくるわけであるが、しかしながら、異本による改變か、單なる寫誤の訂正かの區別は、必ずしもいつも容易にできるとは限らない。しかも、六地藏寺本は、寫本として今日に傳えられたため、

その本文には、傳承の過程で生じた誤りが、かなりの數、含まれていると考えるのが自然である。これらの點を明らかにするためには、他本との比較が必要不可缺となる。

その際、注意しなくてはならないのは、なるべく系統の近い異本と對校を行わなくてはならないということであろう。もし假に、全く系統を異にするものを校合し、あまつさえそれによって本文を改めたりした場合、古形の復元を目指しながら、却ってその中に後の改變を持ち込むことになりかねないからである。

しかしながら、六地藏寺本は天下の孤本であって、それと同系統の異本の存在は、他には全く知られていない。ただ、先に論じたように、次の二つは羅適刊行本以前の形態を留め、六地藏寺本ともかなり近い關係にあるので、それとの對照は非常に有益であろうと思われる。

1．『金剛經集解』所引本（Ｂ本）
2．『金剛經五家解』合糅本（Ｃ本）

更に、次の諸本は、その本文の一部が知られるに過ぎないが、上述のごとく、六地藏寺本などと同系統の異本に基づくと考えられるから、是非とも參照すべきである。

1．『從容録』所引本
2．『文獻通考』所引本
3．羅適刊『金剛經解義』校合本
4．『金剛經五家解』校合本

ただ、これらの多くは、必ずしも原本の忠實な引用とは認めがたいものであるから、これらの取り扱いは、先の二本以上に愼重でなくてはならないであろう。

いずれにせよ、先にも言うように、六地藏寺本は天下の孤本なのであるから、これら諸本との校合が有効かつ必要であることは間違いないにせよ、これらによってその本文を改めることは、必要最小限に留めねばならないであろう。

以上のような諸點に留意して作成した『解義』の復元本文が、本論文の末尾に附録として掲げたものである。

むすび

以上で、『金剛經解義』の諸本の系統の解明と古形の復元は、ひとまず終了した。勿論、今後も新たな異本の發見がないとも限らないし、恐らく、他にも私の見落としている資料が多く存在することであろうから、今後も、なお一層の研究が必要であろうと思われる。讀者諸賢の御教示を請う所以である。

《附表1－1》

No.	A本	B本	C本	D本	E本	F本	G本	H本	I本	J本	K本	L本	箇所	パターン
1	故		←	←	是故	←	←	←	←	←	←	←	419/ 5	ACD／EFGHIJKL
2	其義		←	←	聖義	←	←	←	←	聖儀	←	←	419/ 5	ACD／EFGHI／JKL
3	庶斷		←	←	斷除	←	←	←	←	←	←	←	419/ 5	ACD／EFGHIJKL
4	即不假		←	←	不假	←	←	←	←	←	←	←	419/ 6	ACD／EFGHIJKL
5	從凡		←	←	超凡	←	←	←	←	←	←	←	419/ 6	ACD／EFGHIJKL
6	但能		←	←	若能	←	←	←	←	←	←	←	419/ 8	ACD／EFGHIJKL
7	大悲		←	←	佛大悲	←	←	←	←	←	←	←	419/11	ACD／EFGHIJKL
8	聞法		聞説	←	聞法	←	←	←	←	←	←	←	419/11	AEFGHIJKL／CD
9	なし		←	←	←	一本作破字	←	←	←	なし	←	←	419/15	ACDEJKL／FGHI
10	鑒鑒		斬鑒	←	鑒鑒	←	←	←	←	←	←	←	420/ 2	AEFGHIJKL／CD
11	勇猛		←	←	←	猛勇	←	勇猛	猛勇	勇猛	猛勇	←	420/ 3	ACDEHJ／FGIKL
12	鑒鑒		斬鑒	←	鑒鑒	←	←	←	←	←	←	←	420/ 3	AEFGHIJKL／CD
13	祇緣		←	←	祇爲	←	←	←	←	←	←	←	420/ 8	ACD／EFGHIJKL
14	遂假智慧		←	←	故脩智惠以	故脩智慧以	←	←	故脩智惠以	←	故脩智慧以	←	420/ 8	ACD／EFGHIJKL
15	離生滅		←	←	滿離生滅相	←	←	←	←	←	←	←	420/10	ACD／EFGHIJKL
16	應内		←	←	當内	←	←	←	←	←	←	←	420/12	ACD／EFGHIJKL
17	波羅蜜		波羅蜜也	←	波羅蜜經	←	←	←	←	←	←	←	420/13	A／CD／EFGHIJKL
18	梵音		梵語	←	梵音	←	←	←	←	梵語	梵音	←	422/15	AEFGHIKL／CDJ
19	覺知		←	←	←	←	←	←	←	←	覺諸	←	422/15	ACDEFGHIJ／KL
20	言與者		與者	←	言與者	←	←	←	←	←	←	←	423/ 2	AEFGHIJKL／CD
21	爲世尊自城		自城	←	爲自城	←	←	←	←	←	←	←	423/ 5	A／CD／EFGHIJKL
22	故言		←	←	←	←	←	←	←	←	故曰	←	423/11	ACDEFGHIJ／KL
23	諸大		諸	←	諸大	←	←	←	←	←	←	←	424/10	AEFGHIJKL／CD
24	付囑後念		付囑	←	付囑後念	←	←	←	←	←	←	←	424/12	AEFGHIJKL／CD
25	若		問若欲	←	問欲	←	←	←	←	←	←	←	425/ 4	A／CD／EFGHIJKL

#《附表１－２》

26	降伏		降伏其心	←	降伏	←	←	←	←	←	←	←	425/ 4	AEFGHIJKL／CD
27	善知我意		←	←	善得我意	←	←	←	←	←	←	←	425/ 6	ACD／EFGHIJKL
28	自心		其心	←	自心	←	←	←	←	←	←	←	426/ 4	AEFGHIJKL／CD
29	眞名		←	←	眞者	←	←	←	←	←	←	←	426/ 5	ACD／EFGHIJKL
30	契如名		←	←	如者	←	←	←	←	←	←	←	426/ 5	ACD／EFGHIJKL
31	不亂		←	←	←	不虛	←	←	←	←	不亂	←	426 /5	ACDEKL／FGHIJ
32	曰是		←	←	即是降伏其心也	←	←	←	←	←	←	←	426/ 6	ACD／EFGHIJKL
33	なし		←	←	←	不虛一本作不亂	←	←	←	←	なし	←	426/ 6	ACDEKL／FGHIJ
34	總標也次下別列九類	一切者總標也次下別列九類	なし	←	←	←	←	←	←	←	←	←	426/ 7	AB／CDEFGHIJKL
35	墮阿鼻	←	多淪墜	←	←	←	←	←	←	←	多偏墜	←	426/10	AB／CDEFGHIJ／KL
36	但言	←	但見	←	但言	←	←	←	←	←	←	←	426/11	ABEFGHIJKL／CD
37	なし		←	←	云多淪墜	云多淪墜一本作墮阿鼻	←	云多淪墜一作墮阿鼻	云多淪墜一本作墮阿鼻	云多淪墜一作墮阿鼻也	なし	←	426/14	ACDKL／E／FGHIJ
38	者無餘	←	無餘者無	←	←	←	←	←	←	←	←	←	426/16	AB／CDEFGHIJKL
39	令滅盡一切習氣	←	滅盡一切習氣令永	←	←	←	←	←	←	←	←	←	426/17	AB／CDEFGHIJKL
40	無想	←	無餘	←	←	←	←	←	←	←	←	←	427/ 1	AB／CDEFGHIJKL
41	法相		諸相	←	←	←	←	←	←	諸法相	←	←	427/ 7	A／CDEFGHI／JKL
42	何		又何	←	何	←	←	←	←	←	←	←	427/ 8	AEFGHIJKL／CD
43	施於人		施人	←	施於人	←	←	←	←	←	←	←	427/12	AEFGHIJKL／CD
44	法執	←	諸執	←	←	←	←		←	←	←	←	427/15	AB／CDEFGHIJKL
45	求		只求	←	以求	衹求	←	←	←	←	←	←	428/ 3	A／CD／E／FGHIJKL
46	故云無相布施	←	是不住相布施也	←	是名不住相布施也	←	←	←	←	←	←	←	428/ 6	AB／CD／EFGHIJKL
47	求		希	←	希求	←	←	←	←	←	←	←	428/ 8	A／CD／EFGHIJKL
48	福德		福	←	福德	←	←	←	←	←	←	←	428/ 8	AEFGHIJKL／CD
49	心中		胸中	←	心中	←	←	←	←	←	←	←	428/ 9	AEFGHIJKL／CD

《附表1－3》

No.	A本	B本	C本	D本	E本	F本	G本	H本	I本	J本	K本	L本	箇所	パターン
50	布施者由		布者普也	←	布施者由	←	←	←	←	←	←	←	428/10	AEFGHIJKL／CD
51	當		常	←	當	←	←	←	←	←	←	←	428/10	AEFGHIJKL／CD
52	返本		返歸	←	返本	返歸	←		←	←	←	←	428/10	AE／CDFGHIJKL
53	是名		是爲	←	是名	←	←	←	←	←	←	←	428/12	AEFGHIJKL／CD
54	終未		終不	←	終未	←	←	←	←	←	←	←	428/13	AEFGHIJKL／CD
55	人天		←	←	←	←	←	←	←	←	天人	←	428/13	ACDEFGHIJ／KL
56	度量		思度	←	度量	←	←	←	←	←	←	←	429/ 3	AEFGHIJKL／CD
57	無有限量		無限量	←	無有限量	←	←	←	←	←	←	←	429/ 5	AEFGHIJKL／CD
58	衆生性		衆生相	←	衆生性	←	←	←	←	←	←	←	429/ 7	AEFGHIJKL／CD
59	無所分別		無分別	←	無所分別	←	←	←	←	←	←	←	429/ 8	AEFGHIJKL／CD
60	順也但順		←	←	唯也但唯	←	←	←	←	←	←	←	429/10	ACD／EFGHIJKL
61	河沙		恒沙	←	恒河	←	←	←	←	←	←	←	430/ 5	A／CD／EFGHIJKL
62	若見		若悟	←	若見	←	←	←	←	←	←	←	430/ 7	AEFGHIJKL／CD
63	次下		下	←	次下	←	←	←	←	←	←	←	430/10	AEFGHIJKL／CD
64	略述於		略説	←	略述	←	←	←	←	←	←	←	431/ 1	A／CD／EFGHIJKL
65	柔和	←	和柔	←	←	←	←		←	←	←	←	431/ 3	AB／CDEFGHIJKL
66	「於六道．．．．諸善根」の 35字を 431/4 の「諸善根」の下に置く	←	「於六道．．．．諸善根」の 35字を 431/2 の「諸善根」の下に置く	←	「於六道．．．．諸善根」の 35字を 431/4 の「諸善根」の下に置く	←	←	←	←	←	←	←	431/ 4～5	ABEFGHIJKL／CD
67	盡得	←	盡能	←	←	←	←	←	←	←	←	←	431/ 7	AB／CDEFGHIJKL
68	淨信心	←	←	←	←	←	←	←	←	清淨信心	淨信心	清淨信心	431/ 7	ABCDEFGHIK／JL
69	悟解		解悟	←	悟解	←	←	←	←	←	←	←	431/10	AEFGHIJKL／CD
70	無色受		無受	←	無色受	←	←	←	←	←	←	←	431/12	AEFGHIJKL／CD
71	既立		既無	←	既亡	←	←	←	←	←	←	←	431/13	A／CD／EFGHIJKL
72	何況		況	←	何況	←	←	←	←	←	←	←	432/ 6	AEFGHIJKL／CD

《附表1－4》

73	前念		←	←	於念	←	←	前念	於念	於前念	前念	←	432/12	ACDHKL／EFGI／J
74	なし		←	←	←	不了本心	←	←	←	なし	不了本心	←	433/ 1	ACDEJ／FGHIKL
75	深淺	淺深	←	←	深淺	←	←	←	←	←	←	←	433/ 4	AEFGHIJKL／BCD
76	齊施	←	齊収	←	齊施	齊皎	←	←	←	←	齊収	←	433/ 5	ABE／CDKL／FGHIJ
77	なし		←	←	又本云聖賢說法具一切智萬法在性隨問差別令人心開各自見性	←	又本云聖賢說法具一切智萬法在性隨問差別令人心開各自見覺	又本云聖賢說法具一切智萬法在性隨問差別令人心開各自見性	←	←	←	←	433/ 6～7	ACD／EFGHIJKL
78	持用		←	←	←	←	←	←	←	←	以用	←	433/11	ACDEFGHIJ／KL
79	於性	←	於性上	←	←	←	←	←	←	←	←	←	433/11	AB／CDEFGHIJKL
80	諸有	←	←	←	←	諸利	←	←	←	←	諸有	←	433/12	ABCDEKL／FGHIJ
81	履踐	←	踐履	履踐	踐履	←	←	←	←	←	←	←	433/13	ABD／CEFGHIJKL
82	當人佛性		佛性	←	當人佛性	佛性	←	←	←	←	←	←	434/ 4	AE／CDFGHIJKL
83	照生		照中生	←	照生	←	←	←	←	←	←	←	434/ 5	AEFGHIJKL／CD
84	從此經出		←	←	←	此經出也	←	←	←	←	←	←	434/ 6	ACDE／FGHIJKL
85	其文		其經	←	其文	←	←	←	←	←	←	←	434/ 9	AEFGHIJKL／CD
86	若不見法		なし	←	若不見法	←	←	←	←	←	←	←	434/10	AEFGHIJKL／CD
87	意慧不解		意既不解	←	意不解	←	←	←	←	←	←	←	434/10	A／CD／EFGHIJKL
88	則終誦經		終	←	則誦經	←	←	←	←	←	←	←	434/10	A／CD／EFGHIJKL
89	人名一	←	名一	←	←	←	←	←	←	←	←	←	435/ 7	AB／CDEFGHIJKL
90	行從	←	←	從	往從	←	←	←	←	往來從	往從	往來從	435/ 7	ABC／D／EFGHIK／JL
91	竟遂	←	竟	←	竟遂	←	←	←	←	←	←	←	435/ 8	ABEFGHIJKL／CD
92	なし		實無往來	←	故實無往來	←	←	←	←	←	←	←	435/10	A／CD／EFGHIJKL
93	亦曰斯陀含也		故曰斯陀含也	←	なし	←	←	←	←	←	←	←	435/10	ACD／EFGHIJKL
94	可行		可得	←	←	可行	←	←	←	←	←	←	435/13	AFGHIJKL／CDE
95	無來		無不來	←	無來	←	←	←	←	←	←	←	435/14	AEFGHIJKL／CD
96	若作		若有	←	若作	←	←	←	←	←	←	←	435/16	AEFGHIJKL／CD

《附表1－5》

No.	A本	B本	C本	D本	E本	F本	G本	H本	I本	J本	K本	L本	箇所	パターン
97	有諍		有諍若有諍非阿羅漢	←	有諍	←	←	←	←	←	←	←	435/16	AEFGHIJKL／CD
98	無諍		無諍無諍者	←	無諍	←	←	←	←	←	←	←	436/ 1	AEFGHIJKL／CD
99	情無		←	←	性無	←	←	←	←	←	←	←	436/ 1	ACD／EFGHIJKL
100	常寂		常寂是名阿羅漢	←	常寂	←	←	←	←	←	←	←	436/ 1	AEFGHIJKL／CD
101	故云		←	←	故名	←	←	←	←	←	←	←	436/ 5	ACD／EFGHIJKL
102	梵音	←	是梵語	←	梵語	←	←	←	←	←	←	←	436/ 5	AB／CD／EFGHIJKL
103	此云	←	唐言	←	此云	←	←	←	←	←	←	←	436/ 5	ABEFGHIJKL／CD
104	有		←	←	亦有	←	←	←	←	←	←	←	436/ 6	ACD／EFGHIJKL
105	無諍即		無諍行即	←	無諍即	←	←	←	←	←	←	←	436/10	AEFGHIJKL／CD
106	所得心		得心	←	所得心	←	←	←	←	←	←	←	436/10	AEFGHIJKL／CD
107	常行		←	←	←	常得	←	←	←	←	←	←	436/11	ACDE／FGHIJKL
108	釋迦牟尼	←	←	←	釋迦	←	←	←	←	←	←	←	436/15	ABCD／EFGHIJKL
109	師處聽法	←	←	←	←	師處	←	←	←	←	←	←	437/ 1	ABCDE／FGHIJKL
110	知法即	←	即謂法即	←	即謂法	←	←	←	←	←	←	←	437/ 1	AB／CD／EFGHIJKL
111	寂而	←	←	←	寂然	←	←	←	←	←	←	←	437/ 2	ABCD／EFGHIJKL
112	清淨佛土		佛土清淨	←	清淨佛土	←	←	←	←	←	←	←	437/ 5	AEFGHIJKL／CD
113	事理		なし	←	事理	←	←	←	←	←	←	←	437/ 5	AEFGHIJKL／CD
114	身佛土		←	←	←	見佛土	←	身佛土	見佛土	←	身佛土	←	437/ 6	ACDEHKL／FGIJ
115	無所得心		←	←	佛心	←	←	←	←	←	←	←	437/ 7	ACD／EFGHIJKL
116	諸脩行		←	←	此脩行	←	←	←	←	←	←	←	437/10	ACD／EFGHIJKL
117	長照		←	←	←	←	←	←	←	←	常照	←	437/13	ACDEFGHIJ／KL
118	是		等虚空界方	←	方	等虚空界方	←	←	←	←	←	←	437/17	A／CDFGHIJKL／E
119	なし		色身縱如須彌終不爲大	←	なし	色身縱如須彌終不爲大也	←	←	←	←	←	←	437/17	AE／CD／FGHIJKL
120	三界中		三界	←	三界中	←	←	←	←	←	←	←	438/ 6	AEFGHIJKL／CD

《附表1－6》

121	見	←	如有	←	←	←	←	←	←	←	←	←	438/10	AB／CDEFGHIJKL
122	經若		←	←	←	←	←	←	←	←	經者	←	438/10	ACDEFGHIJ／KL
123	名聞利養		←	←	名聲利益	←	←	名色利養	名聲利益	←	←	←	438/12	ACD／EFGIJKL／H
124	清	←	若清	←	←	←	←	←	←	←	←	←	438/12	AB／CDEFGHIJKL
125	而說	←	←	←	爲說	←	←	←	←	←	←	←	438/13	ABCD／EFGHIJKL
126	人非人等	←	←	←	等	←	←	←	←	←	←	←	438/13	ABCD／EFGHIJKL
127	自心	←	更能	←	自心	←	←	←	←	←	←	←	439/ 4	ABEFGHIJKL／CD
128	念念		←	←	念念心	←	←	←	←	←	←	←	439/ 4	ACD／EFGHIJKL
129	盡		滅盡	←	除盡	←	←	←	←	←	←	←	439/10	A／CD／EFGHIJKL
130	彼岸		到彼岸	←	彼岸	←	←	←	←	←	なし	彼岸	439/11	AEFGHIJL／CD／K
131	無相行		←	←	無相之行	←	←	←	←	←	←	←	440/ 3	ACD／EFGHIJKL
132	普現		←	←	普見	←	←	←	←	←	←	←	440/ 6	ACD／EFGHIJKL
133	三十二清淨行者		なし	←	三十二清淨行者	←	←	←	←	←	←	←	440/ 9	AEFGHIJKL／CD
134	不得見		不見	←	不得見	←	←	←	←	←	←	←	440/11	AEFGHIJKL／CD
135	なし		今	←	豈	←	←	←	←	←	←	←	441/ 6	A／CD／EFGHIJKL
136	始言		始	←	始言	←	←	←	←	←	←	←	441/ 6	A／CD／EFGHIJKL
137	今		←	←	至今	←	←	←	←	←	←	←	441/ 7	ACD／EFGHIJKL
138	始		←	←	故始	←	←	←	←	←	←	←	441/ 7	ACD／EFGHIJKL
139	諦會		←	←	諦念	←	←	←	←	←	←	←	441/ 7	ACD／EFGHIJKL
140	淨體		淨	←	淨體	←	←	←	←	←	←	←	441/ 7	AEFGHIJKL／CD
141	是垢心		←	←	←	是垢	←	←	←	是垢也	是垢心	←	441/10	ACDEKL／FGHI／J
142	呈自見處		←	←	蓋自見	←	←	←	←	←	←	←	441/14	ACD／EFGHIJKL
143	人若		若人	←	人若	←	←	←	←	←	←	←	441/17	AEFGHIJKL／CD
144	若		←	←	若復	←	←	←	←	←	←	←	442/ 1	ACD／EFGHIJKL
145	壽者相		←	←	壽者之相	←	←	←	←	←	←	←	442/ 2	ACD／EFGHIJKL
146	故云		←	←	故曰	←	←	←	←	←	←	←	442/ 3	ACD／EFGHIJKL
147	怖畏		←	←	畏怖	←	←	←	←	←	←	←	442/ 8	ACD／EFGHIJKL
148	見辱		見有辱	←	見辱	←	←	←	←	←	←	←	442/12	AEFGHIJKL／CD
149	爲		曾爲	←	爲	←	←	←	←	←	←	←	442/15	AEFGHIJKL／CD
150	常行		嘗行	←	常行	←	←	←	←	←	←	←	442/16	AEFGHIJKL／CD

《附表1－7》

No.	A本	B本	C本	D本	E本	F本	G本	H本	I本	J本	K本	L本	箇所	パターン
151	歌讃		歌稱	←	←	歌讃	←	←	←	←	←	←	442/17	AFGHIJKL／CDE
152	身肉王		←	←	←	身肉	←	←	←	←	←	←	442/17	ACDE／FGHIJKL
153	今存		←	←	←	←	←	←	←	←	今有	←	443/ 1	ACDEFGHIJ／KL
154	世者生也如來因中	←	世者生也如來因中於	←	←	如來因中於	←	←	←	←	←	←	443/ 3	AB／CDE／FGHIJKL
155	五百生	←	←	←	五百世	←	←	←	←	←	←	←	443/ 3	ABCD／EFGHIJKL
156	先須		既行忍辱行先須	←	既行忍辱行者	←	←	←	←	←	←	←	443/ 4	A／CD／EFGHIJKL
157	別列		←	←	←	←	←	←	←	別烈	別立	←	443/ 8	ACDEFGHIJ／KL
158	由此		←	←	←	←	←	←	←	←	由是	←	443/ 8	ACDEFGHIJ／KL
159	積集無量業結覆蓋佛性		←	←	←	←	←	←	←	←	身無能覺照益違佛行	←	443/ 8～9	ACDEFGHIJ／KL
160	計著		←	←	←	←	←	計着	←	計著	計較	←	443/10	ACDEFGHIJ／KL
161	精勤		精進	←	精勤	←	←	←	←	←	←	←	443/11	AEFGHIJKL／CD
162	多		←	←	←	←	←	←	←	←	法	←	443/11	ACDEFGHIJ／KL
163	菩薩者行法財等施利益無彊若作能利益心即是非法不作利益心是名無住無住即是佛心		菩薩者行法財等施利益無彊若作能利益心即是非法不作能利益心是名無住無住即是佛心也	←	菩薩者行法財等施利益無彊若作能利益心即是非法不作利益心是名無住無住即是佛心	なし	←	←	←	←	←	←	443/16の後	ACDE／FGHIJKL
164	五欲快樂	←	←	（この部分なし）	←	快樂	←	←	←	←	←	←	443/17	ABC／DE／FGHIJKL
165	相	←	四相	←	相	←	←	←	←	←	←	←	444/ 3	ABEFGHIJKL／CD
166	實體	←	覺體	←	實體	←	←	←	←	←	←	←	444/ 3	ABEFGHIJKL／CD
167	定有		定受	←	定有	←	←	←	←	←	←	←	444/ 7	AEFGHIJKL／CD

《附表1－8》

168	佛		諸佛	←	佛	←	←	諸佛	佛	←	←	←	444/ 7	AEFGIJKL／CDH
169	所有言說		←	←	所說	←	←	←	←	←	←	←	444/ 7	ACD／EFGHIJKL
170	有不得言無		←	←	無不得言有	←	←	←	←	←	←	←	444/11	ACD／EFGHIJKL
171	言辭		←	←	言譬	←	←	←	←	←	←	←	444/11	ACD／EFGHIJKL
172	法		←	←	諸法	←	←	←	←	←	←	←	444/15	ACD／EFGHIJKL
173	濁惡之時		←	←	濁惡之世	←	←	←	←	←	濁惡之時	濁惡之世	445/ 3	ACDK／EFGHIJL
174	精進		專精	←	精進	←	←	←	←	←	←	←	445/ 4	AEFGHIJKL／CD
175	耨		耨多羅三藐三	←	耨	←	←	←	←	←	←	←	445/ 5	AEFGHIJKL／CD
176	福德		功德	←	福德	←	←	←	←	←	←	←	445/13	AEFGHIJKL／CD
177	諸法		諸相	←	諸法	←	←	←	←	←	←	←	445/13	AEFGHIJKL／CD
178	有能捨所捨心在元		←	←	心有能所	←	←	←	←	←	←	←	445/13	ACD／EFGHIJKL
179	將彼		←	←	將	←	←	←	←	←	←	←	446/ 1	ACD／EFGHIJKL
180	故雖		雖	←	故雖	←	←	←	←	←	←	←	446/ 1	AEFGHIJKL／CD
181	なし		←	←	注云心有能所四字一本云有能捨所捨心在元未離衆生之見此解意又分明故兩存之	←	←	←	←	注云心有能所四字一本云有能捨所捨心有元來未離衆生之見此解意又分明故兩存之	なし	←	446/ 2～3	ACDKL／EFGHIJ
182	有		←	←	若有	←	←	←	←	←	←	←	446/11	ACD／EFGHIJKL
183	求佛		求	←	求佛	←	←	←	←	←	←	←	446/11	AEFGHIJKL／CD
184	聞已即當便		聞已即便信	聞已即便生	即當信	←	←	←	←	←	←	←	446/11	A／C／D／EFGHIJKL
185	即能流通		←	←	方能通流	←	←	←	←	方能流通	方能通流	←	446/12	ACD／EFGHIKL／J
186	深經得		←	←	經典得深	←	←	←	←	←	←	←	446/13	ACD／EFGHIJKL
187	復能		←	←	復	←	←	←	←	←	←	←	446/13	ACD／EFGHIJKL
188	爲		←	←	能爲	←	←	←	←	←	←	←	446/13	ACD／EFGHIJKL
189	即有		←	←	者有	有	←	←	←	←	←	←	446/15	ACD／E／FGHIJKL

《附表1－9》

No.	A本	B本	C本	D本	E本	F本	G本	H本	I本	J本	K本	L本	箇所	パターン
190	何名樂小法		樂小法	←	何名樂小法	←	←	←	←	←	←	←	447/ 2	AEFGHIJKL／CD
191	以不發大心故		←	故	←	←	←	←	←	←	←	←	447/ 2	AC／DEFGHIJKL
192	人天		←	←	天人	←	←	←	←	←	←	←	447/ 6	ACD／EFGHIJKL
193	所得		是人所作	←	所得	←	←	←	←	←	←	←	447/ 7	AEFGHIJKL／CD
194	合得		←	←	←	各得	←	←	←	←	←	←	447/11	ACDE／FGHIJKL
195	多生		←	←	前生	←	←	←	←	←	←	←	447/11	ACD／EFGHIJKL
196	波羅蜜		←	←	波羅蜜行	←	←	←	←	←	←	←	447/13	ACD／EFGHIJKL
197	從無量劫		←	←	無量劫	←	←	←	←	←	←	←	447/13	ACD／EFGHIJKL
198	極惡罪障		極重惡障	←	極惡罪障	←	←	←	←	←	←	←	448/ 1	AEFGHIJKL／CD
199	悉皆		←	←	竝能	←	←	←	←	←	←	←	448/ 1	ACD／EFGHIJKL
200	不能		←	←	不得	←	←	←	←	←	←	←	448/ 2	ACD／EFGHIJKL
201	千萬		←	←	←	百千萬	千萬	百千萬	←	千萬	百千萬	←	448/ 5	ACDEGJ／FHIKL
202	無相		←	←	無生	←	←	←	←	←	←	←	448/ 6	ACD／EFGHIJKL
203	三塗苦		←	←	三塗	←	←	←	←	←	←	←	448/ 7	ACD／EFGHIJKL
204	深衆聖潛隱		←	←	←	深	←	←	←	←	←	←	448/10	ACDE／FGHIJKL
205	圓離諸相		←	←	圓成法相	←	←	←	←	←	←	←	448/11	ACD／EFGHIJKL
206	聲聞小見		←	←	人	←	←	←	←	←	←	←	448/11	ACD／EFGHIJKL
207	者		則	←	則必	←	←	←	←	←	←	←	448/13	A／CD／EFGHIJKL
208	度	滅度	度	←	滅度	←	←	←	←	←	←	←	449/ 6	ACD／EFGHIJKL
209	衆生見		←	←	衆生心	←	←	←	←	←	←	←	449/ 7	ACD／BEFGHIJKL
210	我見	我見心	我見	（この部分なし）	我見心	←	←	←	←	←	←	←	449/ 7	ACD／EFGHIJKL
211	我人等		我人衆生壽者	←	我人等	←	←	←	←	←	←	←	449/12	AEFGHIJKL／CD
212	若不除		←	←	不除	←	←	←	←	←	←	←	449/12	ACD／EFGHIJKL
213	不發		←	←	發	←	←	←	←	←	←	←	449/12	ACD／EFGHIJKL
214	我人		←	←	人我	←	←	←	←	←	←	←	449/12 二箇所	ACD／EFGHIJKL

《附表1－10》

215	言如是如是人		言如是如是之	←	佛言如是如是	←	←	←	←	←	←	←	450/ 3	ACD／EFGHIJKL
216	然燈		然燈佛	←	←	然燈	←	←	←	然燈佛	然燈	←	450/ 8	AFGHIKL／CDEJ
217	菩提記		←	←	記	←	←	←	←	←	←	←	450/ 8	ACD／EFGHIJKL
218	文		←	←	←	←	←	←	←	←	乃	←	450/ 8	ACDEFGHIJ／KL
219	言		←	←	佛言	←	←	←	←	←	←	←	450/ 8	ACD／EFGHIJKL
220	性徳		徳性	性徳	徳性	←	←	←	←	←	←	←	450/15	AD／CEFGHIJKL
221	我能度		←	←	我度	←	←	←	←	←	←	←	451/ 8	ACD／EFGHIJKL
222	雖能		←	←	雖然	←	←	←	←	←	←	←	451/12	ACD／EFGHIJKL
223	名眞		名爲眞	←	名眞	←	←	←	←	←	←	←	451/17	AEFGHIJKL／CD
224	開明		圓明	←	開明	←	←	←	←	←	←	←	452/ 6	AEFGHIJKL／CD
225	なし		←	←	第一	←	←	←	←	←	←	←	452/ 7	ACD／EFGHIJKL
226	憐憫		←	←	憐愍	←	←	←	←	←	←	←	452/ 7	ACD／EFGHIJKL
227	なし		←	←	爲第二	←	←	←	←	←	←	←	452/ 7	ACD／EFGHIJKL
228	なし		←	←	第三	←	←	←	←	←	←	←	452/ 8	ACD／EFGHIJKL
229	なし		←	←	第四	←	←	←	←	←	←	←	452/ 8	ACD／EFGHIJKL
230	なし		←	←	第五	←	←	←	←	←	←	←	452/ 8	ACD／EFGHIJKL
231	天眼見一切衆生各具般若性名爲慧眼見性明徹能所永除		肉眼見性明徹能所永除名爲天眼見一切衆生各具般若性名爲慧眼見	←	肉眼見一切衆生各具般若性名爲慧眼見性明徹能所永除名爲天眼	天眼見一切衆生各具般若性名爲慧眼見性明徹能所永除	←	←	←	←	←	←	452/ 9	AFGHIJKL／CD／E
232	生		出生	←	生	←	←	←	←	←	←	←	452/10	AEFGHIJKL／CD
233	國土		←	←	←	←	←	←	←	←	國數	←	452/15	ACDEFGHIJ／KL
234	爾許		←	←	若許	←	←	←	←	←	←	←	452/16	ACD／EFGHIJKL
235	嘗爾		←	←	嘗然	←	←	←	←	←	嘗然	←	453/ 5	ACD／EFGHIJ／KL
236	なし		←	←	皆	←	←	←	←	←	←	←	453/ 6	ACD／EFGHIJKL
237	無量		在量	←	無量	←	←	←	←	←	←	←	453/11	AEFGHIJKL／CD
238	假		故	←	限故	←	←	←	←	←	←	←	453/11	A／CD／EFGHIJKL
239	過數量		過量數	←	過	←	←	←	←	←	←	←	453/11	A／CD／EFGHIJKL

《附表1－11》

No.	A本	B本	C本	D本	E本	F本	G本	H本	I本	J本	K本	L本	箇所	パターン
240	金揮		金躯	←	金揮	←	←	←	←	金燿	金揮	←	453/15	AEFGHIKL／CD／J
241	身		←	←	←	身相	←	←	←	身	身相	←	454/ 1	ACDEJ／FGHIKL
242	二淨行		二清淨行	←	二淨行	←	←	←	←	←	←	←	454/ 1	AEFGHIJKL／CD
243	清淨行者		←	←	淨行者	←	←	←	←	←	←	←	454/ 1	ACD／EFGHIJKL
244	二清淨行		←	←	二淨行	←	←	←	←	←	←	←	454/ 3	ACD／EFGHIJKL
245	我		←	←	生我	←	←	←	←	←	←	←	454/ 7	ACD／EFGHIJKL
246	有		←	←	能	←	←	←	←	←	←	←	454/ 9	ACD／EFGHIJKL
247	佛告		←	←	告	←	←	←	←	←	←	←	454/13	ACD／EFGHIJKL
248	任運		←	←	任用	←	←	←	←	←	←	←	454/14	ACD／EFGHIJKL
249	なし		←	←	作	←	←	←	←	←	←	←	454/14	ACD／EFGHIJKL
250	夫		←	←	←	眞	←	←	←	←	←	←	454/15	ACDE／FGHIJKL
251	なし	盌幽法師 加此慧命 須菩提六 十二字是 唐長慶二 年今在濠 州鍾離寺 石碑上記 六祖解在 前故無解 今亦存之	幽冥禪師 續加	←	盌幽法師 加此慧命 須菩提六 十二字是 長慶二年 今見在濠 州鍾離寺 石碑上記 六祖解在 前故無解 今亦存之	盌幽法師 加此慧命 須菩提六 十二字是 長慶二年 今見在濠 州鍾離寺 石碑上記 六祖解在 前故無解 今亦存之	△此次盌 幽法師所 加慧命須 菩提一段 除之	盌幽法師 加此慧命 須菩提六 十二字是 長慶二年 今見在濠 州鍾離寺 石碑上記 六祖解在 前故無解 今亦存之	←	盌幽法師 加此惠命 須菩提六 十二字是 長慶二年 今見在濠 州鍾离寺 石碑上記 六祖解在 前故無解 今亦存之	盌幽法師 加此慧命 須菩提六 十二字是 長慶二年 今見在濠 州鍾離寺 石碑上記 六祖解在 前故無解 今亦存之	←	455/ 4～5	A／BEFHIJKL／CD／G
252	名		名爲	←	名	←	←	←	←	←	←	←	455/10	AEFGHIJKL／CD
253	此		なし	←	此	←	←	←	←	←	←	←	455/14	AEFGHIJKL／CD
254	揺於世		←	←	揺於	←	←	←	←	←	←	←	456/ 1	ACD／EFGHIJKL
255	なし		←	←	不著	←	←	←	不著	不著	←	←	456/ 2	ACD／EFGHIJKL
256	就理		約理	←	就理	←	←	←	←	←	←	←	456/11	AEFGHIJKL／CD
257	若悟得		悟得	←	若悟	←	←	←	←	←	←	←	457/11	A／CD／EFGHIJKL
258	心能所不生		能所不生	←	心無能所	←	←	←	←	←	←	←	457/12	A／CD／EFGHIJKL
259	之言	←	なし	←	之言	←	←	←	←	←	←	←	458/ 1	ABEFGHIJKL／CD
260	輪王	轉輪聖王	輪王	←	轉輪聖王	←	←	←	←	←	←	←	458/ 3	ACD／BEFGHIJKL
261	故言	故云	故言	←	故云	←	←	←	←	←	←	←	458/ 4	ACD／BEFGHIJKL

《附表1－12》

262	方便示其	得方便門不生	方便示其	←	得方便不生	←	←	←	←	←	←	←	458/ 5	ACD／B／EFGHIJKL
263	念須正念		會須正見	←	念須正念	←	←	←	←	←	←	←	458/10	AEFGHIJKL／CD
264	悟解		解悟	←	悟解	←	←	←	←	←	←	←	458/10	AEFGHIJKL／CD
265	色聲二相		←	←	色聲	←	←	←	←	←	←	←	458/10	ACD／EFGHIJKL
266	以相		←	←	於相中	←	←	←	←	←	←	←	458/11	ACD／EFGHIJKL
267	清淨行		←	←	←	淨行	←	←	←	←	←	←	458/16	ACDE／FGHIJKL
268	得佛		←	←	而得	←	←	←	←	←	←	←	458/16	ACD／EFGHIJKL
269	清淨行而		←	←	淨行而	←	←	←	←	←	←	←	459/ 1	ACD／EFGHIJKL
270	淨行得		清淨行得	←	淨行得	←	←	←	←	←	←	←	459/ 1	AEFGHIJKL／CD
271	滅佛種		←	←	佛種性	←	←	←	←	←	←	←	459/ 1	ACD／EFGHIJKL
272	——		←	←	←	←	←	←	←	一切	——	一切	460/ 5	ACDEFGHIK／JL
273	性上		性上妄念	←	性上	←	←	←	←	←	←	←	460/ 5	AEFGHIJKL／CD
274	本		←	←	←	←	←	←	←	←	樞	←	460/ 9	ACDEFGHIJ／KL
275	なし		←	←	其	←	←	←	←	←	←	←	460/ 9	ACD／EFGHIJKL
276	有		←	←	←	存	←	有	存	有	←	存	460/12	ACDEHJK／FGIL
277	壊		←	←	←	←	←	←	←	←	得	←	460/13	ACDEFGHIJ／KL
278	若不行悲智二法		なし	←	若不行悲智二法	←	←	←	←	←	なし	若不行悲智二法	460/16	AEFGHIJL／CDK
279	智		←	←	智慧	←	←	←	←	←	←	←	461/ 5	ACD／EFGHIJKL
280	便謂		便爲	←	便謂	←	←	←	←	←	←	←	461/ 5	AEFGHIJKL／CD
281	無		←	←	有無	←	←	←	←	←	←	←	461/ 7	ACD／EFGHIJKL
282	本無		←	←	←	←	←	←	←	本自無	本無	本自無	461/ 8	ACDEFGHIK／JL
283	本不		本自不	←	本不	←	←	←	←	←	←	←	461/ 8	AEFGHIJKL／CD
284	所得心滅		而心無能所	←	而能所心滅	←	←	←	←	←	←	←	461/13	A／CD／EFGHIJKL
285	別		←	←	別之	←	←	←	←	←	←	←	462/ 3	ACD／EFGHIJKL

《附表２－１》

No.	現存諸本に校合されている異本								現存する代表的異本						箇所
	Ａ本	Ｃ本	Ｆ本	Ｇ本	Ｈ本	Ｉ本	Ｌ本	續藏本	Ａ本	Ｂ本	Ｃ本	Ｆ本	Ｊ本	Ｋ本	
1							宿慧者		宿慧	―	宿慧	←	宿慧者	宿慧	419/ 5
2	是故								故	―	故	是故	←	←	419/ 5
3	庶斷除學								庶斷愚	―	庶斷學	斷除學	←	←	419/ 5
4	超凡								從凡	―	從凡	超凡	←	←	419/ 6
5							此經訣		此訣	―	此訣	←	此經訣	此訣	419/ 9
6	佛大悲								大悲	―	大悲	佛大悲	←	←	419/11
7	故經云								なし	―	故經云	←	←	←	419/12
8			能破						能亂	―	能亂	←	←	能亂佛性	419/15
9	不見衆生 是名衆生								なし	―	不見佛性 是名衆生	←	←	不見佛性 者是名衆 生	419/16
10				勇猛					猛勇	―	勇猛	猛勇	勇猛	猛勇	420/ 3
11	以除之								除之	―	除之	以除之	←	←	420/ 8
12	滿離生滅 相								離生滅	―	離生滅	滿離生滅 相	←	←	420/10
13								到彼岸	到彼岸	―	到彼岸	←	到彼岸也	到彼岸	420/10
14							即是		即自	―	即自	←	←	←	420/11
15							道路也		道路	―	道路	←	道路也	道路	420/12
16							之時也		之時	―	之時	←	之時也	之時	422/13
17							知心		知心	―	知心	←	←	諸心	422/15
18	六賊								結賊	―	六賊	←	←	←	423/ 3
19	徳城也								徳城	―	徳城也	←	←	←	423/ 6
20								佛立制	佛意制	―	佛意制	←	←	佛立制	423/10
21	尊顔								なし	―	尊顔	←	←	←	424/ 4
22	超過								超	―	超過	←	←	←	424/ 8
23	無有上								無上	―	無有上	←	←	←	424/ 8
24					不起憎愛 不染外六 塵				起愛憎染 外六塵	―	起憎愛染 外六塵	←	←	←	424/11
25	含靈								含生	―	含靈	←	←	←	424/14

《附表２－２》

26							化度		化導	—	化導	←	化度	化導	426/ 4
27	心無取着								なし	—	心無取著	←	←	←	426/ 4
28			不亂				不虛		不亂	—	不亂	不虛	←	不亂	426/ 5
29	即是降伏 其心也								曰是	—	曰是	即是降伏 其心也	←	←	426/ 6
30	淪墜		墮阿鼻		多淪墜		多淪墜		墮阿鼻	←	多淪墜	←	←	多偏墜	426/10
31	無想								無相	←	無相	←	←	←	426/10
32					愛著				愛著	愛着	愛著	←	←	←	426/11
33							云多淪墜 一作墮阿 鼻也		なし	なし	也	云多淪墜 一本作墮 阿鼻	云多淪墜 一作墮阿 鼻也	なし	426/14
34	悟入無餘 無餘								無餘者無 餘	←	無餘無餘 者無	←	←	←	426/16
35	永不生								不生	←	永不生	←	←	←	426/17
36	無餘								無想	←	無餘	←	←	←	427/ 1
37							諸法相		法相	—	諸相	←	諸法相	諸相	427/ 7
38	即是衆生								即衆生	—	即是衆生	←	←	←	427/10
39	佛是衆								佛衆	—	佛是衆	←	←	←	427/10
40	衆生是								衆生	—	衆生是	←	是衆生是	衆生是	427/11
41	祗								なし	—	只	祗	←	←	428/ 3
42		不見布施							不見有施	←	←	←	←	←	428/ 6
43	離相								離惡	—	離相	←	←	←	428/12
44							蒼生		含生	—	含生	←	←	←	428/14
45	無所住心								無住心	—	無所住心	←	←	←	430/14
46						不策			不筭	←	←	←	←	←	431/ 5
47							於前念		前念	—	前念	於念	於前念	前念	432/12
48				誓起					誓起	—	誓起	←	←	←	432/12
49	不了本心								なし	—	なし	不了本心	なし	不了本心	433/ 1
50	齊皎						齊皎		齊施	←	齊收	齊皎	←	齊收	433/ 5
51							持用		持用	←	←	←	←	以用	433/11
52	於性上								於性	←	於性上	←	←	←	433/11
53				諸有					諸有	←	←	諸利	←	諸有	433/12
54	此經								此理	—	此經	←	←	←	433/16

《附表２－３》

No.	現存諸本に校合されている異本								現存する代表的異本						箇所
	Ａ本	Ｃ本	Ｆ本	Ｇ本	Ｈ本	Ｉ本	Ｌ本	續藏本	Ａ本	Ｂ本	Ｃ本	Ｆ本	Ｊ本	Ｋ本	
55	標指								標	—	標指	摽指	←	←	434/ 8
56	是物								是指	—	是指	←	←	←	434/ 8
57	不染								不順	—	不染	←	←	←	434/13
58							從人間		從人間死	←	←	←	從人間	從人間死	435/ 8
59							此蔽		此疑	—	此疑	←	←	此蔽	436/15
60								末學	末學	—	末學	←	←	末學	437/10
61							長照		長照	—	長照	←	←	常照	437/13
62	等虛空界								是	—	等虛空界 方	←	←	←	437/17
63	色身縦如 須彌終不 爲大也								なし	—	色身縦如 須彌終不 爲大	色身縦如 須彌終不 爲大也	←	色身縦如 須彌山不 爲大也	437/17
64		見人							見人	←	如有人	←	←	←	438/10
65							若念念		若念念	なし	若念念	←	←	者念念	438/10
66	無所説								不也	—	無所説也	←	←	←	439/13
67	了妄即眞 眞妄倶泯								なし	—	了妄即眞 眞妄倶泯	←	←	←	440/ 4
68	聞法								聞性	—	聞法	←	←	←	441/ 5
69		所解							所解	—	爲解	←	←	←	442/ 7
70							積集無量 業結覆蓋 佛性		積集無量 業結覆蓋 佛性	—	積集無量 業結覆蓋 佛性	←	←	積身無能 覺照益遠 佛行	443/ 8〜9
71							上求		求	—	求	←	上求	求	443/11
72							蜜多		蜜多	—	蜜多	←	←	蜜法	443/11
73					旨音				旨意	—	旨意	←	←	←	444/ 8
74	如盲								如善	—	如盲	←	←	←	444/15
75							任心		在心	—	在心	←	←	←	445/ 4
76				知之					知之	—	知之	←	←	←	445/ 5
77	信心不逆								信	—	信心不逆	←	←	←	445/10
78	心有能所		有能捨所 捨心在元						有能捨所 捨心在元	—	有能捨所 捨心在元	心有能所	←	←	445/13

《附表2－4》

79	雖離塵勞 不作離塵 勞之念								以離塵	—	雖離塵勞 不作離塵 勞之念	←	←	←	446/16
77				惱恨					惱恨	—	惱恨	←	←	←	447/13
78							波羅蜜		波羅	—	波羅	←	波羅蜜	波羅	448/ 7
79				謙下					謙下	—	謙下	謙不	謙下	←	448/11
80				滅度					度	滅度	度	滅度	←	←	449/ 6
81				不除					不除	←	←	←	←	←	450/ 2
82				印可					印可	—	印可	←	←	←	450/ 3
83							段文		段文	—	段文	←	←	段乃	450/ 8
84						取捨			取捨	—	取捨	取舎	取捨	取舎	450/17
85				明徹					明徹	—	明徹	←	←	←	452/ 9
86							國土		國土	—	國土	←	←	國數	452/15
87							瞥然		瞥爾	—	瞥爾	瞥然	←	潛然	453/ 5
88	即名								即是名	—	即不名	←	←	←	454/ 8
89				語默					語默	—	語默	語嘿	語默	語嘿	454/13
90	····二年 今見在濠 州鍾離寺 石碑上記 六祖解在 前故今亦 存之								なし	靈幽法師 加此慧命 須菩提六 十二字是 唐長慶二 年今在濠 州鍾離寺 石碑上記 六祖解在 前故無解 今亦存之	なし	靈幽法師 加此慧命 須菩提六 十二字是 長慶二年 今見在濠 州鐘離寺 石碑上記 六祖解在 前故無解 今亦存之	靈幽法師 加此惠命 須菩提六 十二字是 長慶二年 今見在濠 州鐘离寺 石碑上記 六祖解在 前故無解 今亦存之	靈幽法師 加此慧命 須菩提六 十二字是 長慶二年 今見在濠 州鐘離寺 石碑上記 六祖解在 前故無解 今亦存之	455/ 4～5
91							可了		可得	—	可得	←	可了	可得	455/15
92	一十萬里								一十二萬 里	—	一十二萬 里	←	←	←	456/10
93	除彼迷心								除迷	除彼迷心	除彼迷心	←	←	←	458/ 2
94	於相中								以相	—	以相	於相中	←	←	458/11
95							之本		之本	—	之本	←	←	之樞	460/ 9
96							心有		心有	—	心有	心存	心有	←	460/12
97							不壞		不壞	—	不壞	←	←	不得	460/13
98	智慧								智	—	智	智慧	←	←	461/ 5

註

（1）拙稿「慧能に歸される數種の『金剛經』の註釋書について」（「禪文化研究所紀要」二二號、一九九六年五月）。

（2）關口眞大『禪宗思想史』（山喜房佛書林、一九六四年）一二〇頁。

（3）『福州温州台州求得經律論疏記外書等目録』、大正藏五五、一〇九四上。

（4）なお、慧能に歸される『金剛經』の註釋として、『六祖大師金剛經大義訣』なるものがあり、少なくとも宋代には既に存在したことが知られるので（前掲拙稿參照）、これを圓珍將來のものに擬せんとすることも、あながち不可能ではない。しかし、『大義訣』の存在が十世紀以前には辿れないのに對して、『解義』の成立は八世紀後半から九世紀初頭と見うるから、圓珍が將來した『能大師金剛經訣』が『解義』であったことは疑う餘地がない。これについては、拙稿「『金剛經解義』の成立をめぐって」（「印度學佛教學研究」四五-一、平成八年）を參照されたい。

（5）昭和五三年、大修館書店刊。

（6）前掲『慧能研究』四七九頁。

（7）同上、四一八～六六頁。

（8）同上、四七五～六頁。

（9）ここで言う九本とは、次の諸本である。

1．五山版（京都大學人文科學研究所、松本文庫藏）
2．六地藏寺藏寫本
3．明版（内閣文庫藏）
4．明曆元年日本刊本（駒澤大學圖書館藏）
5．同治六年朝鮮刊本（東洋文庫藏）
6．諺解本（駒澤大學圖書館・東洋文庫藏）
7．續藏本
8．五家解本（駒澤大學圖書館藏）
9．川老註本（駒澤大學圖書館藏）

（10）なお、ここに掲げたものの外にも、川瀬一馬編『石井積翠軒文庫善本書目』（昭和一七年、石井光雄刊）によって、かつて、積翠軒文庫に「金剛般若波羅蜜經六祖解義」という外題を有する、宗牧筆の古寫本を藏したことが知られるが（本文編一八頁、圖録三〇）、現在、その所在は明らかでなく、見ることは

できない。

また、後に言及するように、續藏本には「唐本」なるものが校合されており、この本が明治年間まで存したことは間違いないが、これも現在のところ、所在不明となっている。

(11) 内閣文庫本と叡山文庫本は明らかに同版であり、いずれも線裝本（内閣文庫本は285mm×174mm、叡山文庫本は265mm×163mm）。匡郭内は189mm×143mm。序文は各半葉七行、各行一四字。本文は各半葉九行、各行二〇字で、全六三張となっている。版心には「金剛經」と、序、巻上、巻下の別、並びに張數（上下巻で別個に振る）が彫られているが、内閣文庫本も叡山文庫本も、現状では一册本になっている。

内閣文庫本は、宗密の『大方廣圓覺了義經略疏』を合本にしているため、題簽も「金剛經　圓覺經　全」とする。この『略疏』の體裁は、『解義』と共通するため、當初から合本であった可能性が高い。また、この本は、序文の前に一張を有し、表には佛畫が描かれ、裏には「皇圖永固帝道遐昌。佛日増輝法輪常轉」と彫られている。これは、永樂帝の『金剛般若波羅蜜經集註』（永樂内府刻本）などの體裁と一致するから、刊記などは存在しないが、明代のものと認めることができる。

一方、叡山文庫本では，巻頭の一張がなく、また、『略疏』もないので、題簽も「金剛經註」となっている（現在、この題簽は剥がれ、直接、表紙に「金剛經註　全」と墨書されているが、以前の題簽が本に挟み込まれているので、それが元來のものであったことが知られる）。恐らく、内閣文庫本のような形態が元來のもので、後に『解義』の部分のみを別行したのが叡山文庫本であろう。

『解義』部分の構成は、冒頭に慧能の序文があり、經文と解義が續き、末尾に「補闕眞言」を有するのみのシンプルなものとなっている。

(12) 『金剛經解義』にハングルで註解を附したもので（以下、「諺解本」と略稱）、題簽は「金剛經　巻上」「金剛經　巻下」。295mm×190mmの線裝二册本で、匡郭内は201mm×148mm、各半葉八行、各行字數不定。版心は「金剛經序」「金剛經後序」「金剛經」「雕造官」「金剛心經箋」「金剛經跋」「金剛經事實」、並びに張數。

その構成は、冒頭、慧能の序に續いて、

1．「金剛經啓請」「淨口業眞言」「安土地眞言」「普供養眞言」
「請八金剛四菩薩」「發願文」「云何梵」「開經偈」（以上、序と併せて一一張）

2．「六祖口訣後序」（羅適撰、一五張）

があり、また、本文（一五二張）の後に、

1．「補闕眞言」「般若無盡藏眞言」「金剛心眞言」「普回向眞言」

2．萬曆三年の刊記（以上、一張）

3．雕造官名一覽（二張）

4．「進金剛經心經箋」（天順八年〈1464〉、黄守身撰、三張）

5．孝寧大君跋（天順八年）、海超跋（同）、金守温跋（同）、韓繼禧跋（天順六年）、盧思愼跋（計、九張）

6．「飜譯廣轉事實」（天順六年、四張）

が附されている。

諸跋等によれば、天順六年、世祖は靈夢を感じ、それによって、『金剛經』の流布のため、『解義』の國語への飜譯を決意し、自ら本文を定め、それを韓繼禧に飜譯させたという。そして、それは、孝寧大君、海超らの校訂を經て鏤板印行され、天順八年に上進されている。恐らく、萬曆三年版は、この天順八年版の重刻であろう。

(13) 本書は、281mm×182mmの線裝本で、匡郭内183mm×132mm。各半葉九行、各行一九字（經文一七字）、全六四張で、版心は「金剛序」「金剛經」「金剛跋」、竝びに張數。外題は「金剛經」で、表紙に「前間氏所藏」の紙片が貼られているので、前間恭作氏の舊藏本であることが知られる。末尾に、

「　校證大雲性起
　監別董役桐庵永善　　化主比丘尼尚燁
同治六年丁卯夏金剛山神溪寺普雲庵藏板」

という刊記があり、同治六年（1867）の開版と知られるが、その直前に、やや大きめの文字で「信女淨行心元氏」と彫られているのは、その後の附加であろうから、恐らくは後刷本である。

その構成は、

1．佛畫（一張）

2．「六祖金剛般若波羅蜜經序」（慧能撰、三張）

3．經文、竝びに解義（五八張）

4．「書刻六祖金剛經跋」（二張）

となっているが、この内、末尾に附された「書刻六祖金剛經跋」は、後に論ずるように、本書の成立を知るうえで、非常に重要な資料である。

(14) 290mm×120mmの折本で、題簽や外題はなく（帙の題簽は「金剛般若波羅蜜經」）、版面の天地は240mm、全二五張である。一折六行、各行一七字、惠能撰とされる註釋は小字雙行で、一行二四字である（但し、「後序」は、經文より文字がやや小さく、各行、二三字となっている）。序文の欄外に「退藏施入永龍」と墨書されている。

本書は、『慧能研究』に底本として翻刻されているので、その全文を容易に見ることができるが、ここで、その構成についてだけ觸れておくと、以下のごとくである。

1．佛畫

2．序文（慧能撰）

3．「金剛經啓請」「淨口業眞言」「安土地眞言」「普供養眞言」
「請八金剛」「請四菩薩」「云何梵」「發願文」

4．經文、竝びに解義

5．「補闕眞言」

6．「六祖口訣後序」（羅適撰）

本書には、刊記の類は存在しないが、川瀬一馬氏によって、「すぐれた覆宋刊本である」と認められている（『五山版の研究』九三頁、また、三七九頁參照）。從って、本書は、元豐七年（1084）に羅適が刊行した際の姿を、ほぼそのまま傳えるものと言える。

(15) 版式は、匡郭内198mm×143mm、各半葉九行（序は七行）、各行二〇字（序は一四字）、版心は「金剛經」「序」「巻上」「巻下」、竝びに張數。序六張、巻上二四張、巻下三五張の全六五張で、その内容は、慧能の序文と本文（經文と解義）のみの、至ってシンプルなものである。末尾、巻下の三五張表に、「右此金剛經六祖惠能大師解義者。以唐本一字不闕寫畢」の註記と、「明曆元乙未初冬吉祥日。中野氏小左衞門開板」の刊記あり。

京都大學圖書館藏本は、277mm×180mmの線裝一册本。題簽なし。末尾に版式の異なる「祖心和尚六波羅蜜眞妙注解」二張を附す。恐らくは、これがないの

が元來の姿で、後刷に際して附されたものと思われる。續藏本の底本で、出版のための割付が朱で施され、表紙に、

「兩本對校。寫本略。而刊本詳。略者作於前。詳者作於後。皆僞撰也。考六祖并無解金剛經之語。後人依託其名。作此二解。不足信也。二本對校。詳本稍優。」

と書かれた箋紙が貼られている。この箋紙の意味については、前掲の拙稿「慧能に歸される數種の『金剛經』の註釋書について」を參照されたい。

駒澤大學圖書館藏本は、276mm×188mmの線裝一册本で、題簽はなく、「六祖解義金剛經　全」との外題があり、表紙に、

「稍　緑山塔下　／　青龍亭藏□　／　門外不出」

という紙片が貼られている。

龍谷大学圖書館藏本は、274mm×175mmの線裝一册本で、題簽は「金剛經六祖解義　上下　全」。

東大寺圖書館藏本は、274mm×176mmの線裝二册本で、外題は「金剛經六祖解義」。京都大學圖書館藏本と同樣、「祖心和尚六波羅蜜眞妙注解」二張が附されており、同時の刊行と見られる。

(16) この底本が、京都大學圖書館所藏の明暦元年刊本であることについては、上の註15を參照。

(17) 六地藏寺本の本文については、附録を參照されたい。なお、本寫本は、現在のところ修復が濟んでいないため、閲覧は禁止されている。從って、その書誌についても正確なことは述べられないのであるが、幸い、かつて實地に調査された椎名宏雄氏によって、その紹介がなされているので、それをここに轉載しておく。

「改裝黄色表紙（二四・二×一六・三糎）裏張は佛教古寫。扉「解金剛經 六祖注　六藏寺常住」。本文三十四紙、半葉十四行二十字。返點・送りがな附。異本との對校を示す。内題「六祖注解金剛經義 并序／曹溪六祖大師慧能解義亦曰口訣」。奥題「金剛般若波羅蜜經」。引續き書込あり、「永嘉眞覺大師自像法決疑經内被見先生負人物來讀誦金剛經皈之也。子年者負一万二千貫　四卷讀。丑年者負　二十八万貫　九十一卷。....」。卷末改修識語「天文十九年 庚戌 壬五月二十一日　誂東性房修複功畢／右解尺雖他家述釋爲愚鈍潤色安置之是偏爲／興隆佛法報恩謝徳也矣／惠潤 三十五才／

藤福寺居住之時／佐竹兵亂之節／以祈念寸暇批」。

右の改修識語は扉の文字と同筆であり、天文十九年（一五五〇）惠潤の手による。惠潤は六地藏寺の第四世、藤福寺は同寺末で、かつて水戸城内に存した寺である。本寫本の筆跡はこの識語よりもかなり古い。内容は、いはゆる禪宗六祖慧能の撰述とされる『金剛經解義』であるが、續藏經所収本と比較すると、本寫本は序文と本文のみで、續藏本に存する後序・跋・重刻跋、等を持たず、また、字句の異同も多く、金剛經の科段の切り方も異なる。さらに全一卷なることも續藏本の二卷とは異なり、むしろ圓珍の將來目録に見える「能大師金剛般若經決一卷」に等しい。從って古刊本・古寫本が從來殆ど知られぬ現在、本寫本は貴重な資料といへる。本書の書誌的考察は、今後の課題としたい。」（「六地藏寺所藏禪籍目録及び解題」〈『書誌學』新26·27合併號、昭和五六年〉三九－四〇頁）

なお、同氏は、六地藏寺本を閲覽できずに困惑していた著者に對して、親切にも、かつて撮影された寫眞をお送り下さった。從って、私が本拙論を書くことのできたことは、偏に同氏の御厚意によるものであることを、ここで斷っておきたい。

(18) 本書は、260mm×102mmの折本で、「金剛般若波羅蜜經 慧能解義」という外題がある。各折四行、各行一五～一八字、付朱點・送り假名、註は細字雙行（各行一五字）。序文と本文は同筆であるが、本文の末尾一折と後序は異筆であり、更に、後序の末尾一折もまた異筆である。

この本には、末尾に、

「先師僧正第七回忌爲追善令修補供養

寛文八年六月二十五日　　遺弟雅嚴」

と書かれた紙片が挾み込まれているが、後序の末尾一折の筆跡はこれと一致するから、この部分が寛文八年（1668）の補修の際に書き改められたものであることが知られる。從って、本文の末尾以下の補寫は、それ以前のものと考えざるをえないわけであるから、本書の原書寫年代は、恐らく室町時代を下らないであろう。

なお、本書の内容は、以下のごとくである。

1．序文（慧能撰）

2．經文、竝びに解義

3．「六祖口訣後序」（羅適撰）

(19) 本書は、266mm×200mmの線裝本で、「金剛般若波羅密(ママ)經義解」という題簽が附されている。各半葉九行、各行一八字。註は細字雙行。表紙裏に、本文とは異筆で「訥堂藏」の墨書と印あり。また、末尾にも、

「文政九年酉三月訥堂義宥求之　（印）」

とある。つまりは、本書は文政九年（1824）に訥堂という人物が購入した本であるから、その書寫は、それ以前と知られる。

全體の構成は、五山版とほとんど一致し、文章も非常に近いが、この本が「解義」ではなく、「義解」と題していること、竝びに、各分章の標題の下に、註記を置いていることは、極めて重要な相違點であり、注目に値する（これについては、附論を參照されたい）。

(20) 本書は、271mm×200mmの線裝本で、外題は「金剛經六祖大師解義口訣」である。各半葉九行、各行二〇字で、註は細字雙行（各行二〇字）、全四四紙。

その內容、文字とも、基本的には五山版と共通するが、冒頭、「發願文」に續いて「開經偈」を存する點、竝びに、標題に續いて「姚秦三藏法師鳩摩羅什奉詔譯」の一行を有する點は、いわゆる「川老註」本（『金剛經註』）に一致する。また、各品題の下に註記を有するという形態は叡山文庫本と一致するが、その內容は全く異なる。

更に、この本は、本文の後、「補闕眞言」に續いて「阿修羅此飜无酒」云々の註記を有するが、これは外には全く見ることのできないものである。

(21) これらのうち、以下において使用したのは、次の諸本である。

『五家解』......花園大學國際禪研究所所藏、康熙四年興國寺刊本

『金剛經註』....駒澤大學圖書館所藏、寛永九年中野小左衛門刊本

なお、前者は、柳田聖山氏によって、「禪學叢書之二」に影印出版されており、參照も容易である（中文出版社、一九七四年）。

(22) ただし、『五家解』のうち、京都大學圖書館藏本のみ版式を異にし、文字にも多少の相違が見られる。恐らく、こちらのほうが古い形を傳えるものであろうが、殘念なことに上卷しか殘っていないので、底本として使用することはできなかった。

(23) このうち、『從容録』については既に關口眞大氏に指摘があり、また、『文獻通考』と「金剛經五十三家註」については、『慧能研究』に指摘されている。

また、『如是解』と『彙纂』については、前掲の拙稿「慧能に歸される數種の『金剛經』の註釋書について」も參照されたい。

(24) 後に論ずるように、三-A-11の『闡説』に引かれる『解義』は、明らかに、その全てが、三-A-6、三-A-7の、いわゆる「五十三家註」を直接の出據とするものであるから、これも、この系統に屬するものと見做しうる。

(25) これらについても、前掲の拙稿「慧能に歸される數種の『金剛經』の註釋書について」を參照されたい。

(26) 前掲『慧能研究』四八七頁。また、椎名宏雄『宋元版禪籍の研究』(大東出版社、平成五年) 三六八～九頁。

(27) この《附表1》で「箇所」と表記されているのは、前掲の『慧能研究』所載のテキストの頁數と行數である。このテキストには多くの異本が校合してあり、はなはだ便利ではあるが、繁雜な作業であるだけに、それらの中にかなりの數の誤りが含まれている可能性も否定できなかった。そこで、そのような危險を排除するために、私も獨自に實地調査を行ない、それを補正した上で、この一覽表を作成した。從って、《附表1》に掲げた諸本の文字は、『慧能研究』によって、その位置を提示してはいるが、そこに掲げられたテキストとは、必ずしも一致しない場合がある。

調査によって知り得た『慧能研究』の不備を列擧したものが、註の末尾に附した《附表3》であるが、この表では、經文、慧能撰とされる序文、解義、羅適撰の後序、竝びに各異本に附された註記のみを問題にし、經文と解義の配當の相違、註番號の脱落等の不備についての指摘は省略した。

また、六地藏寺藏本の場合、後からの書き換えや註記等の詳細については、附録の「復元本文」に讓り、基本的には、元初の形態と考えられるものを採用した。

(28) 前掲『禪宗思想史』一二二～五頁參照。

(29) 前掲『慧能研究』四八九頁。

(30) 同上。

(31) 「□」の部分の文字は、判讀できなかった。

(32) 註14を參照。

(33) 前掲『慧能研究』四六五頁。

(34) もっとも、この事實は、Ⅰ系統、Ⅱ系統の中間的な異本がかつて存在し、そ

れを羅適本と校合したと見られぬことはない。しかし、C本によってⅡ系統の異本が存在したことが確認できる上に、後に論ずるごとく、かつて、Ⅰ系統の異本が朝鮮に存在したことも疑いえないから、このように考えるのが最も自然であろう。

(35) 《附表1》でいえば、68、90、130、173、272、276、278、282の八箇所がこれに當たる。

(36) 278以外の七箇所で一致している。

(37) 68、272、282がこれに當たる。

(38) 19、22、35、55、78、117、122、130、153、157、158、159、160、162、218、233、235、274、277の一九箇所がこれに當たる。

(39) Ⅰ、Ⅱと共通するものに、31、33、37、73、80、114、141、173、181、276があり、他に、Ⅱとだけ共通するものとして、76、278があるが、Ⅰとだけ共通するものは見られない。

(40) 拙稿「『金剛經變相』について」（「東洋學研究」三五～六號、平成十～十一年）を參照。

(41) 『從容録』の引用は、わずかに一箇所に過ぎない。即ち、「能浄業障分第十六」の經文、「復次須菩提。善男子善女人。受持讀誦此經。若爲人輕賤。是人先世罪業。應墮惡道。以今世人輕賤故。先世罪業。則爲銷滅。當得阿耨多羅三藐三菩提」に對する解義に相當する、次のもののみである。

「六祖口訣云。佛言。持經之人合得一切人恭敬供養。爲多生有重業障故。今生雖持此經。常被人輕賤。不得敬養。自以持經故。不起我人等相。不問冤親。常行恭敬。有犯不校。常修般若波羅蜜。歴劫重罪悉皆消滅。又約理而言。先世即是前念妄心。今世即是後念覺心。以後念覺心。輕賤前念妄心。妄不能住。故云。先世罪業。即爲消滅。妄念既滅。罪業不成。即得菩提。」（大正藏四八、二六三下／續藏二-二一-四、三六一b～c）

(42) 椎名宏雄『宋元版禪籍の研究』四三七頁參照。

(43) 『慧能研究』四七一頁。

(44) 『文獻通考』の引用文は、椎名氏の前掲書四三八頁に、内閣文庫所藏の嘉靖三年（1524）刊本によって掲げられているが、若干の誤植があるので、直接、原本によって問題の箇所を示せば、以下の通りである。ここでは、これによって比較を行っている。

「禪宗金剛經解一卷

晁氏曰。皇朝安保衡採摭禪宗。自達磨而下。發明是經者參釋之。序稱其有言。涉修證者。北宗法門也。擧心即佛者。江西法門也。無法無物本來如是者。曹溪法門也。

六祖序。如來所説金剛般若波羅蜜。與法爲名。其意謂何。以金剛世界之寶。其性猛利。能壞諸物。金雖至剛。羚羊角能壞。金剛喩佛性。羚羊角喩煩惱。金雖堅剛。羚羊角能碎。佛性雖堅。煩惱能亂。煩惱雖堅。般若智能破。羚羊角雖堅。賓鐵能壞。悟此理者。了然見性。涅槃經云。見佛性者。不名衆生。如來所説金剛喩者。祇爲世人性無堅固。定慧即亡。口誦心行。定慧均等。是名究竟。金在山中。不知是寶。亦不知是山。何以故。爲無性故。人則有性。取其寶用。得遇金師。鏨鑿山破。取鑛烹煉。遂成精金。隨意使用。得免貧苦。四大身中。佛性亦爾。身喩世界。人我喩山。煩惱爲鑛。佛性喩金。智慧喩工匠。精進勇猛喩鏨鑿。身世界中。有人我山。人我山中。有煩惱鑛。煩惱鑛中。有佛性寶。佛性寶中。有智慧工匠。用智慧工匠。鑿破人我山。見煩惱鑛。以覺悟火烹煉。見自金剛佛性。了然明淨。是故。以金剛爲喩。因以爲名也。」（卷二二六、一〇張裏～一一張裏）

(45) 大正藏四七、三四六下。

(46) 大正藏七四、九六下。

(47) 大正藏八四、一五中～下。

(48) 六地藏寺本の書寫年代、五山版の刊行年代は、共に不明であるが、この事實は、それに對してある程度の示唆を與えるものといえよう。ただし、『器朴論』所引の本が羅適刊行本系のものであることは、ほぼ間違いないが、『洞義抄』所引のものについては、單なる寫誤や記憶違い、隨意の省略などの可能性も否定しきれない。

(49) 前掲「慧能に歸される數種の『金剛經』の註釋書について」參照。

(50) 例えば、『闡説』には、

「六祖曰。所在之處。見人即説是經。常行（A）無所得心。（B）即此身中。有如來全身舍利。故言如佛塔廟。（C）心淸淨而説是經。令諸聽者。除迷妄心。悟得本來佛性。常行眞實。感得天人阿脩羅人非人等。皆來供養持經之人也。又曰。自心誦得此經。自心解得經義。自心體得無著無相之理。所在

之處。常修佛行。即自心是佛。故言所在之處。即爲有佛。」（續藏一－九二－四、四〇九ｄ）

という引用が見られるが、『解義』は、本によって文字に多少の相違は見られるものの、いずれの本でも、（Ａ）（Ｂ）（Ｃ）の各部に、次のような文章が存在する（五山版の本文によって掲げる）。

（Ａ）「無念心。」（438/10）

（Ｂ）「不作能所心說。若能遠離諸心。常依無所得心。」（438/10～11）

（Ｃ）「以無所得心。說此經者。感得天龍八部悉來聽受。心若不清淨。但爲名聲利益。而說是經者。死墮三塗。有何利益。」（438/11～12）

つまり、『闡説』は節略して引用していることになるわけであるが、實は、この文は、そのままの形で「五十三家註」に見ることができるのである。

また、『闡説』には、

「六祖曰。一合相者。如眼見色愛色。即與色合。耳聞聲愛聲。即與聲合。至於六塵。若散即是眞世界。合即凡夫。散即非凡夫。凡夫之人。於一切法。皆合相。若菩薩於一切法。皆不合而散。何以故。合即繋縛。起生滅。散即解脱。亦不生不滅。若有繋縛生滅者。即是凡夫。所以經云。但凡夫之人。貪著其事。」（續藏一－九二－四、四一三ｄ）

のように、「五十三家註」以外には見出されない註釋をも含んでいるので、これが「五十三家註」に基づいて引用を行っていることは疑いえない。

なお、これらの文章は、「五十三家註」の祖本たる「十七家解」にも、勿論、全く同様に見ることができるが、時代的背景を考えるなら、直接に基づいたのは、當然、「五十三家註」であったと見るべきである。

(51) 續藏一－三九－三、二〇八ｂ。

(52) 同上、二〇八ｄ。

(53) ただし、兩者の間には文字の相違がしばしば見られるので、必ずしも直接、この明版に依ったのではないごとくである。もっとも、その多くは、明確に明版の誤りと斷定できる程のものであるから、私見によって改めた可能性も否定できないが、次の一例のみは、そのような見方を困難にすると思われる。即ち、『解義』の「一體同觀分第十八」には、

「佛說此河中沙。一沙況一佛世界。以爲多不。須菩提言。甚多。世尊。佛擧此衆多國土者。欲明其中所有衆生。一一衆生。皆有若許心數也。」

（452/14～16、五山版）

という文があり、内閣文庫等の明版では、ここの「國土」を「國數」としているのであるが、『會解了義』にも、これに相當する引用として、

「佛説此河中沙。一沙況一佛世界。佛擧此衆國土者。欲明其中所有衆生。一一衆生。皆有佛心也。」

が見られ、その引用は正確ではないが、とにかく、そこでは「國數」ではなく、「國土」が用いられているのである。

明版を受ける江戸時代の町版（L本）が、本文として「國數」を採用していることからも窺われるように、この場合、「國數」でも十分意味が通じるはずであるにも拘わらず、『會解了義』が「國土」としているのは、恐らく、それが明版に直接基づくものでないことを示すものであろう。

(54) これら註記は、「云何梵」や羅適の後序などにも廣く認められるが、ここでは、混亂を避けるため、慧能撰とされている部分、即ち、序文と解義だけを問題にすることにした。

(55) 前掲「禪學叢書之二」所収本、二九一頁下段。

(56) これについては、附論を參照せられたい。

(57) 前掲「禪學叢書之二」所収本、三五〇頁下段、竝びに三五二頁上段。

(58) 「決疑」が得通による校訂の際の産物であろうことについても、附論を參照せられたい。

(59) 前掲『慧能研究』四七八～九頁。

(60) 同上、四八七頁。

(61) 從って、『慧能研究』の四九一頁で、「五十三家註」に言及して、

「順治一〇年本系統とこの系統はあるいは同じであろうか。」

と述べるのは正しくない。しかも、この推測は、同書四八七頁に、

「また頭註の「唐本」は、この内閣文庫本系の二つの重刊の跋を存する中國の近年の刊行本と思われるが、現在のところ筆者未見の資料であって、續藏經本との關係は明確ではない。」

と述べるのとも矛盾する。

(62) 『金剛經集解』では、二箇所に亙って「新州六祖註本」に言及されており、その編纂に際して、楊圭がこれを用いた可能性は高いと言わねばならない。即ち、卷四の一三張には、

「世本第一章多誤作如來不以具足相故。新州印六祖註本。南浦陳氏施本。第一章竝無不字。於理爲當。」

と見え、また、同じく巻四の二〇張に、

「壽春石本。作一合理相。南唐石本新州六祖註本。竝作一合相理。蓋形容其一合相義理也。識者更宜詳之。」

と見えている。

これは、慧能の『金剛經』の註釋に、慧能の出身地である新州で刊行されたものが存在し、『集解』がそれを用いたことを示すものであるが、ただ、先に拙稿「慧能に歸される數種の『金剛經』の註釋書について」で論じたように、『集解』は、二種の慧能の註釋書（『解義』と、恐らくは『大義訣』）を用いているので、別のものを指すとも考えられ、斷定はできない。

また、宋の惠洪（1071～1128）の『石門文字禪』巻二五に「題六祖釋金剛經」なる一文が収められているが、その文中に、

「祖師從而註釋之恩徳。可謂大矣。而傳布未廣。予竊患之。故化清信檀越。鏤版印施。普告大衆云。政和五年十月日。」（『欽定四庫全書』集部三、『景印文淵閣四庫全書』〈臺灣商務印書館〉1116-483）

と見えるから、政和五年（1115）に惠洪が中心になって刊行した刊本が存在したことが知られる。ただ、これについては、いかなる系統の本であったか明らかでないのは遺憾である。

(63) 前掲『慧能研究』四五五頁、二～三行目。

(64) 同上、四五五頁、四～五行目。

(65) 前掲「禪學叢書之二」所収本、三二二頁上段。

(66) 六地藏寺藏寫本、八張裏。

(67) 同上。

(68) 六地藏寺藏寫本、一四張裏。

(69) 同上。

(70) 前掲の拙稿「『金剛經解義』の成立をめぐって」を參照。

(71) 前掲『慧能研究』四二六頁、一六行目。

(72) ただし、「無餘者無餘」の「餘」字についての註記を缺いているのは、『慧能研究』の明確な誤りである。

(73) 龍谷大學圖書館藏本（館藏番號、經論釋1001-a）巻一、一七張表。

(74) 前掲『慧能研究』四三七頁、一七行目。

(75) 六地藏寺藏寫本、一五張表～裏。

(76) もっとも、『慧能研究』には、六地藏寺本では「方」の下に「是」の字があるという、誤った註記は見ることができる。

《附表3－1》

		誤	正	箇所
京大人文研蔵五山版	1	序	なし	419/ 1
	2	所糞	所糞	419/10
	3	堅固身	堅固力	422/ 1
	4	不濁	不獨	423/11
	5	其心	其心也	426/ 6
	6	一作	一本作	426/14
	7	清淨	淨	431/ 7
	8	和解	知解	432/16
	9	如標如指標	如摽如指摽	434/ 8
	10	依標	依摽	434/ 8
	11	標不是	摽不是	434/ 8
	12	照明	照即明*	437/14
	13	今有	今存	443/ 1
	14	晝夜	晝夜	443/11
	15	菩提	菩薩	444/16
	16	而行布施	なし	444/16
	17	比解	此解	446/ 2
	18	算數	算數	448/ 5
	19	加微	如微	448/ 6
	20	熾然	熾然	454/15
	21	種智	種知	455/14
	22	挐	拏	462/12
	23	挐	拏	462/13
	24	擅經	檀經	465/ 5
	25	卒	率	465/12

＊『慧能研究』は、この「即」の一字を脱しているために、この行の以下の註番號にずれが生じている。即ち、註30は、元來、この「即」に附すべきもの、註31は「明即」の「即」に、註32も「暗則」の「則」字に附すべきものである。

		誤	正	箇所
六地藏寺藏寫本	1	曹溪	曹谿	419/ 1
	2	學者	愚者	419/ 5
	3	是故	故	419/ 5
	4	斷除	斷	419/ 5
	5	佛大悲	大悲	419/11
	6	與此法	我與此法	419/12
	7	不見衆生是名衆生	なし	419/16
	8	爲除之	除之	420/ 8
	9	猛勇	勇猛	420/ 3
	10	六賊	結賊	423/ 3
	11	德城也	德城	423/ 6
	12	不濁	不獨	423/11
	13	此修行	修此行	424/13
	14	瞻仰尊顏	瞻仰	424/ 4
	15	超過	超	424/ 8
	16	無有上	無上	424/ 8
	17	含靈	含生	424/14
	18	讃嘆	讃歎	425/ 6
	19	心無取著	なし	426/ 4
	20	無餘無餘者無	無餘者無餘	426/16
	21	令永	令	426/17
	22	脱解	解脱	427/ 5
	23	即是衆	即衆	427/10
	24	佛是衆	佛衆	427/10
	25	生是佛	生佛	427/11
	26	不名住	不名	428/12
	27	祇求	求	428/ 3
	28	惟增	唯增	428/11
	29	無邊際	無有邊際	429/ 3
	30	是處	是	430/ 7
	31	一切諸相悟	悟一切諸相	430/ 7
	32	理也	理	430/ 7
	33	種諸所	所種諸	430/12

		誤	正	箇所
六地藏寺藏寫本	34	無所住	無住	430/14
	35	清淨	淨	431/ 7
	36	略述	略述於	431/ 1
	37	和解	知解	432/16
	38	是無相	無相	433/ 4
	39	蜜多	蜜多也	433/ 6
	40	讃嘆	讃歎	433/15
	41	般若者	般若	434/ 4
	42	此經	從此經	434/ 6
	43	菩提所	菩薩所	434/ 7
	44	文字	文	434/ 8
	45	即	耶	437/ 5
	46	照明	照即明	437/14
	47	等虛空界方是	是	437/17
	48	色身縱如須彌終不爲大也	なし	437/17
	49	無所説	不也	439/13
	50	了妄即眞眞妄倶泯	なし	440/ 4
	51	聞法	聞性	441/ 5
	52	晝夜	晝夜	443/11
	53	如盲	如善	444/15
	54	菩提	菩薩	444/16
	55	而行布施	なし	444/16
	56	信心不逆	信	445/10
	57	其處	其所	447/ 4
	58	持此經者	持此經	447/ 6
	59	等數	算數	448/ 5
	60	求出	永出	448/ 7
	61	加微	如微	448/ 6
	62	説義	諸義	450/ 1
	63	瑩徹	瑩徹	450/ 9

		誤	正	箇所
六地藏寺藏寫本	64	段作	段文	450/ 8
	65	前非	則非	451/11
	66	是最勝	是勝	451/13
	67	憐愍	憐憫	452/ 7
	68	身相	身	454/ 1
	69	告	佛告	454/13
	70	存之	存之於非説所説分入之	455/ 4の頭註
	71	佛言如	如	455/ 7
	72	得提	□提	455/ 8
	73	則非	即非	457/ 7
	74	令其	令眞	458/ 4
	75	具足	是足	461/ 7

＊＊『慧能研究』は、426/10の「多淪墜」を「墮阿鼻」に作るという註と、「淪」を「偏」に作り、「淪墜イ」と頭註するという註の、相互に相い矛盾する註を附すが、事實は、「多淪墜」を「墮阿鼻」に作り、「淪墜イ」と頭註するというのが正しい。

《附表３－２》

江戸時代町版

	誤	正	箇所
1	故	是故	419/ 5
2	所冀	所翼	419/10
3	無勝	尤勝	419/14 の頭註
4	不濁	不獨	423/11
5	遍者	偏者	425/11
6	其心	其心也	426/ 6
7	逢迎	逢迎	431/ 3
8	和解	知解	432/16
9	則不說	即不說	436/ 8
10	則非	即非	437/ 4
11	即	耶	437/ 5
12	波羅蜜	波羅密	440/ 3
13	忽聞	忽聞	442/ 7
14	晝夜	晝夜	443/11
15	菩提	菩薩	444/16
16	而行布施	なし	444/16
17	算數	算數	448/ 5
18	加微	如微	448/ 6

内閣文庫等蔵明版

	誤	正	箇所
1	不濁	不獨	423/11
2	其心	其心也	426/ 6
3	五欲	王欲	428/ 3
4	五欲	王欲	428/ 4
5	外利	殊利	428/ 4
6	名不住	名布生	428/ 4
7	逢迎	逢迎	431/ 3
8	和解	知解	432/16
9	種種	種使	432/16
10	如標如指標	如標如指標	434/ 8
11	即	耶	437/ 5
12	晝夜	晝夜	443/11
13	菩提	菩薩	444/16
14	而行布施	なし	444/16
15	末法	未法	445/10
16	算數	算數	448/ 5
17	加微	如微	448/ 6
18	末法	未法	448/10
19	超過	起過	453/11
20	衆生壽	衆壽	457/ 3
21	以翼	以異	458/ 5
22	是名	是名	460/ 5
23	金剛般若波羅蜜經	なし	462/10
24	挐	拏	462/12
25	挐	拏	462/13

金剛般若経註合糅本

	誤	正	箇所
1	猛勇	勇猛	420/ 3
2	中央也	中央	421/11
3	避身也	避身業也	421/12
4	なし	開經偈あり	422/6-
5	不濁	不獨	423/11
6	付囑	付屬	424/12
7	本無東	無東	429/ 6
8	如理實見分第五	なし	429/11
9	無相	無相也	429/13
10	供養	なし	431/ 2
11	前念	於念	432/12
12	和解	知解	432/16
13	四句之中	四句中	433/15
14	即	耶	437/ 5
15	修三十二	修三十二相	440/10
16	說法	諸法	441/14
17	四相	之相	442/ 2
18	晝夜	晝夜	443/11
19	菩提	菩薩	444/16
20	而行布施	なし	444/16
21	比解	此解	446/ 2
22	荷檐	荷擔	446/16
23	算數	算數	448/ 5
24	加微	如微	448/ 6
25	言即非	言則非	451/ 5
26	色相	色身	454/ 3
27	離	离	455/ 4
28	今亦	令亦	455/ 5
29	四相而	四相	456/ 1
30	喝囉	喝羅	462/12
31	挐	拏	462/12
32	挐	拏	462/13
33	那君	邢君	465/ 6

金剛経五家解合糅本

	誤	正	箇所
1	鎔鍊	鎔煉	419/10
2	以除之	除之	420/ 8
3	烹鍊	烹煉	420/ 5
4	猛勇	勇猛	420/ 3
5	不濁	不獨	423/11
6	讚嘆	讚歎	425/ 6
7	名不住	是名不住	428/ 4
8	無所分別	無分別	429/ 8
9	恆	恆沙	430/ 5
10	和解	知解	432/16
11	讚嘆	讚歎	433/15
12	出也	出	434/ 6
13	即	耶	437/ 5
14	自見	自見處	441/14
15	輪廻	輪迴	441/17
16	晝夜	晝夜	443/11
17	求望	なし	443/17
18	所說	所有言說	444/ 7
19	菩提	菩薩	444/16
20	而行布施	なし	444/16
21	復起	復能起	446/13
22	算數	算數	448/ 5
23	加微	如微	448/ 6
24	佛言	言	450/ 3
25	是言	是之言	450/ 3
26	段作	段文	450/ 8
27	慧眼也	佛眼也	452/10
28	後序	なし	463/ 1
29	輪廻	輪迴	463/ 9

附論　關聯する二、三の文獻について

はじめに

先に『解義』の諸本の系統について論じた際、多くの『解義』の傳本とともに、他の文獻の中に合糅、あるいは引用されているテキスト等についても言及した。そうしたものの中には、『解義』以外の文獻についても、他に見られないものや、古い形を傳えるものなどが含まれており、高い資料價値を有するものが非常に多い。また、そうでない場合でも、そうした形で種々の文獻が傳えられたということは、テキストの傳承や、佛教の受容という觀點から見る時、非常に興味深いものがある。特に、これらの文獻には、それらに對する一般の需要の高さを示すように、關聯する類似文獻が存在する場合や、同種の刊本が多數知られている場合が多く見られるので、なおさらのことである。從って、これらの諸文獻の內容と相互關係を捉えるということは、様々な意味で非常に重要なことだと言えよう。

ところが、こうしたことは、從來あまり重視されてはこなかったようで、たまに言及されることはあっても、その內容には、かなりの問題を殘しているように思われるのである。そこで、以下において、そうした文獻をいくつか取り上げ、その成立と內容、竝びに傳本、關聯文獻に關して、これまでに知り得たところを備忘も兼ねて記しておこうと思う。なお明らかでない點も多いが、それらについては別の機會を期することとしたい。識者のご教示を請う所以である。

1．「金剛經十七家解」と「金剛經五十三家註」

a．『金剛經集解』の成立と諸本

『金剛經集解』[(1)]は、南宋の紹定四年（1231）の成立で、楊圭と潘舜龍の共編にかかり、當時、傳わっていた種々の『金剛經』の註釋書の精要を集め、一書としたものであるが、その經緯については、楊圭自身が序文で次のように述べていることによって明らかである。

「此一卷經。窮郷委巷。匹夫匹婦。人人受持誦念。叩其理義。懵然不知下

落。今掇拾諸解之英華。因其所向。而順導之。使人人知佛之行。.... 或曰。德山携金剛經鈔。南遊見龍潭。至夜入室。掲簾而出。潭乃點紙燭付之。方接吹滅。山當下大徹。盡焚其鈔。今子捃摭筌蹄。正所謂百年鑽故紙。未有出頭時。答曰。要熟須從這裏打過。如未造德山地位。便欲焚鈔。切恐子未夢見金剛經在。一日擧似潘舜卿。龔德莊大噱曰。唯。舜卿載初清修之士。不茹葷酒。深於此經。同共編集。去取之功尤多。圭捐鋟梓。以廣法施云。」[2]

本書は「金剛經十七家解」と呼ばれることもあるが、それは冒頭に附された「十七家解註金剛經姓號目録」[3] によるものであろう。

これによれば、言うところの「十七家」とは、

1．五十三如來	2．晉康樂侯謝靈運	3．後秦解空僧肇
4．武當山居士劉蚪	5．一註本不顯名	6．梁朝傅大士頌
7．智者頌	8．李唐六祖慧能	9．李唐疏鈔僧宗密作序
10．皇宋富沙僧子榮	11．龍舒居士王日休	12．冶父僧道川頌
13．上竺僧若訥	14．致政陳雄	15．如如居士顏丙
16．雲庵僧了性	17．茨庵僧微師	

の諸家のこととなるが、ただ、本書の冒頭、經題の解釋の箇所で眞っ先に掲げられている「僊遊翁集英」や「沖應眞人周史卿」が含まれていないことからも窺われるように、ここに名の擧げられているものが、依用されているものの全てであるわけではない[4]。もっとも、これらへの參照は、『金剛經』の全體に亙るものではないから、特に名を擧げるのを憚ったのかも知れない。

これらの中には、今日、他に全く傳わらないものも多く[5]、また、傳わっている場合でも、『解義』のように、異本として價値の高いものが含まれているので、今日となってみれば極めて貴重な資料といえる。

管見の及ぶ範圍で知りえた『集解』の諸本を列擧すれば、以下のごとくである。

1．萬暦元年～二年（1573～74）、三山復初庵刊『金剛般若波羅蜜經集註』四卷[6]

a．京都大學圖書館藏本（館藏番號、藏-5-コ-6）[7]

b．東北大學圖書館藏本（館藏番號、狩谷文庫2-2941-4）[8]

c．龍谷大學圖書館藏本（館藏番號、經論釋1001-a）(9)
d．早稻田大學圖書館藏本（館藏番號、ハ-5-1229）(10)
e．京都大學人文科学研究所藏本（館藏番號、松本1800-子-XIII）(11)
f．叡山文庫藏本（館藏番號、眞如-内典-5-81-127）(12)
g．成簣堂文庫藏本(13)

2．刊年不明、戚繼光刊『金剛經集解』二卷
a．叡山文庫藏本（館藏番號、天海-内典-27-9-451(3)）(14)

3．萬暦六年（1578）、趙如循、歸大徳刊『金剛經注』二卷
a．叡山文庫藏本（館藏番號、天海-内典-5-21-104）(15)

4．寛永二〇年（1642）、京都中野是誰刊『金剛經集解』四卷(16)
a．駒澤大學圖書館藏本（館藏番號、253.1-28）(17)
b．東洋大學圖書館藏本（館藏番號、ゐ-4-左-8、哲學堂文庫4876）(18)
c．龍谷大學圖書館藏本（館藏番號、經論釋14-4）(19)
d．靜嘉堂文庫藏本（館藏番號、88-1-敬）(20)

これらの諸本を一瞥して、すぐに明らかになるのは、３と４が１と全く版式を同じくしているということである。１は、繪などを插入し、經文を大字で示すなど、甚だ特徴的な刊本なのであるが、それらについても、３と４は、そのままに刻しているので、これら三者が密接な關係にあることは疑いえない(21)。

もっとも、３は、外形的には二卷となっているが、その内部は、１や４と同じ様に四卷となっており、要するに、卷一と卷二、卷三と卷四を合卷したものに過ぎないのである。

問題は、その關係であるが、１に、

「此經全部共計二百二十五葉。分爲四卷以成書式。大字楷書方便老眼。外心經節要一部附茲統施印。板見貯三山南臺後浦復初庵。十方有縁法眷或求印者。聽其自便。萬曆元年題記。」(22)

という題記が見られることからすれば、この獨特の版式は、この萬暦元年版に始まると考えられるから、これらに共通の祖本が別に存在したとも思えない。從って、１が時と所を異にして、中國と日本で相い繼いで翻刻されたのが３と４であ

ると考えられるのである。このことは、1がいかに廣く社會に受け入れられ、流布したかを物語るものと言えよう。

従って、これらは基本的には、全く同一のテキストと認められるわけであるが、細部に多少の變更を認めることができるので、それを指摘しておこう。

まず、龍大本によって、1の内容を一瞥すれば、冒頭に、

イ．佛畫
ロ．「金剛般若波羅蜜經序」（紹定四年〈1231〉楊圭撰）
ハ．「十七家解注金剛經姓號目録」
ニ．校正者・共編者・編者名等の提示
ホ．「金剛經啓請」
ヘ．「淨口業眞言」「安土地眞言」「普供養眞言」
ト．「皇國永固。帝道遐昌」の題記
チ．「奉請八金剛」「奉請四菩薩」
リ．前掲の題記
ヌ．「發願文」「云何梵」「開經偈」

を掲げ、本文の後に、

ル．「般若無盡藏眞言」「金剛心陀羅尼」「補闕圓滿眞言」「収經偈」
ヲ．『金剛經』の本文の異本との校合
ワ．智者禪師の頌三篇、大法眼禪師の頌四篇
カ．刊記
ヨ．跋文（至元三〇年〈1293〉葉文㮠撰）
タ．跋文（至元四年〈1338〉廖文焱撰）
レ．跋文（永樂九年〈1411〉王汝賢撰）
ソ．「大乘金剛般若波羅密經註解後序」（萬暦二年〈1574〉謝觀光撰）
ツ．「宋太宗皇帝御製金剛經序」[23]
ネ．施財者一覽
ナ．佛畫
ラ．「了義心經後跋」（萬暦二年〈1574〉謝觀光撰）

を置くという構成を取っている。

これに對して、3は、甚だしい亂張があるため、原型が窺いにくくなっている

ものの、冒頭に關しては、基本的には、1をそのまま踏襲し、リの題記の内容を改めるとともに、への「普供養眞言」の中途に、

「趙母王氏命男如循刊
長洲歸大徳續刊施行
桐涇橋内劉廷震鋟梓」

という刊記を挾み込んでいる點に違いが見られるのみである。

一方、末尾では、かなりの改變が施され、ル、ヲ、ワの後、カに換えて玄奘譯の『般若心經』を置き、その後の、ソ、ツ、ネ、ナ、ラを省くとともに、ヨの後に、黄公紹撰の「金剛般若波羅蜜經集解後序」、竝びに、至元乙亥の鄧夔の序文を插入している。そして、その後、タ、レが續き、末尾に、『老子傳尹喜外日用經』を附している。叡山文庫藏本は、冒頭に萬暦六年（1578）の「重刻金剛經後序」を置いているが、これは亂張の結果であって、元來は、この『老子傳尹喜外日用經』の後の卷末にあったものであろう。

一方、4は、冒頭は1に同じいが(24)、末尾に相違が見られ、ツをヨの前に移すとともに、ラを削除し、また、ワの後に、新たな刊記を插入している。

從って、3には、黄公紹の「金剛般若波羅蜜經集解後序」、竝びに、鄧夔の序という二つの新たな資料が加えられているわけであるが、本文が、1の翻刻であることは間違いないから、これらは、異なる刊本などから取り込まれたものと考えざるをえないであろう。

ところで、ここで注目すべきは、2の叡山文庫本である。というのは、この本は、黄公紹の後序や鄧夔の序文を有しているうえに、黄公紹の後序の標題そのままに、「金剛經集解」と題されているからである。

今、この本を1と比較してみると、先ず、冒頭のイ、ホ、ト、チ、リ、竝びに、ヌの「發願文」「云何梵」がなく、へはルの前に、また、ヌの「開經偈」は、ルの「収經偈」の前に移されている。

一方、末尾では、ヲ、カ、ヨ、ソ～ラがなく、ヨの位置に黄公紹の後序と鄧夔の序が差し込まれ、最後に「金剛般若波羅蜜經集解後序終」という尾題が附されているのである。

從って、跋文の存缺の關係は以下のようになる。

	1	2	3	4
宋太宗皇帝御製金剛經序	○	×	×	○
黄公紹の後序	×	○	○	×
至元癸未（1293）葉文楙跋	○	×	○	○
至元乙亥（1275? 1335?）鄧夔序	×	○	○	×
至元戊寅（1278? 1338?）廖文焱跋	○	○	○	○
永樂九年（1411）王汝賢跋	○	○	○	○
萬曆二年（1574）謝觀光後序	○	×	×	○

至元という年號は、元代に二度あるため、鄧夔や廖文焱の序文が書かれた時期を特定できないのは遺憾であるが、序文の内容からすれば、黄公紹の後序と葉文楙の跋文、鄧夔の序文と廖文焱の跋文がそれぞれ關聯するものであることは明らかであるから[25]、これらは、それぞれほぼ同時期に著されたものと見てよい。更に、王汝賢の跋文を見るに、廖氏に言及しているから、その出版が廖氏刊本に基づくものであったことは間違いない。

ただ、この系統と葉文楙の刊本との關係は、必ずしも明確ではないし、元來、相互に關聯するはずの黄公紹の後序と葉文楙の跋文が、どうして１や２において一緒に掲げられていないのかも明らかでない。

b．「金剛經五十三家註」二種について

上の『金剛經集解』（十七家解）に基づいて成立した文獻に、明の成祖の編輯にかかる、いわゆる「金剛經五十三家註」がある。

しかるに、これには二系統があり、その成立には問題が殘されている。

まず、第一の系統に屬するものを掲げれば、以下のごとくである。

1．永樂二一年（1423）、永樂内府刊『金剛般若波羅蜜經集註』一卷
　a．復旦大學圖書館藏本[26]

2．道光二六年（1846）、震初刊『金剛經集註』四卷（二册）
　a．東京大學總合圖書館藏本（館藏番號、C40-836、二　鴎）[27]

3．刊年不明、『金剛般若波羅蜜經五十三家集註』四卷

a．中華民國（所藏處不詳）所藏本[28]

4．光緒二〇年（1894）刊『金剛經集註』四卷

a．駒澤大學圖書館藏本（館藏番號、253.1-27）[29]

b．廣州市中山大學圖書館藏本（館藏番號、0-B942-8-17）[30]

これら諸本が1の永樂内府刊本を祖本とするものであることは確かであるが、このうち、3は、2と同じく道光二六年の樊師仲による重刻序を有するが、版式も異なり、明らかに異版である。ただ、本文自體は全同であるから、刊年等は明らかでないが、2の翻刻であることは間違いない。また、4には、2や3に見られる樊師仲の序文が「原序」として掲げられているので、直接、2を底本とした翻刻であったらしい。

これらの間に見られる、内容上の最も大きな相違點は、1が全く分章を行っていないのに對して、2では昭明太子のそれが採用され、その分章の標目に續いて、各分章の要點が掲げられているということであり、それは、3や4でもそのまま繼承されている。また、2以下の諸本では、冒頭と末尾にしばしば改變が施されているが[31]、分章等を除けば、『金剛經集解』自體のテキストとしては全同と見做してよい。

この系統では、冒頭に「永樂二十一年四月十七日」の御製序を掲げ、また、「集註」と呼ばれている點に特徴がある。

一方、第二の系統に屬するものとしては、

1．同治九年（1870）、周旭亭刊『金剛經注解』四卷

a．東京大學東洋文化研究所藏本（館藏番號、子-釋家-經疏-1）[32]

2．同治十三年（1873）、昭慶寺刊『金剛經註解』四卷

a．京都大學圖書館藏本（館藏番號、藏-5-コ-9）[33]

b．廣州市中山大學圖書館藏本（館藏番號、0-B942-8-12）[34]

3．明治年間、藏經書院刊『金剛經註解』四卷（續藏一-三八-五）

などの存在が知られるが[35]、このうち、1と2は、版式を同じくし、しかも、康煕一二年（1673）と乾隆四一年（1776）の跋、道光二四年（1844）の刊記まで

共通するので、全く同じ刊本に基づいて覆刻されたことが知られる。ただし、2には多少の増補が見られ、冒頭に「金剛經道場前儀」と「金剛般若波羅蜜經目録」が、また、末尾に「金剛經道場後儀」が新たに附されている。

3は、末尾に乾隆四一年の跋文を掲げるので、あたかも1や2の祖本に基づくかのごとくであるが、實際には、道光二四年の刊記と同治一三年の刊記を省いただけで、2の翻刻に過ぎないことは、2-aに附された續藏のための割付の存在によって疑う餘地はない(36)。

この系統の諸本は、「註解」と呼ばれ、當初から昭明太子の分章が採用されている點、冒頭の御製序が「永樂癸卯四月八日」づけとなっている點で先の「集註」とは異なり、また、洪蓮の正統三年(1438)の「金剛經集註原序」、楊圭の「金剛般若波羅蜜經舊序」「金剛經五十三家註解姓號目録」を有する點でも相違が見られる(37)。

ちなみに、「金剛經五十三家註解姓號目録」(38)によって、五十三家の名を掲げれば、以下のごとくであり、「十七家解」に較べると、禪宗系の人々の註釋を大幅に補っていることが知られる(下線部は、既に「十七家解註金剛經姓號目録」に掲げられていたものである(39))。

1. <u>宝積如來</u>	2. <u>自在力王如來</u>	3. <u>日月珠光如來</u>
4. <u>金海光如來</u>	5. <u>通王如來</u>	6. <u>法常滿如來</u>
7. 文殊師利菩薩	8. <u>後秦僧肇法師</u>	9. <u>天台智顗大師</u>
10. <u>梁傅大士</u>	11. 達磨大師	12. 四祖忍大師
13. 五祖大師	14. <u>六祖大師</u>	15. 永嘉大師
16. <u>宗密禪師</u>	17. 馬祖大師	18. 百丈海禪師
19. 南泉願禪師	20. 歸宗禪師	21. 黄檗禪師
22. 臨濟大師	23. 太陽玄禪師	24. 同觀察禪師
25. <u>圭峯禪師</u>	26. 慈受深禪師	27. 祖印明禪師
28. 海覺元禪師	29. 琪禪師	30. 圜悟禪師
31. 徑山杲禪師	32. 保寧勇禪師	33. 眞淨文禪師
34. 古徳禪師	35. <u>雲菴了性禪師</u>	36. <u>茨菴僧微禪師</u>
37. <u>若訥禪師</u>	38. <u>富沙子榮禪師</u>	39. <u>冶父道川禪師</u>
40. 唐玄宗皇帝	41. 逍遙翁	42. 仙游翁集英
43. 周史卿眞人	44. <u>晉謝靈運</u>	45. <u>王日休居士</u>

46．龐蘊居士　　47．顔如如居士　　48．張無盡居士
49．李文會居士　　50．鼂文元居士　　51．劉蚪居士
52．陳雄居士　　53．無名氏

もっとも、既に「十七家解」に存しながら、「十七家解註金剛經姓號目録」に擧げられていなかったものを新たに掲げたり、ある人の註釋中に言及されているに過ぎないものを數に入れたりして、その數を增さんとしているし、「宗密禪師」と「圭峯禪師」を二重に數えるなどの不備もあって、實際の變化は、十七家から五十三家になったことから想像されるものほど大幅なものとは言い難い。

しかし、實を言えば、「集註」と「注解」の相違は、上に述べたような外面的な形態に留まるものではなく、その註釋の内容自體にも及んでいる。即ち、（兩者の前後關係は明らかでないが、假に「註解」を基準として言えば）「集註」は「註解」に對して、時に、增補や削除を施したり、ある註釋を他のものと差し替えたりしているのである。

概して言えば、「集註」は「註解」より内容が豐富であると言える。例えば、「正信希有分第六」の末尾の經文、

「以是義故。如來常説。汝等比邱。知我説法。如筏喩者。法尚應捨。何況非法。」

に對して、「註解」は、

「王日休曰。筏謂編竹木牌。以渡人。乃過水之具。亦船之類也。以是義理之故。乃指上。文所言之意也。佛嘗謂汝等比邱。當知我之説法。如船筏之譬喩。是未渡之時。不可無船筏。喩若未了悟眞性之時。不可無佛法也。既渡之後。則不須船筏。喩既了悟眞性之後。即不須佛法也。如此則既悟之後。佛法尚當捨去。則非佛法而爲外道法者。尤當捨去。故云。法尚應捨。何況非法。傅大士頌曰。渡河須用筏。到岸不須船。此言盡之矣。」(40)

という王日休の註を掲げるのみであるが、「集解」では、更に、その後に、

「僧若訥曰。筏喩經云。若解筏喩者。善法尚捨。何況不善法。如欲濟川。先應取筏。至彼岸已。捨而去之。」

「顏丙曰。法相屬有。非法相屬無。乃兩頭見。直須截斷。是故不應取法。不應取非法。以此義故。如來常説。汝等比丘知我説法。如筏喩者。筏乃大船也。譬如人未渡河。須假舡筏。既到彼岸。當離其筏。不可執着也。人未出生愛河。須假佛法。方得度脱。法亦當捨。所以趙州道佛之一字。吾不忍聞。佛法尚應捨。何況非佛法。」

「李文會曰。執有説空。因何用筏。有執既喪。空説奚存。既已渡河。那更存筏。」

「傅大士曰。渡河須用筏。到岸不須船。人法知無我。悟理詎勞筌。中流仍被溺。誰論在二邊〈子榮曰。存心中道。尚被流溺。中道不立。二邊何安〉有無如取一。即被汚心田。且未見性之時。在於生死海中。遇善知識。教以言説。分別法相。得見自性。不可更執著也。法尚應捨。何況非法者。經云。若人欲識佛境界。當淨其意。如虛空。外無一法而建立。法尚應捨。何況非法乎。」

「川禪師曰。水到渠成。頌曰。終日忙忙。那事無妨。不求解脱。不樂天堂。但能一念歸無念。高歩毘盧頂上行。」(41)

などの註を有している。ここでも見られるが、「集註」では、李文會や川禪師、傅大士の言葉が、特にしばしば增補されているようである。

しかし、このような二系統が成立した理由については明らかではない。先ず、「註解」の御製序の「永樂癸卯」とは、「集註」にいう「永樂二十一年」に外ならないから、纔か十日の間に二つの序文が書かれたことになる。しかも、この二つの序文は一部に文字の相違があるだけで、基本的には全く同じものなのである。いったいどうしてこのようなことが生じえたというのであろうか。

また、洪蓮の序文に、

「洪惟太宗皇帝不忘靈山付囑之情。遂啓流通之念。故乃留神内典。簡閲諸編。選其至精至要經旨弗違者。重加纂輯特命介梓。用廣流傳。而後親運睿思。煥發序文。有云先天地而不見其始。後天地而不見其終。觀之金剛般若波羅蜜經。蓋可見矣。. . . . . 由是會約同志。牙捨珍資。命工重刊印施。遐邇流傳。普願五濁衆生。快登般若慈航。速達菩提岸。仰冀時和歳稔。雨順風調。國泰民安。法輪常轉者矣。」(42)

というので、これが、明の皇帝の御撰であることは確かであるにしても、「太宗」という皇帝は明代には存在せず、しかも、ここに引かれている序文は成祖永樂帝の「御製序」と一致するので、洪蓮は、成祖を「太宗」と呼んでいることになるが、このようなことがありえたかどうか。更に問題なのは、明の「太祖」洪武帝にも御撰の『集注金剛經』なるものがあり、成祖がそれに序文を書いていたらしいということである(43)。従って、或いは、洪蓮が出版したのは太祖御撰、成祖序のものであったのかも知れない。だとすれば、成祖は、その直後に自らそれを編輯し直し、それに先の序文を轉用して附したのではないだろうか。

しかし、その場合、どうして、ほとんど時を同じくして成立し、ほとんど同じ序文と内容を有する二本が同時に流布することになったのかがはっきりしないのである。また、成祖には「永樂九年五月一日」付けの御製序もあるというから(44)、それとの關聯も問題である。

このように、この本の成立については、明らかでない點が多々あるが、いずれにしても、これらが『金剛經集解』の展開であることは、その内容から疑いえない。

2．『金剛經五家解』

a．諸本について

『五家解』で日本に傳わるものは、それほど多くはないが、それでも、管見の及ぶ範圍で、以下のような諸本の存在を確認することができた(45)。

1．京都大學圖書館藏本（館藏番號、河合本-コ-66）(46)
2．駒澤大學圖書館藏本（館藏番號、086-87）(47)
3．東洋文庫藏本（館藏番號、XI-4-B-30）(48)
4．花園大學國際禪研究所柳田文庫藏本A（館藏番號、W183.27-2）(49)
5．花園大學國際禪研究所柳田文庫藏本B（館藏番號、W183.27-3）(50)

このうち、２～５は、全く同一の體裁で彫られた異版であり、古い刊本を底本にして、そのままの形で覆刻を重ねたものである。

中で最も古いのは、２の嘉靖十六年（1537）神陰山身安寺刊本であるが、それは上卷だけのことで、下卷は全くの異版であって、むしろ他の刊本より新しいも

のであるように思われる。

3は、康熙十八年（1679）の雲興寺刊本であるが（ただし、上卷の第一紙は補寫）、下卷の末尾に康熙四年刊本などに見られぬ三つの資料、即ち、世祖（1456−68在位）の「御製跋」、成化二三年（1487）の金紐の跋文、竝びに、康熙一九年（1680）の寂翁敬一の「金剛經後跋」を附している點が貴重である[51]。

また、4は、康熙二十年（1681）に雲興寺で刊行された上卷と、「聖上二十八年辛巳」（?）と記される鳳巖寺刊の下卷の合本であるが、やはり、卷末に「御製跋」と金紐の跋文を有し[52]、その後に、更に淨源[53]による「鳳巖寺新刻金剛經跋」を附している。

特に、この本で注意されるのは、古來、末尾に附されていた「六祖口訣」を、「六祖口訣序天台羅迪所述半有半無故不録」という理由で省いているということである。この「六祖口訣」が實は天台羅適の後序の一部に過ぎないことは、關口眞大氏以來、學會では定説となっているが[54]、それより、ずっと以前に、既に朝鮮で、このことは知られていたのである[55]。

5についても、本自體の大きさが上下卷で異なっており、異なる刊本を合本にしたものであることは確かと思われる。上卷は、末尾の刊記により、康熙四年（1665）興國寺刊本と知られるが、下卷については全く明らかでない。ただ、中文出版社から影印本が出ているので、參照は容易である[56]。

日本に傳わる『五家解』で、版式を異にするのは、1の京都大學藏本のみであるが、この本は上卷のみの破本で、刊記もないので、いつ、どこで刊行されたものか明らかではない。しかし、その版式などをもとに、韓國の各圖書館の藏書目録と照合してみると、延世大學に藏される嘉靖三六年（1558）刊本に近いので[57]、あるいはこれと同版ではないかと疑われる。ただ、本文を比較してみると、これも康熙四年刊本などとほとんど異ならないので[58]、『金剛經五家解』のテキストは、各本に見られるわずかな誤刻などを除けば、その本文は全く同一と見做すことができる。

なお、日本に傳わるテキストは、以上のように限られているが、韓國に傳わるものは甚だ多い。ただ、目録の記載などから判斷すると、その多くが上の2〜5と全く版式を同じくする覆刻本で[59]、そうでない場合でも[60]、基本的には、その本文は同一と見てよいと思われる。

b．その内容と成立

本書は、『金剛經』に對する五人の註釋を會本にし、更に、それに得通（1376-1433）撰の「説誼」、並びに「決疑」を附したものであり、そのいわゆる「五家解」とは、本書冒頭の列表記に従えば、

1．「雙林傅大士　贊」
2．「六祖大鑒禪師　口訣」
3．「圭峯密禪師　纂要」
4．「冶父川禪師　頌」
5．「豫章鏡禪師　提綱」

のことである。

本書の構成は、康熙四年版によれば、先ず巻頭に、

イ．「金剛般若波羅蜜經五家解序説」（永樂十三年〈1415〉得通撰）
ロ．「曹溪六祖禪師序」（慧能撰）
ハ．「豫章沙門宗鏡提頌綱要序」（宗鏡撰）(61)

を掲げ、その後、

ニ．『金剛經』の經文と五家の註釋の會本（劈頭に「圭峯密禪師疏論纂要并序」、掉尾に「提頌綱要後序」あり）

が續き、巻尾に、

ホ．傅大士の頌三篇
ヘ．清涼大法眼禪師の頌四篇
ト．「般若無盡藏」眞言
チ．「六祖口訣」（慧能撰とされるが、實は羅適の後序の一部）
リ．「決疑」（得通撰）

を置いている。そして、このうち、イ、ロ、ハ、ニ、ホには、得通の説誼が附されている（ただし、ニについては、經文と冶父の頌、宗鏡の提綱のみ）。

この構成は、基本的にはどの異本にも共通するが、ただ、本によっては、先述のごとく、チの「六祖口訣」を省いたり、リの後に「御製跋」を有するものがある。

本書の成立について、柳田聖山氏は、「禪籍解題」において、五家の名前を列擧した上で、次のように述べている。

「これら五家の注は、古來それぞれ單行せられ、すべて續藏一-三十八に收めるが、早くより朝鮮に入ったらしい。五家の注を集めたのは、涵虛堂得通己和で、巻首に永樂乙未（一四一五）の序がある。」[62]

つまり、編輯は得通の手になるというのであるが、彼自身の「金剛般若波羅蜜經五家序説」に、五家の名を掲げ、

「然此編集出於何人之手。而不現其名乎。吾喜其爲一佛五祖師之心。令一轉而便見也。」[63]

と言っているのであるから、得通以前に既に何者かによって編輯されていたと見ねばなるまい。從って、得通がこの序文を撰した際に實際行ったのは、それを校訂し、「決疑」を附したことに過ぎないというべきであろう。

得通が本書の校訂を行ったこと、竝びに「決疑」がその際の產物であることは、得通自身が、「金剛般若波羅蜜經五家解序説」で、

「所嗟雖有彈弦之妙指。未遇賞音之嘉聰。由是誤聽峩峩。作洋洋者多矣。又於經疏。以僞濫眞乳。非城外者頗多。豈非以去聖愈遠。歷傳多手而致然歟。夫聖言之所以傳之於後之世也。唯文不能設。空義不獨傳。文義相資。方成妙唱。作天下古今龜鑒。開世與出世之眼目。若義有諸訛。文有錯誤。則非唯不能開人眼目。亦令誤解。礙正知見。蓋不爲文字所惑。能體聖人之意者。誠難得也。然若心淸慮靜。縁文究義。依義尋文。則文義之舛錯者。不隱微毫。了然昭著。如世病脈不能逃於善醫之手。予雖非善醫之儔。幸粗識文義。略辨眞僞。故今之經之疏之中之。或脱或衍或倒或誤者。簡而出之。參之諸本。質之諸師。以正之。然他本所據外。未嘗一字一句妄自加損於其間。凡有所疑。他本無所據處。據義以決。附之卷尾而已。」[64]

と述べていることによって明らかである。

それ故、この際に、從來から傳わっていた本文にある程度の改變が施されたことは間違いないのだが、ここに述べられるごとき嚴密なる態度に基づいてなされたとすれば、それは決して原型を損なうようなものではなかったと考えてよいで

あろう。

得通は、その後、しばしば本書の講義を行っている。即ち、門人の野夫が撰した「涵虚堂得通和尚行状」には、次のような一節が見られるのである。

「甲午春三月。到慈母山烟峰寺。占一小室。名涵虚堂。勤修三載。曾無少息。又自丁酉至戊戌。一冬兩夏。五家講席。三設是寺。」(65)

つまり、永樂一五年（1417）から翌年にかけて、慈母山烟峰寺において、三度これを講じたというのである。とすれば、『五家解』の校訂は、そのための前提として行われたのかとも思われる。

いずれにせよ、そうした講義が、記録され、やがて纏められて「説誼」となったに違いない。ただ、現行の『五家解』では、傅大士の贊、六祖の口訣、宗密の纂要には説誼が附されていないから(66)、何らかの理由で、それらの講義は行われなかったのであろう。

從って、「説誼」は、當初、『五家解』とは別に傳えられていたはずである。後に言及する『金剛經三家解』に附された、姜希孟の跋文には、

「爾時。文宗在東宮。世祖在潛曁諸宗英昵。承世宗慈慈訓。紬繹諸經。以爲金剛經諸解中。冶父宗鏡。直是了義。頓教法文。南明繼頌。禪家活語。俱是離文字底説話。單提直指之妙。舍此而無以他求。歳戊辰春。又得涵虚堂信如所撰冶父宗鏡話説誼。上大加稱賞。命世祖飜譯。親加睿裁。」(67)

と、冶父や宗鏡の註とは別に、その「説誼」を得たと言っている。これは恐らく、少なくとも「歳戊辰」、即ち正統一三年（1448）の段階では、得通の「説誼」が『五家解』と別個に存在したことを示すものであろう。

現在傳わる『五家解』は、いずれも二卷本となっているが、「涵虚堂得通和尚行状」では、

「先師平生所著經論註疏詩賦篇章。般若五家説誼一卷。顯正論一卷。般若懺文二帙。綸貫一卷。對靈小參下語等。校正之。書之數本。留鎭願刹。示之於後。」(68)

と「一卷」と明記している。これは、あるいは、この別行本を指したものではなかろうか(69)。

しかし、やがて、その「説誼」が、從來傳えられていた『五家解』と會本にされ、現行の『五家解』が成立したわけであるが、それは、實は國王の敕命によるものであった。即ち、世祖の「御製跋」に、

「幸蒙天之力。克靖大難。化家爲國。天子錫命。威加外夷。國内寧謐。此豈予之智力所致。全是三寶密加之力。而況世尊。以正法付囑國王大臣流通。眞化今正是時。」(70)

と述べた上で、次のように言う。

「又請慧覺尊尊者信眉。演慶住持弘濬等。校定涵虚堂金剛經説義。入之五家解爲一書。.....命印成各百件。上爲皇考皇妣。及祖宗列位。早證正覺。次爲亡子永離八苦。速免三界。超出二乘。圓成十力之願。嗚呼。有生者必有死。樂極則悲必來。」(71)

つまり、父母と子の冥福を祈るために、世祖が、慧覺尊尊者信眉や演慶住持弘濬に命じて、(得通校訂の)「五家解」に得通の「説誼」を合糅・刊行させたものが、今日の『金剛經五家解』の祖本なのである。

この「御製跋」には紀年がないので、その成立時期は明らかではないが、少なくともそれが、世祖の在位期間内(1456－68)であったことは間違いない。この際に刊行されたものは百部と少なく、流通も限られていたが、その後、間もなく、この刊本を祖本として翻刻が行われた。即ち、「蒼龍丁未」(成化二三年、1487)の金紐撰の跋文に、次のように見えている。

「昔徳廟爲世子以病殂。世祖與貞熹王后。悼念不已。謂導薦冥遊。莫先轉經。乃命諸臣。添入五家解於金剛經。御書正文大字。印出一百件。散施流通。字畫大故。雖老眼亦便於誦習。眞勝縁也。然範銅爲字。隨印隨毀。其所印之經。歳久磨滅。至今存者無幾。有比丘尚中。深慨其然。乃募衆縁。辛勤數載。始鋟于梓。以廣其傳。而求予文爲跋。」(72)

これによって、世祖の刊本が銅活字本であったことが知られるが、それはともかく、ここで「字畫大故。雖老眼亦便於誦習。眞勝縁也」というのは、今日、多く傳えられる『五家解』の一般的な版式についても共通して言えることであって、この記述は、この版式が世祖の銅活字本のそれをそのまま承けるものである

ことを暗示するごとくである。その後の刊本の多くが、この版式を採用しているのは、恐らく、その祖本が現行の『五家解』の原本そのものであったことによるのであろう。

なお、この『五家解』と關聯するものとして、外に『金剛經三家解』と呼ばれるものがある。これは、『五家解』(恐らく、得通校訂のもの)から、經文、冶父と宗鏡の註、竝びに得通の序文を抽出し、それに得通の「説誼」を合糅するとともに、その全體に諺解を附したものである(73)。

即ち、末尾に附されている韓繼禧と姜希孟の跋文に據るに(74)、正統一三年(1448)、世宗は、子の文宗と世祖に、『金剛經五家解』の中の冶父と宗鏡の註、竝びに(別に得た)得通の説誼を飜譯するよう命じたので、二人は草稿を書き上げたが、間もなく、世宗、文宗と相次いでなくなってしまった。世祖は父の遺囑に沿って、多くの佛典の刊行を行ったが、この事業には着手できずに亡くなってしまった。そこで、その没後の成化一八年(1482)、慈聖大王大妃が、學祖という禪僧に再び草稿を校訂させた上で三百部印行したものが、この『金剛經三家解』であるという。從って、これも成立が古く、その資料價値は非常に高いと言える。

3. 『金剛經註』

a. 『金剛經註』の內容と成立について

最後に『金剛經註』について論じておこう。これについては、既に『慧能研究』で詳細に論じられている(75)。即ち、そこでは『佛書解説大辭典』の誤りを指摘するとともに、これが六祖の『解義』、川老の『頌著』、宗泐の『註解』という「三つの註釋書の合册本」であることを明らかにし、それぞれの祖本を、

六祖の『解義』..... 京都大學人文科学研究所松本文庫所藏の五山版
川老の『頌著』..... 金澤文庫所藏の五山版
宗泐の『註解』..... 宮內廳書陵部所藏の五山版

であると論じ、その初刻を寛永九年(1632)であろうと推定している。そして、「傳康曆二年本」が、實はこの寛永九年本に基づくものであること、この「傳康曆二年本」こそが續藏本の底本であることをも明らかにしている。

この説は、概ね首肯できるものであるが、川老の『頌著』の底本を金澤文庫所藏の五山版とする點は問題である。『慧能研究』は、金澤文庫本に鄭復の序文があるということだけで、『金剛經註』の底本であると斷ずるのであるが、實際に金澤文庫本を見てみると、文字の相違がかなり見受けられるうえに、問題の鄭復の序文についても、

「右朝奉郎通判荊南軍府鄭復書」

という末尾の一行のみは確かに存するものの、肝心の序文自體は何故か缺いているのであって、この一事のみをもってしても、『金剛經註』の底本たることは不可能なのである。從って、川老の『頌著』のソースについては、今一度、最初から考え直さねばならない。

川老『頌著』のテキストで日本に傳わっているものに他に、以下のようなものが知られている[76]。

a．東洋文庫所藏、洪武二〇年刊（1387）、高麗本『金剛經』（館藏番號、Ⅵ-4A-6）

b．金澤文庫所藏、刊年不明、五山版『金剛般若波羅蜜經註』（館藏番號、101）

c．『金剛經五家解』合糅本[77]

d．寛永一三年（1636）、京都敦賀屋久兵衞刊『川老金剛抄』[78]

これらのうち、c本には序跋は、一切採用されていないが、a本には、冒頭に、范師榮が本書を刊行した際の惠藏無盡による序（淳熙己亥、1179）、末尾に鄭震の題（紹興辛巳、1161）が附され、b本とd本、竝びに『金剛經註』には、それに加えて惠藏無盡の序文の後に鄭復の序が添えられている（ただし、b本が末尾の一行しか留めていないことは、先述の通りである）。

b本が鄭復の序文の一部しか載せていないことが不備であることは言うまでもないが、a本がこの序文を缺いているのも、實を言えば、甚だ不自然なことなのである。というのは、鄭復の序文を見るに、

「今冶父川公。曹谿之派。臨濟之孫。枯木之子。與僕談空。積有歲月。因暇日出是經頌句。相續爲序。」[79]

と言うから、これが冶父（-1127－1163-）が自らこれを刊行した際のものであることは間違いないが、一方、末尾の鄭震の題が書かれた紹興三一年は冶父の生存中に當たるうえに、文中に、

「冶父川老。一日携所頌金剛經示予。欲鏤板流通。俾余作序。」[80]

と見えるから、これも同時のものと考えるべきであって、してみれば、この二つは、冶父自身による最初の刊行の時から、對をなして存在していたものなのである。他本に、この兩者があることから考えれば、淳熙六年の范師榮の重刻の際にも、當然、存したはずであって、その意味で、a本がこれを缺くのは異常と言わざるをえないのである。

そこで考えるべきは、これがb本のようなテキストを前提にしているのではないかということである。つまり、b本のような不備を、それを除くことで體裁を繕ったのが、a本なのではないかと考えられるのである。

そこで、これら諸本の本文自體を比較してみると、相互にかなりの相違が見られるものの、次のような二つのグループに分かれることが知られるのである。

Ⅰ．a本、b本、c本
Ⅱ．d本、『金剛經註』

つまり、a本は、本文自體から見ても、やはり、b本と同系統に屬するのであって、このことは、先の推測を裏づけるものと言えよう。なお、c本も同系統と見られるが、その成立は不明ながら、得通の序文が書かれた永樂乙未（1415）年以前であることは間違いなく、aの高麗本の刊行に近い頃かと思われる。從って、それが基づいた川老の『頌著』が、その高麗本自體、あるいは、その祖本などに基づいた可能性は非常に高いと言わねばならない。

このⅠの系統では、早い時期に、何らかの理由で鄭復の序文の大部分を失ってしまったのであるから、それを有するⅡ系統の寫本は、明らかにこれと別の系統で傳えられたものである。では、その祖本は何であったのであろうか。今のところ、それに比定できるような異本を見出していないが、ただ、このⅡ系統の諸本には、例えば、「離相寂滅分第十四」の頌で、

「遠觀山有色。近聽水無聲。」

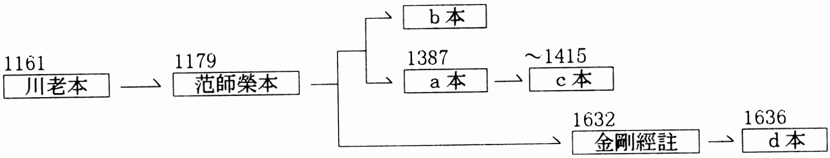
とすべきを、

「遠觀山在色。近聽水無聲。」[81]

とするような、日本人に特有な誤りが見られるから、あるいは、古くに日本に傳わり、書寫で傳わった本が存在したのではないかと思われる。

Ⅱ系統の二本のうち、『金剛經註』の方がｄ本より纔かに成立が古いが、本文を比較してみると、一致しない部分がかなり見られ、しかも、その中には『金剛經註』が勝手に改めたと考えられる箇所でｄ本がそれに追隨していない例がかなりあるから、兩者間の關係は、ｄ本が『金剛經註』に基づきつつ、ｃ本などの他本を校合したか、あるいは、同種の異本に基づいて、それぞれ別個に成立したかのいずれかであろうが、その底本が上に述べたような寫本であったとすれば、閲覽は容易でなかったはずであるから、やはり、前者のように考えるべきであろう。

従って、川老の『頌著』の諸本の關係は以下のごとくになる。



この他にも殘された問題は多い。即ち、『慧能研究』の「川老註の構成」[82]によって掲げるなら、以下の各部分のソースが明らかにされなければならないのである。

ａ．「經中則字竝作即字」等の校訂凡例

ｂ．第一羅什～第六義淨

ｃ．金剛般若波羅蜜經纂

ｄ．四句偈

ｅ．十二時の人債

このうち、ａ、ｂ、ｄについては、この『金剛經註』の編者自身が編輯したもので、必ずしも、そのソースの存在を想定しなくともよいのかも知れないが、ｃやｅについては、何らかの資料をそのまま取り込んだとしか考えられない。

ｅについては、六地藏寺本の『解義』の末尾に類似した記載が見られるが、直

接、これに基づいたとも考えられず、目下のところ不明と言うより外ないが、c については、朝鮮系の資料に基づいた可能性がある。というのは、現存するものの時代は降るが、これが附された本が朝鮮で刊行された例があるからである。即ち、『晩松金完燮文庫目録』には、1800年頃の木版本『金剛般若波羅蜜經』を掲げるが、それに「般若無盡藏眞言」と「金剛般若波羅蜜經纂」が附録されていることを明記しているのである(83)。

更に、『慧能研究』では全く言及されていないが、『金剛經註』で昭明太子による各分章の標題下に掲げられている註記の存在も問題である。しかし、これは既に本論で觸れたように、叡山文庫本の『金剛般若波羅密經義解』に見られ、しかも、この本は、『金剛經註』と同じく、京都大學人文科學研究所所藏の五山版と同系統に屬するので、『金剛經註』が基づいたものが、實は、この叡山文庫本の底本と同じものであったということも十分に考えられるであろう。

かつて「義解」と題する刊本が實際に存在したことは、江戸時代の書籍目録にしばしば見えているので疑いえない。即ち、現存最古の『和漢 書籍目録』一冊(寛文六年〈1666〉頃刊)では、禪宗における『金剛經』の註釋を列擧している箇所に、

「四冊 同義解」(84)

と見え、これを増補する形で寛文十年(1670)に成立した『増補 書籍目録 作者付大意』二冊では、

「四冊 同義解　六祖」(85)

と、これが慧能のものであることを明示しているのである(86)。

ただ、ここで問題なのは、『金剛經解義』に多少の附加を行ったぐらいでは、四分冊にするほどの分量に達しなかったのではないか、ということである(87)。そのことは、この『増補 書籍目録 作者付大意』にも掲載されている明暦版『解義』が二冊本であるということからも窺われようし、また實際、叡山文庫本の『義解』も一冊本であるばかりか、かつて分冊されていたような形跡もそこには全く認められないのである。

従って、むしろ逆に、叡山文庫本が『金剛經註』の抽出によって成立したという可能性も否定しきれないものがある(88)。そして、もしそうであれば、「義

解」という名稱も、その編者が勝手に附したもので、それが偶々かつて存在した刊本と一致したに過ぎないとも考えうるであろう。

b．『金剛經註』の諸本について

この『金剛經註』について論じる場合、その成立とともに忘れてはならないことは、この本の刊本のヴァリエーションの多さである。全く同じ版式で複數の版が存在するうえに、同じ版でも幾度も後刷が行われたらしく、傳本は非常に多い。しかも、刷る度に多少の變更を伴っているので、多くのヴァリエーションが生じたのである。

私が認めえた範圍で、これら異本を列擧すれば以下のようになる。

1－1．寛永九年（1632）、京都中野市右衞門[89]刊三册本『金剛經註』
- a．京都大學圖書館藏本（館藏番號、谷村文庫-1-23-コ-6）
- b．天理圖書館藏本（館藏番號、183-297）
- c．天理圖書館藏本（館藏番號、183-443）
- d．東洋大学圖書館藏本（館藏番號、ゐ-4-中-18、哲学堂文庫4856）
- e．龍谷大學圖書館藏本（館藏番號、經論釋-83）
- f．龍谷大學圖書館藏本（館藏番號、2412-154）
- g．龍谷大學圖書館藏本（館藏番號、經論釋-160）
- h．叡山文庫藏本（館藏番號、眞如-内典-5-59-164）
- i．叡山文庫藏本（館藏番號、毘沙門-内典-5-6-111）

1－2．寛永九年版後刷、京都中野小左衞門[90]刊三册本『金剛經註』
- a．國立國會圖書館藏本（館藏番號、821-105）
- b．駒澤大學圖書館藏本（館藏番號、253.1-5）
- c．花園大學圖書館藏本（館藏番號、17-5-5740）
- d．花園大學圖書館藏本（館藏番號、17-5-1249）

1－3．寛永九年版後刷、京都中野宗左衞門[91]刊三册本『金剛經註』
- a．東京大學總合圖書館藏本（館藏番號、C40-2299）
- b．花園大學禪文化研究所藏本（館藏番號、Z-1-93～95）

2－1．刊年不明、京都柳枝軒小川多左衞門[92]刊三册本『金剛經川老註』

a．東京大學總合圖書館藏本（館藏番號、C40-1591）
b．長崎大學附屬圖書館經濟學部分館藏本（館藏番號、3097）[93]
c．叡山文庫藏本（館藏番號、明徳院-内典-5-8-92）

2-2．刊年不明、京都友松堂小川源兵衞[94]刊二册本『金剛經川老註』
a．駒澤大學圖書館藏本（館藏番號、253.1-6）
b．花園大學圖書館藏本（館藏番號、17-3-5330）
c．花園大學圖書館藏本（館藏番號、W53766-68）[95]

3．刊年不明、三册本『新板註金剛經』
a．花園大學禪文化研究所藏本（館藏番號、Z-2-2921～2923）

4．刊年不明、出雲寺文治郎刊（？）、三（二?）册本『金剛經川老註』（傳康暦二年天龍寺僧堂刊本）
a．京都大學圖書館藏本（館藏番號、藏-5-コ-22）
b．京都大學文學部藏本（館藏番號、哲學-田邊文庫-18-5）
c．駒澤大學圖書館藏本（館藏番號、253.1-7B）
d．東京大學總合圖書館藏本（館藏番號、C40-734）
e．花園大學圖書館藏本（館藏番號、W9956-8）

5．明治時代、貝葉書院刊一册本『金剛經川老註』
a．京都大學圖書館藏本（館藏番號、1-23-コ-2）
b．駒澤大學圖書館藏本（館藏番號、253.1-7）[96]
c．東京大學總合圖書館藏本（館藏番號、C40-312）
d．東洋大學圖書館藏本（館藏番號、183.2-D）
e．龍谷大學圖書館藏本（館藏番號、2412-15）[97]

これらは、一見すると全く同じように見えるが、少し詳しく比較してみると、次の三つの版から成っていることが知られる。

Ⅰ....1-1 ／ 1-2 ／ 1-3 ／ 2-1 ／ 2-2
Ⅱ....3
Ⅲ....4 ／ 5

それぞれの特徴を擧げれば、以下の通りである。

	匡郭内 （上巻本文一張）	返り點・送り假名	字　體	經題下の註記 （上巻一五張表）
Ⅰ	201mm×151mm	有	a	有
Ⅱ	201mm×149mm	無	a'	有
Ⅲ	197mm×151mm	有	b	無

Ⅰに屬する諸本のうち、1は、出版者に三種があるが、上巻の末尾の刊記の一部が改刻されているだけで、版木自體は明らかに同じものである。一方、2の二種は版元は異なるが、版は1と同じと見えるから、何らかの事情で版木を譲られたのであろう。1との相違點として、上巻にあった元の刊記が削除され、下巻の末尾に別張で新たな刊記を附していることと、上巻の六張目と七張目が闕張になっていることを擧げることができる。なお、2－1は、從來通り三册本であるが、2－2では、中下巻が合册にされ、二册本に改められている。

なお、次の二本は、下巻末尾に刊記がないが、版は明らかにⅠに屬し、上巻末の刊記を有していないので、2－1、2－2のいずれかと考えられる。恐らく、傳承の過程で刊記が失われたのであろう。

イ．花園大學禪文化研究所藏本（館藏番號、Z-4-298～300）
ロ．叡山文庫藏本（館藏番號、天海-内典-5-20-102）

Ⅱに屬する版本は、管見の及ぶ限りでは、上に掲げた禪文化研究所藏本しか認めることはできなかった。この本は、「新板」と銘打って出版されているように、從來の版が痛んだため、全く新たに開板されたものであり、上巻の闕張部も補われているが、白文であるためか不評であったらしく、ほとんど流通しなかった模様である。刊記がないので版元は明らかでないが、花園大學圖書館藏本（W53766-68）のように、Ⅰの版本でありながら、この同じ題簽を附したものが見うけられるから、あるいは、同人の刊行ではなかったかと疑われる。

Ⅲは、恐らく、その後の開板で、再び返り點・送り假名を附して刊行されたものである。4の版元も明らかではないが、駒澤大學圖書館藏本の末尾に、「御經書物所　京都三條通堺町　出雲寺松栢堂」の刊行物一覽が附され、また、京都大

學文學部の田邊文庫藏本には、出雲寺文治郎の刊記があるというが(98)、これは同一人物に外ならないであろうから、京都の出雲寺文治郎による刊行と見てよいかと思われる。他本にないのは、恐らく、傳承の過程で失われたのであろう。

Ⅲの特徴として、上巻の闕張箇所が、二〜七張、一三〜一四張の、計八張に増えていることと、末尾において、本來、宗泐の新注の刊記であった、

「康曆二年庚申八月日
　重刻于臨川寺」

を、『金剛經註』全體の刊記であるかのごとくに改め、更に、末尾に、

「補刻于西京天龍寺僧堂」

という一行を附加している點が擧げられる。4が元來、何册本であったかは、はっきりしないが、5は全て一册本で、冒頭に新たに、「西京　天龍寺僧堂藏板」と明記した扉を附している點に特徴がある。

こうした點に着目するなら、これら諸本が、

1 → 2 → 4 → 5

という形で繼承されたものであることは疑う餘地がないと思われる。

上に掲げたものは、たまたま私の目に止まったものを掲げたに過ぎず、實際の傳本はこれより逈かに多いであろうし、その分類についても間違いや見落としている點が多々あろうかと思われる。しかし、いずれにせよ、この本の傳本と種類の多さは尋常ではなく、これに對する世間の需要がいかに強く、また、いかに廣く流布したかということを雄辯に物語るものと言えよう。

註

（1）當初、楊圭が本書に附した名稱については、その序文中に示されていないので、明らかではない。後述のごとく、現存する諸本は種々の名で呼ばれているうえに、序跋等における言及でも、呼稱は一定していない。そこで、ここでは、後に論じる「五十三家註」の諸本と區別するために、日本の刊本の名稱である、「金剛經集解」を便宜的に採用することにしたい。

（2）龍谷大學藏本、卷一、一張表～四張裏。なお、後に言及するように、この序文は、「五十三家註」のうち、「註解」系の諸本にも掲載されている（續藏一-三八-五、四二三ｃ～四ａ）。

（3）龍谷大學藏本、卷一、五張表。

（4）その他、玄宗皇帝や晁文元公迥などの言葉や、『未曾有經』『華嚴經』などの經典、更には『虚皇天尊經』といった道教經典までも用いられている。

（5）これらのうち、他に、大正藏や續藏中に收められているものは、次の四本に過ぎない。

3．後秦解空僧肇（『金剛經註』、續藏一-三八-三）

6．梁朝傅大士頌（『金剛經註』に合糅、續藏一-三八-四）

8．李唐六祖慧能（『金剛經解義』、續藏一-三八-四）

12．冶父僧道川頌（『金剛經註』に合糅、續藏一-三八-四）

なお、宗密には『金剛經』の註釋書として、宋の子璿が治定した『金剛經疏論纂要』があるが、ここで使用されている「疏鈔」なるものは全くの別本である。

ただ、これら四本については、いずれもよく流布したもので、それぞれ別行本が存在する。8については、本論で論じたし、12については後に論ずる通りであるから、それ以外のものについて代表的なものを掲げれば、以下のごとくである（僧肇については、續藏の底本が寶暦刊本であったかも知れない。但し、京都大學圖書館の藏經書院本中には、該當するものは見當たらない）。

3．寶暦一三年（1763）、京都植村藤衛門刊『金剛經註』（駒澤大學圖書館藏本〈魯-128〉など）

6．『金剛經五家解』合糅本（傳本については、本論文の第二節を參照）

他本については、大正藏や續藏に存しないばかりか、別行本の存在も知られていないごとくであり、ここでの引用は、極めて貴重である。

特に、1の「五十三如來」の註釋は、『金剛經變相』が依用したものと同一

の文獻からの引用と推測されるが、自在力王如來や金海光如來などの五十三人の如來が、それぞれ『金剛經』の一節を註釋するという特異な形式を取った文獻であったと考えられ、甚だ興味深いものがある。なお、これについては、11の王日休の註釋や15の顏丙の註釋などとともに、拙稿「『金剛經變相』について」（「東洋學研究」三五～六號、平成十～十一年）を參照されたい。

（6）匡郭内186mm×139mm、各半葉一二行、各行一八字、大字二行取り、各行九字、小字雙行、版心は「金剛經」、卷數、張數。卷一の一三張裏には萬曆元年の題記があり（後掲）、末尾には「大明時萬曆甲戌歲清明日」付けの謝觀光撰「大乘金剛般若波羅密經註解後序」がある。

（7）265mm×160mmの線裝本。一册のみの破本で、題簽は「金剛經 破本」。序の三張～四張、卷一の一張～三七張、卷二の一張～六四張を合册にしたもの。

（8）この本は未見であるが、『東北大學所藏和漢書古典分類目録　漢籍』（東北大學附屬圖書館、昭和五〇年）四一四頁に、

「集註金剛般若波羅蜜經　四卷　四册　（宋）楊玄編　萬曆元年刊」

と見える（「楊玄」が「楊圭」の誤りであること、言うまでもない）。

（9）268mm×160mmの線裝本。題簽は「金剛般若波羅蜜經集註」。

（10）260mm×162mmの線裝本。卷一において、佛畫（イ）、序文の三～一三張（ロの中途～リ）、本文の一、二張が、また、卷四においては、「宋太宗皇帝御製金剛經序」（レ）以下が缺張となっており、一册に合册してある。

（11）247mm×146mmの線裝本。外題は「金剛經十七家注」、帙の題簽は「十七家解註金剛經」。卷四の末尾の跋文、刊記等を缺き、最後の佛畫のみ有す。

（12）257mm×158mmの線裝本。外題は「金剛經十七家註解」。卷四の末尾の跋文、刊記等を缺き、最後の佛畫のみ有す。甚だ刷りがわるい。

（13）この本も未見であるが、川瀬一馬編著『新脩成簣堂文庫善本書目』（（財）石川文化事業團、お茶の水圖書館、一九九二年）一〇七八～九頁參照。同書には、本書の寫眞を三點掲載しており、同一刊本たること、疑う餘地はない。

（14）本書は、卷一の冒頭、「十七家解註金剛經姓號目録」の後に、

「明特進光祿大夫少保中軍都督府左都督總理薊州永平山海等處前鎭守福浙惠潮郴桂南贛伸戚營總兵宮定遠東牟戚繼光校刊」

と見えるごとく、明の戚繼光（1528-87）の刊行にかかり、本書の表紙に、

「禪家六籍　金剛經集解」

と記されているごとく、「禪家六籍」の中の一册として刊行されたものである。

戚繼光は、『明史』巻二一二などに傳記が見えるが、倭寇や北虜の侵入を防ぎ、「戚家軍」と稱された著名な武將であり、歴代の宰相の信任も厚く、遂に左都督にまでなった人。文人でもあり、軍書のほか詩文集の著もある。

ところで、「禪家六籍」とは、古來、禪宗で重んじられた、

1．『圓覺經』　2．『維摩經』　3．『金剛經』

4．『楞伽經』　5．『首楞嚴經』　6．『大般若經』

という代表的な經典、六種のことであるらしい。もっとも、戚繼光が刊行したのは、『金剛經集解』に見るように、經文そのものではなく、これらの註釋であって、6の『大般若經』を除く五種の註釋書が叡山文庫に藏されている。

それによって、その内容を示せば、以下のごとくである。

1．智朗編『大方廣圓覺脩多羅了義經集要』一巻、一册

2．僧肇撰『註維摩詰經』六巻、三册

3．楊圭編『金剛般若波羅蜜經集解』四巻、二册

4．正受編『楞伽阿跋多羅寶經集註』四巻、四册

5．惟則編『大佛頂首楞嚴經會解』十巻、五册

これらは、いずれも、255mm×160mmの線装本で、匡郭内185mm×135mm、各半葉九行、各行一八字、註二字下げ、という全く同一の體裁で刊行されており、當初から、一括して企劃されたものであることを示している。

なお、叡山文庫本は『大般若經』を缺くが、張廷玉等編の『明史』「藝文志」巻三に、

「戚繼光禪家六籍十六巻」（王雲五主編『叢書集成』初編〈商務印書館、中華民國二五年〉五八頁）

と見え、また、徐圖の『行人司重刻書目』にも、

「禪家六籍　十六本」（馮惠民等選編『明代書目題跋叢刊』上册〈書目文獻出版社、一九九二年〉六三〇頁）

と言うから、元來、全十六册から成っていたはずである。叡山文庫本は十五册であるから、失われた『大般若經』は一册本であったことになる。恐らく、註釋書ではなく、その概要を記したようなものであったであろう。

(15) 本書は、244mm×155mmの線裝二册本で、外題は「金剛經注 本」「金剛經注

未」。匡郭内192mm×140mm、各半葉一二行、各行一八字、大字二行取り、各行九字、小字雙行、版心は「金剛經」、卷數（「卷一序」「後序」）、張數。

本書の卷一の冒頭、「普供養眞言」と「奉請八金剛」の間に、

「趙母王氏命男如循刊
長洲歸大徳續刊施行
桐涇橋内劉延震鋟梓」

という附記が見え、また、「奉請四菩薩」の後に、

「金剛經。舊是套卷。摺接不裝。今刻式如書。何以故。懼有斷毀。乃成之爲書也。本分爲四。計二百二十三葉。皇明萬暦戊寅春三月。長洲歸大徳別號味湖居士記。」

と記されている。

従って、本書の刊行事業は、趙如循が母の命を受けて着手し、その後、萬暦六年（1578）に歸大徳なる人物によって完成されたものであることが知られる。

(16) 匡郭内209mm×143mm、各半葉一二行、各行一八字、大字二行取り、各行九字、小字雙行、版心は「金剛經注」、卷數、張數。卷四の三九張裏には、次の刊記がある。

「寛永 癸未 中春吉辰
中野氏是誰新刻　」

(17) 272mm×195mmの線裝本。題簽は「金剛經集解」。

(18) 285mm×177mmの線裝本。題簽は「金剛經集解」。卷二の裏表紙見返しに、

「甲斐國龍華院方丈遺贈四卷之内　大温閑人拜持」

と記されているが、卷四末尾の書き込みに據るに、恐らく、これは明治六年（1873）のものと思われる。

(19) 284mm×181mmの線裝本。題簽は「金剛經集解」。

(20) この本は未見であるが、『靜嘉堂文庫圖書分類目録』（靜嘉堂文庫、昭和四年）四六三頁に、

「集註 金剛般若經　四卷、宋楊圭編、寛永二〇刊」

と見える。

(21) ただし、1は、經文に關して、黒字（佛の言葉）、白字（須菩提の言葉）、圈字（キッコーブラケットとで圍む、阿難の編集）を區別しており、3も同樣

であるが、４では、この區別は無視して、全て黒字で刻されている。なお、この區別については、既に葉文林の跋文に言及されているので、萬暦版に始まるものではなく、至元三〇年（1293）以前に行われていた模様である。

(22) 後に示すように、「奉請四菩薩」と「發願文」の間に置かれている。龍谷大學本、巻一、一三張裏。

(23) このツの部分のみ、別に張數が振られており、張數はソとネで連續している。よって、この部分は、後の插入と知られる。

(24) ただし、巻一、五張裏の、黒字、白字、圏字の區別に關する註記は、當然のことながら削られている。

(25) 黄公紹の後序には、

「是經自鳩摩羅什所譯。凡有九本。自五十三如來以後。凡解有八百餘家。世之彙集諸説者亦多矣。而南浦開國楊公所編之本爲善。廼吾樵西杭衆信之所刻。自罹兵革。人鮮剋。有杉陽葉君總管得之。而喜刻諸梓。以廣其施。將使家有此經之本人解此經之義。一言之下心地開明。一軸之中義天朗耀。昔之未能持者今知所持矣。」

と、西杭の刊本と葉君の刊行に言及する。ここにいう葉君とは葉文林のことであろうから、この後序は、その刊行の際のものであろう。

また、鄧夔の序には、

「比年以來。此本亦不多見。邑佐四明胡侯脱歡察兒。近因公差往沙陽。於丁主簿宅得一本携歸。念欲繕寫。以覺後覺。公務叢冗未遑也。忽一日仁齋廖君鼎來相訪話次。以此本示之。君歡喜踴躍。若有所契。願刻梓以廣其傳。印造畢工。將散施諸學佛者。且徵予文以爲序。」

と言うが、廖文焱の序にも、

「然此本罕傳於世。至元乙亥。邑佐胡侯得於沙陽丁宰而授余兄仁齋。仁齋以仁存心而壽諸梓印施幾百餘卷。宦遊三吾已印之。經有限而請誦之人無窮。余謹備楮墨。命工印造。以推吾兄之仁博。吾兄之施願。與十方善信傳佛心法者。同增福惠。」

とほぼ同じ記事が見えている。更に、王汝賢の序にも、この廖氏の刊行に言及して、次のように言うから、この本に基づく翻刻であることが知られる。

「此經乃迷途之指南車。昏夜之明月珠。後之佛子解其妙義註釋者。八百餘家。而開國楊圭取其義之精者十有七編爲一本。邑佐胡侯得之。以付廖氏刊

而傳誦。使人開卷瞭然。即了其理。誠爲善本。奈何年代深遠。巻帙散落。邑之釋教官僧會畋匀衆善信。命工重刊。是經以廣其傳。」

(26) 天下の孤本であるが、次の二種の影印本が出版されている。

1. 『金剛經集注』(上海古籍出版社、一九八四年)

2. 『金剛經集註』(文津出版社〈臺北〉、中華民國七八年〈1989〉)

2は、1の影印と思われるが、現在入手できるのは2のみであるから、これに據った。

(27) 296mm×192mmの線裝二册本で、題簽は「金剛經　乾」「金剛經　坤」、扉は「金剛經集註」。匡郭内、217mm×158mm。各半葉六行、各行一三字、小字雙行、大字一字分下。版心は「金剛經集註」、巻數(「序」)、張數。附録:般若心經註。扉に「道光丙午荷月重梓寶華堂藏板」とあり、巻四末、「般若波羅密(ママ)多心經終」の尾題の前に、「金陵攝山棲霞寺釋弟子竹泉恭校/淮安山陽淨名寺釋弟子眞慈敬書/金陵上元碧山堂刻字館柏華亮刊」という刊記がある。

(28) この本は、中華民國六四年(1975)に臺灣の新文豐出版公司から影印本が出ており、龍谷大學圖書館などに藏されているが(經釋論-404-1)、同書には、原本の所藏處についての明記がない。各半葉七行、各行一三字。小字雙行、大字一字分下。版心は「金剛經集註」、巻數、張數。附録:般若心經註。序文は2と全く同じ體裁であるが、本文では、半葉の行數を一行増している。また、御製序と重刊序の順序を入れ換えている。

(29) 320mm×200mmの線裝(康熙綴)四册本で、題簽は「金剛經集註」、扉は「明世祖御製金剛經集註」。匡郭内223mm×155mm、各半葉六行、各行一三字、小字雙行、大字一字分下。版心は「金剛經集註」、巻數、張數。附録:般若心經註。

(30) この本は、今年の一月に中山大學に立ち寄った際に、歴史系教授、姜伯勤氏のご厚意により閲覽することができた、中山大學圖書館所藏の古典籍の中に含まれていたものである。

(31) 2の道光二六年版では、1の永樂内府本に對して、巻四において尾題の後に、

a. 「自如是我聞....四十六字。」

b. 「釋迦文佛説....因附誌之。」

という二つの附記、竝びに、

c. 般若心經註

を新たに加え、更に、

d．純陽子敬の跋

e．「心經大字．．．．六百一十一字」という附記

を置いている。

3は、2を承けつつも、冒頭に「金剛經五十三家註解姓號目録」を新たに附し、扉も「金剛般若波羅蜜經五十三家集註」に改められている。

一方、同じく2を承ける4の光緒二〇年版では、巻一において本文の前に、2の道光二六年版にはない「彭久餘弁言」が一張加えられており、また、巻四では、aとeを省き、dを大幅に節略するとともに、bの後に「纂輯補註」を、また、dの後に「心經補註」を附加している。

(32) 280mm×179mmの線装四冊本で、題簽は「金剛經五十三家註解」、扉は「金剛經注解」。匡郭内188mm×134mm、各半葉一二行、各行二〇字、經文は二行取り、各行一〇字。版心は「金剛經註」「序」「原序」「舊序」「目録」、巻數、張數。

巻一の扉右に、

「同治庚午仲夏鐫 板存武林大街弼教坊瑪瑙經房印造流通．．．．」

とあり、また、巻四の末尾に次の刊記あり。

「同治九年歳次庚午仲秋月。湖南長沙府善化縣信士。周旭亭釋弟覺明。敬謹捐貲重翻鐫刊。竝奉送壹百部。刷送芳名開列于右。

湖南長沙府湘郷縣信士楊鏡雲。印送参拾部。

浙江紹興府會稽縣信士潘敦田。印送拾部。．．．．」

(33) 284mm×180mmの線装四冊本で、題簽は「金剛經註解」。匡郭内188mm×133mm、各半葉一二行、各行二〇字、經文は二行取り、各行一〇字。註は二字分下。版心は「金剛經註」（「金剛經讀本」「跋一」「跋」）、巻數（「序」「原序」「舊序」「道場前儀」「目録」「道場後儀」）、張數。巻四の末尾、道光二四年と乾隆四一年の二つの刊記の間に、本書自體の刊記、

「同治十三年歳次甲戌仲冬月。本房弟子翻刻。板存浙省昭慶寺慧空經房印造。」

が挾み込まれている。これは、道光二四年刊本をそのまま版下にして覆刻し、空白部に新たな刊記を刻んだためと考えられる。

(34) この本も、先の光緒二〇年刊本同様、中山大學の圖書館で實見したものであ

る。註30を參照。

(35) 中山大學圖書館には、上記のほか、光緒一五年(1889)鼎湖經坊刊四册本(但し、内部は上下二卷)を有する(館藏番號、0-B942-8-16)。時間の關係で詳しく檢討することはできなかったが、これにも洪蓮の序や康熙一二年、乾隆四一年の跋が存するので、こちらの系統に屬するものと考えられる。

(36) 續藏本は、各卷の首題や尾題が、一部、編者によって勝手に變更されているので注意を要する。例えば、續藏本は、卷一において、本文の前と後に、「金剛經注解卷之一」「金剛經註解卷之一」という首題や尾題を置いているが、これは原本にはなく、編者が勝手に附したものに過ぎない。

(37) もっとも、「集註」の系統でも、2の道光二六年刊本には「金剛經五十三家解註姓號目錄」があるが、この部分の二張のみ字體を異にしているうえに、張數も別に振られているので、恐らく、後に附加されたものであろう。それを「註解」系のものと比較してみると、内容は同じであるが、表記と順序を異にしているので、「註解」のものを再編したうえで取り込んだものと考えられる。新文豐の影印版が「金剛經五十三家集注」と題し、「五十三家」を強調していることからすれば、その時期は、あるいは、この影印版刊行の際のことであったかも知れない。

(38) 續藏一-三八-五、四二五b～c。

(39) ただし、「十七家解註金剛經姓號目錄」では、六人の如來は「五十三如來」として一括して掲げられ、また、「宗密禪師」と「圭峯禪師」は、元來、同一人であるから、「李唐疏鈔僧宗密作序」として掲げられている。なお、ここで「五十三如來」という名稱を採用しなかったのは、恐らく、この「金剛經五十三如來註」とでも呼ぶべき文獻がかつて存在したということが、完全に忘れ去られてしまったためであろう。

(40) 續藏一-三八-五、四三七a～b。

(41) 文津出版社版『金剛經集註』六八～九頁。

(42) 續藏一-三八-五、四二二d～四二三a。

(43) 『明史』「藝文志」卷三に、

「太祖集注金剛經一卷 世祖制序」(前掲書、五七頁)

と見え、また、前掲の文津出版社版『金剛經集註』の冒頭に附された「出版説明」(二頁)によれば、清の黄虞稷の『千頃堂書目』にも、

「太祖集注金剛經一巻　世祖製序」

なる記載があるという。明の太祖は、もと僧侶であったから、このようなものがあったとしても不思議ではない。

(44) 同じく、文津出版社版『金剛經集註』の「出版説明」によると、この序文が、清の鄧晅の『金剛經輯注』に轉載されており、永樂二一年撰とされる二つの序文とは、大いにその内容を異にしているという。とすれば、これは非常に重要な資料であると言わねばならないが、今のところ、見る機會を得ないから、その内容については不明である。

(45) なお、この外、かつて積翠軒文庫にも一本を蔵したことが知られる。これは、前掲の『石井積翠軒文庫善本書目』本文篇二二三頁によると、康煕四十年（1701）鳳巖寺刊本である上巻と嘉靖九年（1530）廣興寺刊の下巻の合本であるというが、同書圖録編の寫眞（四二七、四二八）によって見るに、下巻は、駒澤大學藏本などと全く體裁を一にしている。恐らく、上巻もそうであったであろうと推測される。

また、『第六回大藏會陳列目録』九頁によれば、大徳寺には、

「文明十四歳八月二十五日宗見置之龍寶山雲門庵」

という墨書のある、文明十四年（1482）以前の朝鮮古刊本を蔵している模様である。とすれば、恐らく、これは、日本、朝鮮を通じて最も古い刊本と言えるはずである。あるいは、成祖二年（1457）の銅活字による初彫本であろうか。

更に、宮内廳書陵部に藏される『金剛般若波羅蜜經』も、『和漢圖書分類目録』（宮内廳書陵部、昭和二七年）二九〇頁に、

「朝鮮 釋得通説誼　清 康煕四版（朝鮮順天興國寺）」

というから、花園大學國際禪研究所藏本Ａの上巻と同版であろうと思われる。

(46) 300㎜×188㎜の線装本で、外題は「金剛經」。匡郭内221㎜×158㎜。版心には「金剛經序」「金剛經上」「金剛經下」、竝びに張數。各半葉九行、各行二三字、小字雙行、註は一字分下。

(47) 上巻は365㎜×240㎜の線装本で、題簽は「金剛般若波羅蜜經上」。匡郭内、240㎜×173㎜。版心には「金剛經序」「金剛經上」、竝びに張數。各半葉九行、各行大字一四字、中字一九字、小字一九字。小字雙行。下巻は340㎜×221㎜の線装本で、題簽は「金剛般若波羅蜜經下」。匡郭内233㎜×175㎜。版心には、「金剛經下」（「金下」）、竝びに張數。各半葉九行、各行大字一四字、

中字一九字、小字一九字。小字雙行。

(48) 360mm×228mmの線裝本で、外題は「金剛經乾」「金剛經坤」。匡郭内272mm×188mm。版心には「金剛經序」「金剛經上」「金剛經下」「跋」、並びに張數。各半葉九行、各行大字一四字、中字一九字、小字一九字。小字雙行。一張は補寫。坤卷の末尾に次の刊記あり。

「康熙十八年己未十二月日慶尚道蔚山圓寂山雲興寺刊」

(49) 上卷は395mm×240mmの線裝本で、外題は「金剛經上」。匡郭内274mm×184mm。版心には「金剛經序」「金剛經上」、並びに張數。各半葉九行、各行大字一四字、中字一九字、小字一九字。小字雙行。下卷は370mm×240mmの線裝本で、外題は「金剛經下」。匡郭内255mm×185mm。版心には「金剛經下」「跋」。各半葉九行、各行大字一四字、中字一九字、小字一九字。小字雙行。

(50) 上卷は356mm×234mmの線裝本で、匡郭内251×184mm、版心には「金剛經序」「金剛經上」(「金剛上」「金上」)、並びに張數。下卷は370mm×245mmの線裝本で、匡郭内255mm×188mm、版心には「金剛經下」、並びに張數。外題は「金剛經乾」「金剛經坤」。各半葉九行、各行大字一四字、中字一九字、小字一九字。小字雙行。

(51) ただし、「御製跋」と金紐の跋が連續して載せられている上に、金紐のものには標題がないので、あたかも兩者が一體であるかのごとき體裁を呈しており、このため、『晩松文庫漢籍目録』(高麗大學校中央圖書館、一九七九年)などは、この「御製跋」の成立を金紐の跋文の紀年、成化二三年(1487)と誤り、その撰者を成宗となすが(二一九頁)、「御製跋」並びに金紐の跋文の記述によれば、當然、世祖と見なくてはならない。

なお、敬一の後跋は、鶴城の演熙、學熏という二人が、この康熙一八年版を刊行した際に校正を努めた敬一が、その出版の經緯を書し、兩人の徳を讃えたもので、本書の成立とは直接には關係しない。

(52) ただし、この本には、一部に文字の相違が見られる。特に、金紐の跋文から撰者名が削られているのは大きな違いと言えるが、これは、恐らく、「御製跋」と金紐の跋文を一つと見たため、「御製」に金紐の名が書かれていては具合が惡かったためであろう。

(53) 霜峰淨源ことか。彼の生没年は不明であるが、義諶(1592-1665)の法嗣であるから、一六五〇年頃の人であろう。とすれは、刊年の「辛巳」は、明の崇

禎一四年（仁祖一九年、1641）に當たるか。ただし、その場合でも「聖上二十八年」の意味は明らかでない。

(54) 關口眞大『禪宗思想史』一一三～九頁。

(55) これについては、拙稿「慧能に歸される數種の『金剛經』の註釋書について」（「禪文化研究所紀要」二二、一九九六年）も參照。

(56) 柳田聖山主編『禪學叢書之二』中文出版社、一九七四年。

(57) 『延世大學中央圖書館古書目録』第二輯（延世大學校中央圖書館、一九八七年）九八頁參照。また、註57も見よ。

(58) ただし、何箇所かにおいて、他本に缺く文字が補われており、異本との校合が行われたことを窺わしめる。

(59) このうち、崇禎五年（1632）水清山龍腹刊本については、檀紀四二九一年（1958）に東國大學から出版された影印本があり、諸處に藏されているので、容易に内容の確認ができる。

(60) 目録の記載に據るに、版式を異にすると認められるものは、以下の四本に過ぎない（近代以前のものに限る）。

1. 永樂乙未（1415）省琚跋、下卷のみの零本（『古書目録』〈東國大學校中央圖書館、一九八一年〉一七一頁所載）
2. 正統七年（1442）、陽山寺刊本（『華山文庫漢籍目録』〈高麗大學校中央圖書館、一九七六年〉一頁、七〇頁所載）
3. 嘉靖三六年（1558）、歸眞寺刊本（『延世大學中央圖書館古書目録』第二輯（延世大學校中央圖書館、一九八七年）九八頁所載）
4. 萬暦三年（1575）、廣濟院刊本（『古書目録』〈東國大學校中央圖書館、一九八一年〉一七一頁所載）

1は、260㎜×165㎜の線裝本で、匡郭内195㎜×130㎜。各半葉一一行、各行二二字、註雙行。2は、260㎜×160㎜の一册本で、匡郭内185㎜×124㎜。各半葉一二行、各行二二字。3は、先述のもので、310㎜の二册本。匡郭内223㎜×155㎜。各半葉九行、各行二三字。4は、285㎜×190㎜の線裝二册本で、匡郭内205㎜×150㎜。各半葉八行、各行一八字、註雙行。

1には得通の序文と同年に撰せられた跋文が附されており、貴重な資料と思われるが、未見である。ただ、この跋文が附されているからといって、その刊行が古いとは限らないので、注意を要する。また、2については、世祖が現行

の『五家解』を編輯させる以前の刊本であり、しかも「一册」と分量も少ないことから、得通の説誼のみの別行本ではないかと疑われる。

(61) ただし、『五家解』に掲げられるものは、宗鏡の序の極く一部に過ぎない。恐らく、何らかの傳承上の問題があって、その一部のみを傳えているのであろう。これについては、覺連の『銷釋金剛科儀會要註解』(續藏一-九二-二)に引かれている宗鏡の序を對照せられたい。

(62) 西谷啓治・柳田聖山編『禪家語録』(世界古典文學全集、第36巻B、筑摩書房、昭和四九年)五一〇頁。

(63) 前掲、中文出版社刊、「禪學叢書」所収本、二三三頁下段。

(64) 同上、二三三頁下段～二三四頁上段。

(65) 佛教學研究會編『韓國高僧集(李朝時代1)』(景仁文化社、ソウル、一九七四年)一七頁。

(66) ただし、六祖の序には、一箇所のみ得通の説誼が見えるが、その内容は、必ずしも密接な關聯を持つものではないので、これがもとから六祖の序文に對してなされたものであったかどうか、甚だ疑わしい。

(67) 『金剛經三家解』巻五、五八張裏～五九張表。沈載完註解『金剛經三家解 全』(民俗文化資料叢書1、嶺南大學校出版部、一九八一年)參照。

(68) 前掲『韓國高僧集(李朝時代1)』二〇頁。

(69) この一巻本そのものと見うるものが、高麗大學校に藏されており(註57參照)、甚だ貴重な資料と思われるが、いまだ見る機會を得ない。

(70) 東洋文庫所藏、康熙一八年、雲興寺刊本に據る。巻下、一一一張表～裏。

(71) 同上、一一二張表～裏。

(72) 同上、一一三張表～裏。

(73) これについては、前掲の『金剛經三家解　全』に附された、沈載完氏の「解題」も參照。

(74) 『金剛經三家解』巻五、五八張表～六〇張表。前掲『金剛經三家解　全』參照。

(75) 駒澤大學禪宗史研究會編著『慧能研究－慧能の傳記と資料に關する基礎的研究』(大修館書店、昭和五三年)四七一～五頁。

(76) なお、金澤文庫に劔阿(1261-1338)書寫の『冶父川老金剛般若頌』一册が存し、『頌著』の「金剛般若頌」を中心とするものではあるが、他の頌なども混じ

ており、「金剛般若頌」についても完全ではない。ただ、その本文を他本と比較すると、金澤文庫所藏の五山版に近いようであり、五山版、あるいはその祖本などに據ったものと推測される。この寫本については、『金澤文庫資料全書　第一巻（禪籍篇）』（神奈川縣立金澤文庫、昭和四九年）に、翻刻と石井修道氏による解説が収められているので、そちらも參照されたい。

(77) 日本における『金剛經五家解』の傳本については、本論文の第二節を參照されたい。

(78) 駒澤大學圖書館（館藏番號、253.1-11）、東洋大學圖書館（館藏番號、ゐ-4-中-15、哲學堂文庫4854）ほか、諸處に藏されている。

(79) 『金剛經註』巻上、五張表～裏。

(80) 同上、巻下、二六張裏。

(81) 『金剛經註』巻中、一二張裏。

(82) 前掲『慧能研究』四七二～三頁參照。

(83) 高麗大學校中央圖書館『晩松金完燮文庫目録』（高麗大學校出版部、一九七九年）二一九頁。

(84) 斯道文庫編『江戸時代 書林出版書籍目録集成一』（井上書房、昭和三七年）二八頁。

(85) 同上、六七頁。

(86) 同様の記述は、それ以後の目録、即ち、寛文一一年（1671）の『新板増補書籍目録 作者付大意』（同上、一二一頁）や、延寶三年（1675）の『増續古今本朝彫刻書籍題林大全 作者付大意人』（同上、一六八頁）にも見えるが、これらは、上の『増補 書籍目録 作者付大意』の記述をそのまま受けたものに過ぎないであろう。

(87) 上掲の諸目録に載せられている『金剛經義解』が、『解義』の二倍近い分量を有していたとすれば、あるいはこれを、宋代以前の成立であり、慧能に歸せられる二巻本の『六祖大師金剛經大義訣』に比定すべきかも知れない。ただ、この『義解』の實物は一册も傳えられてはいないごとくであり、その内容を窺うことはできない。

(88) 寛文六年（1666）の『和漢 書籍目録』には、「金剛經注」（いわゆる「川老註」）と「金剛經義解」の雙方を載せている（前掲『江戸時代 書林出版書籍目録集成一』二八頁）。しかるに、これに先行する萬治二年（1659）の寫本、『新

板書籍目録』では、「金剛經注」のみを掲げているということである（同上）。これは『義解』の出版が『金剛經注』より遅れることを暗示するものといえるが、もし『義解』が展開して『金剛經注』となったと想定すると、このようなことは甚だ考えにくいと言わざるをえない。

(89) 中野市衛門については、矢島玄亮著『徳川時代出版者出版物集覧』（同刊行會、昭和五一年）一七二頁、同『同　續編』（同）六二頁參照。

(90) 中野小左衛門については、前掲『徳川時代出版者出版物集覧』一七二～三頁、『同　續編』六三頁參照。なお、明暦元年（1655）には、本論で論じた『金剛經解義』も刊行している。

(91) 中野宗左衛門については、前掲『徳川時代出版者出版物集覧』一七四頁、『同　續編』六四頁參照。彼は、また、「惣左衛門」とも表記され、元祿九年（1696）刊行、正徳五年（1715）補修の『増益 書籍目録大全』六卷などでは、『金剛經註』や『金剛經解義』の版元として、この名で掲げられている（『江戸時代 書林出版書籍目録集成三』〈井上書房、昭和三八年〉五二頁參照）。

(92) 小川多左衛門については、前掲『徳川時代出版者出版物集覧』四八～九頁、『同　續編』一七～二〇頁參照。

(93) この本は未見であるが、東京大學東洋文化研究所附屬東洋學文獻センター編『長崎大學附屬圖書館經濟學部分館漢籍分類目録（漢籍所在調査報告１）』（昭和五五年）一四九頁に次のように見える。

「金剛般若波羅蜜經　三卷　宋釋道川頌併著語　日本闕名點

京都柳枝軒小川多左衛門刊本　」

(94) 小川源兵衛については、前掲『徳川時代出版者出版物集覧　續編』一七頁參照。彼は、また、中野小左衛門が刊行した『金剛經解義』なども刊行している。

(95) この本は、題簽を３と同じく「新板註金剛經」とする。恐らく、３の開板以降の後刷であろう。

(96) この本は末尾の刊記を缺くが、一冊本で、扉も有しているから、貝葉書院刊本と認められる。

(97) この本には、小川多左衛門の刊記（2－1のものとは異なる別のもの）が附されているが、版自體は４以降のもので、しかも、一冊本で扉も存するから、明らかに貝葉書院本である。從って、この刊記は、後に別のものから取り込まれたものであろう。

(98) この本は未見であるが、京都大學圖書館のカードに明記されている。なお、出雲寺文治郎（和泉掾）については、前掲『徳川時代出版者出版物集覧』二一～四頁、『同　續編』八～九頁を參照。

附録『金剛般若經解義』復元本文

凡例

1 校訂本文を各ページの上方に掲げ、編者の註記は、同じページに脚注の形で附した。

2 『解義』は、大きく、慧能撰とされる「序文」と、『金剛經』に對する註釋である「本文」の二つに分けることができるが、その本文において、底本は、先ず、經文を掲げた後、一字分の空白を置いて、同じ大きさの文字で、すぐに註釋の文を續ける。そして、また、一字分の空白の後、經文を續けるという形で、科段（梁の昭明太子作とされるものを採用している）が變わる迄、延べ書きにされ、中途では改行されてはいない。しかし、本校訂では、見やすさを考えて、經文を註釋より大きめの文字で示すとともに、經文と註釋の冒頭で改行することにした。

3 底本に存する頭註・傍註・脚註は、原則として、全て欄外に註記した。ただし、單なる書き損じの訂正と認めうるものについては、その限りではない。

4 本校訂では、繁を避けるため、讀點は用いず、句點のみを使用することにした。

5 註記の番號は、序文は序文で別個に、また、本文は非常に長いので、各科段ごとに振ることにした。

6 對校に用いた諸本と略號は、以下の通りである。

〈底〉……六地藏寺藏寫本、『六祖註解金剛經義』一巻（底本）。

〈集〉……龍谷大學藏、萬暦二年（1574）、三山復初庵刊本、『金剛般若波羅蜜經集註』四巻。

〈五〉……花園大學國際禪研究所藏、康熙四年（1665）、興國寺刊本、『金剛經五家解』二巻。

〈從〉……大正新脩大藏經、第四八巻所收、『萬松老人評唱天童覺和尚頌古從容庵録』六巻（No. 2004）、三六三頁下。

〈通〉……內閣文庫所藏、嘉靖三年（1524）刊本、『文獻通考』三四八巻、巻二二六經籍考五三。

〈羅〉‥‥羅適刊行本に對校されている異本（テキストは、京都大學人文科學研究所所藏、五山版、『金剛般若波羅蜜經』一巻を使用）。

〈決〉‥‥得通撰『決疑』の記述（テキストは、〈五〉に附されたものを使用）。

〈大〉‥‥大正新脩大藏經、第八巻所収、鳩摩羅什譯『金剛般若波羅蜜經』（No. 235）。

7 底本と異なる對校本の文字は、全て、これを註記した。しかし、以下に掲げるいくつかの文字については、異體字と認め得るため、特に註記せず、（底本の文字が下方の文字である場合でも）上方に掲げた文字の方に統一した。

鐵＝鐡	蓋＝盖	敕＝勅	厭＝猒	修＝脩	汚＝汙	他＝佗	礙＝碍
暫＝蹔	算＝筭	遍＝徧	祇＝祗	著＝着	麁＝麤	瞋＝嗔	陀＝陁
往＝徃	繞＝遶	況＝况	寶＝寳	惣＝捴			

8 註記において他本に言及する場合、なるべく上に掲げた諸本に限定せんとしたが、それにも拘わらず、その他、より新しい諸本に言及せざるをえない場合には、その名稱を明記したうえで、それを行った。

9 『金剛經』の經文と慧能撰という註釋の配當において、『金剛經集解』や『金剛經五家解』には、一部、相違が見られる場合もあるが、それが果たして、それらが基づいた『解義』のテキストを反映するものであるかは疑問であるため、その註記も省略した。

10 『金剛經集解』は、慧能の『解義』に關しては、その一部を引用するに過ぎないから、その校合も、經文（全文）と引用部とに限られる。從って、『解義』については、對校が行われた部分を示しておくことが是非とも必要と思われるので、その箇所を「」によって明示し、「集解所引」と註記した。また、『從容録』と『文獻通考』についても、それに準じ、それぞれ、「從容所引」「通考所引」と註記した。

11 底本は現在も六地藏寺にあるが、修復が未濟のため、公開は差し控えられている。從って、實物は見ることができないのであるが、以前、六地藏寺所藏の禪籍の調査をされた、駒澤大學の椎名宏雄氏が撮影された寫眞が存在し、氏の厚意によって、この寫眞を手に入れることができた。また、六地藏寺住職の栗原邦俊氏は、筆者の趣旨をよく御理解下さり、本文の公表を快くお許し下さった。從って、筆者が、ここに、この校本を公表できるのは、偏に兩氏の御蔭であるから、そのことをここに明記して、感謝の意を表させて頂きたい。

六祖註解金剛經義[1] *一張表 并序

曹谿六祖大師慧能解義[2]。亦曰口訣

夫金剛經者。無相爲宗。無住爲體。妙有爲用。自從達磨西來。爲傳此經之意。令人悟理見性。祇爲世人不見自性。是以立見性之法。世人若了見眞如本體。即不假立法。此經讀誦者無數。稱讚者無邊。造疏及注解[3]。凡八百餘家。所説道理。各隨所見。見雖不同。法即無二。宿植上根者。一聞便了。若無宿慧。讀誦雖多。不悟佛意。故[4]解釋其義。庶斷愚[5]者疑心。若於此經。得旨無疑。即不假解説。從上如來所説善法。爲除凡夫不善之心。經是聖人之語。教人聞之。從[6]凡悟聖。永息迷心。此一卷經。衆生性中本有。不自見者。但讀誦文字。若悟本心。始知此經。不在文字。但能明了自性。方信一切諸佛。從此經出。今恐世人。身外覓佛。向外求經。*一張裏 不發内心。不持内經。故造此訣。令諸學者。持内心經。了然自見。清淨佛心。過於數量。不可思議。後之學者。讀經有疑。見此解義。疑心釋然。更不用訣。所冀[7]學者同見鑛中金性。以智慧火鎔鍊[8]。鑛去金存。我釋[9]迦本師説金剛經。在舍衛國。因須菩提起問。大[10]悲爲説。須菩提聞法[11]得悟。請佛與法安名。令後人依而受持。佛[12]告須菩提。我[13]與此法立名曰金剛般若波羅蜜。以是名字。汝當奉持。通考所引「如來所説金剛般若波羅蜜。與法爲名。其意謂何。以金剛世界之寶。其性猛利。能壞諸物。金雖至堅[14]。羚[15]羊角能壞。金

---

(1) 〈五〉は、「曹溪六祖禪師序」と題す。『五家解』編輯の際のものと考えられる。
(2) 〈五〉にこの一行なし。
(3) 〈五〉は、「注」を「註」に作る。
(4) 〈底〉は、後に「故」の上に「是」を補う。
(5) 〈底〉は、後に「愚」を消して「除學」に改む。〈五〉は、「愚」を「學」に作る。
(6) 〈底〉は、「從」に「超イ」と頭註。
(7) 〈底〉は、「冀」に「翼イ」と頭註。〈五〉は、「翼」に作る。
(8) 〈五〉は、「鍊」を「煉」に作る。
(9) 〈五〉は、「釋」の上に一字分の空白を置く。
(10) 〈底〉は、後に「大」の上に「佛」を補っている。
(11) 〈五〉は、「法」を「説」に作る。
(12) 〈底〉は、「佛」の上に「故經云イ」と頭注。〈五〉には、この三字あり。
(13) 〈五〉は、「我與此法立名曰」を「是經名爲」に作る。
(14) 〈通〉は、「堅」を「剛」に作る。
(15) 〈底〉〈五〉とも、「羚」を「羖」に作る。從って、古くより、このような形で傳えられて來たものと思われるが、『傳燈録』巻一六、雪峯義存章に「羚羊掛角」と言うように、元來は「羚」が正しいと考えられるので改めておく。

剛喩佛性。羚[15]羊角喩煩惱。金雖堅剛。羚[15]羊角能碎。佛性雖堅。煩惱能亂[16]。煩惱雖堅。般若智能破。羚[15]羊角雖堅。賓鐵能壞。悟此理者。了然見性。涅槃經云。見佛性者。不名衆生。如[17]來所説金剛喩者。祇爲世人性無堅固。口[18]雖誦經。光明不生。外誦内行。*二張表 光明齊等。内無堅固。定慧即亡。口誦心行。定慧均等。是名究竟。金在山中。不[19]知是寶。寶[20]亦不知是山。何以故。爲無性故。人則有性。取其寶用。得遇金師。鏨[21]鑿山破。取鑛烹鍊[22]。遂成精金。隨意使用。得免貧苦。四大身中。佛性亦爾。身喩世界。人我喩山。煩惱喩鑛[23]。佛性喩金。智慧喩工匠。精進勇猛喩鏨鑿[21]。身世界中。有人我山。人我山中。有煩惱鑛。煩惱鑛中。有佛性寶。佛性寶中。有智慧工匠。用智慧工匠。鑿破人我山。見煩惱鑛。以覺悟火烹鍊[24]。見自金剛佛性。了然明淨。是故。以金剛爲喩。因爲[25]之名也。」空解不行。有名無體。解義修行。名體倶備。不修即凡夫。修即同聖智。故名金剛也。何名般若。是梵語。唐言智慧。智者不起愚心。慧者有其方便。慧是智體。智是慧用。體若有慧。用智不愚。體若無慧。用愚無智。祇縁愚癡未悟。遂假智慧除[26]之也。*二張裏 何名波羅蜜。唐言到彼岸。彼[27]岸者。離生滅義。祇縁世人。性無堅固。於一切法上。有生滅相。流浪諸趣。未到眞如地[28]。並是此岸。要具大智慧。於一切法。圓[29]離生滅[30]。即是到彼岸。亦云。心迷則此岸。心悟則彼岸。性[31]邪則此岸。心正則彼岸。口説心行。即自法身有波羅蜜。口説心不行。即無波羅蜜也。何名爲經。經者徑也。是成佛之道路。凡人欲臻斯路。應内修般若行。以至究竟。如或但能誦説。心不依行。自心則[32]無經。實見實行。自心則[32]有經。故此經如來號爲金剛般若波羅蜜[33]。

金剛般若波羅蜜經(1)(2)

法會因由分第一(1)

如是我聞。

解(2)。如者指義。是乃(3)定辭(4)。阿難自稱。如是之法。我從佛聞。明不自説也。故言如是我聞。又我者性也。性即我也。内外動作。皆由於性。一切盡聞。故稱我聞也。（*三張表）

經(5)。一時佛在舍衞國祇樹給孤獨園。

解。言一時者。師資會遇齊集之時。佛者是説法之主。在者欲明處所。（集解所引）「舍衞國者。波斯匿王所居之國。祇者太子(6)名(7)也。樹是祇陀太子(8)所施。故言祇樹也(9)。」給孤獨者。須達長者之異名。園者(10)本屬須達。故言給孤獨園。佛者梵音(11)。唐言覺也。覺義有二。一者。外覺觀諸法空。二者。内覺知心空寂。不被六塵所染。外不見人之過惡。内不被邪迷所惑。故名曰覺。覺即是(12)佛也。

經。與大比丘衆千二百五十人俱。

解。言(13)與者。佛與比丘。同住金剛般若無相道場。故言與也。大比丘者。千二百五十人(14)。俱是大阿羅漢故。比丘者是梵語。唐言能破結(15)賊。故名比丘。衆多也。千二百五十人者。明(16)其數也。俱者同處平等法會。

---

(1)〈集〉は、ここに「金剛經啓請」「淨口業眞言」「安土地眞言」「普供養眞言」「奉詔八金剛」「奉詔四菩薩」「發願文」「云何梵」「開經偈」あり。

(2)〈五〉は、「經」の下に「上」あり。

(1)〈大〉は、この科段なし。以下、全て同じ。

(2)註釋冒頭の「解」字、〈五〉になし。以下、全て同じ。

(3)〈五〉は、「乃」を「者」に作る。

(4)〈五〉は、「辭」を「詞」に作る。

(5)經文冒頭の「經」字、〈五〉になし。以下、全て同じ。

(6)〈集〉は、「太」の上に「匿王」の二字あり。

(7)〈集〉は、「名也」を「祇陀」に作る。

(8)〈集〉は、「太子」の二字なし。

(9)〈集〉〈五〉は、「也」なし。

(10)〈五〉は、「者」なし。

(11)〈五〉は、「音」を「語」に作る。

(12)〈五〉は、「是」なし。

(13)〈五〉は、「言」なし。

(14)〈五〉は、「千二百五十人俱」の七字なし。

(15)〈底〉は、「結」に「六」と頭註。〈五〉は、「結」を「六」に作る。

(16)〈五〉は、「明」なし。

經。爾時。世尊。食時著衣持鉢。入舍衛大城乞食。

解。爾時者。當此之時。是今(17)辰時。＊三張裏齋時欲至也。著衣持鉢者。爲顯教示跡故也。入者爲世(18)尊自城外而入也。舍(19)者梵語。舍衛國豐德城(20)。即波斯匿王所居之城。故言舍衛大城也。言乞食者。以(21)表如來能下心於一切衆生也。

經。於其城中。次第乞已。還至本處。飯(22)食訖。收衣鉢。洗足已。敷座而坐。

解。次第者。不揀(23)貧富。平等以化也。乞已者。如多乞不過七家。七家數滿。更不至餘家也。還至本處者。佛意制諸比丘。除請召外。不得輒向白衣舍。故云爾。洗足者。如來示現順同凡夫。故言洗足。又大乘法。不獨以洗手足爲淨。多生(24)洗手足。不若淨心。一念心淨。則(25)罪垢悉除矣。如來欲説法時。常儀敷施檀座。故言(26)敷座而坐(27)。

善現起請分第二

時長老須菩提。

解。何名長老。德尊年高。故名長老。須菩提(1)梵語。唐言解空。

經。在大衆中。即從坐(2)起。

＊四張表解。隨衆所坐。故云即從坐(3)起。弟子請益。先行五種儀。一者。從坐(3)而起。二者。端整衣服。三者。偏袒右肩。右膝著地。四者。合掌瞻仰(4)。目不暫捨。五者。一心恭敬。以伸問辭。

---

(17)〈底〉は、「今」を「令」に作る。〈五〉によって改む。
(18)〈五〉は、「爲世尊」の三字なし。
(19)〈五〉は、「舍者梵語」を「舍衛大城者名」に作る。
(20)〈底〉は、「城」の下に「也」と頭註。〈五〉に、「也」あり。
(21)〈五〉は、「以」なし。
(22)〈底〉は、「飯」を「飲」に作る。〈大〉〈集〉〈五〉によって改む。
(23)〈五〉は、「揀」を「擇」に作る。
(24)〈五〉は、「多生」を「蓋言」に作る。
(25)〈五〉は、「則」を「即」に作る。
(26)〈底〉は、「故」を「起」に作る。〈五〉によって改む。
(27)〈五〉は、「坐」の下に「也」あり。

(1)〈五〉は、「提」の下に「是」あり。

(2)〈大〉〈集〉〈五〉は、「坐」を「座」に作る。

(3)〈五〉は、「坐」を「座」に作る。
(4)〈底〉は、「仰」の下に「尊顔」と頭註。〈五〉に、この二字あり。

經。偏袒右肩。右膝著地。合掌恭敬。而白佛言。希有世尊。

解。希有略説三義。第一希有。能捨金輪王位。第二希有。身長丈六。紫磨金容。三十二相。八十種好。三界無比。第三希有。性能含吐八萬四千法。三身圓備。以具上三義。故言[5]希有也。世尊者。智慧超[6]三界。無有能及者。徳高更無上[7]。一切咸恭敬。故曰世尊。

經。如來善護念諸菩薩。善付囑諸菩薩。

解。護念者。如來護[8]念諸菩薩。付囑者。如來以般若波羅蜜[9]法。付囑須菩提等[10]諸大[11]菩薩。言[12]善護念者。令諸學人。以般若智。護念自身心。不令妄起愛憎[13]。染外六塵。墮生死苦海。於自心中。念念常正。不令邪起。自性如來。自善護念。言[14][本四張裏]善付囑者。前念清淨。付囑後念[15]。後念清淨。無有間斷[16]。究竟解脱。如來委曲誨示衆生及在會之衆。當常修此行[17]。故云善付囑也。菩薩者[18]梵語。唐言道心衆生。亦云覺有情。道心者。常行恭敬。乃至蠢動含生[19]。普敬愛之。無輕慢心。故名菩薩。

經。世尊。善男子善女人。

解。善男子者。平坦心也。亦是正定心也。能成就一切功徳。所往無礙也。善女人者。是正慧心也。由正慧心。能出生[20]一切有爲無爲功徳也。

經。發阿耨多羅三藐三菩提心。應云何住[21]。云何降伏其心。

解。須菩提問佛[22]。一切發菩提心人。應云何住。云何降伏其心。須菩提見一切衆生。躁擾不

---

(5)〈五〉は、「言」を「云」に作る。
(6)〈底〉は、「超」の下に「過」と頭註。〈五〉に「過」あり。
(7)〈底〉は、「無」の下に「有」と頭註。〈五〉に「有」あり。
(8)〈五〉は、「來」の下に「以般若波羅蜜法」あり。
(9)〈五〉は、「蜜」なし。
(10)〈五〉は、「等」なし。
(11)〈五〉は、「大」なし。
(12)〈底〉は、「言善護」の三字なし。〈五〉によって補う。
(13)〈五〉は、「愛憎」を「憎愛」に作る。
(14)「言」の字、〈底〉は蟲食いによって讀めず。〈五〉によって補う。
(15)〈五〉は、「後念」の二字なし。
(16)「間斷」の二字、〈底〉は蟲食い。〈五〉によって補う。
(17)〈五〉は、「修此行」を「行此」に作る。
(18)〈五〉は、「者」を「是」に作る。
(19)〈底〉は、「生」に「類」と頭註。〈五〉は、「類」に作る。
(20)〈五〉は、「生」なし。
(21)〈集〉は、「應云何住」を「云何應住」に作る。
(22)〈五〉は、「佛」なし。

停。猶如隙塵。搖動之心。起如飄風。念念相續。無有間歇。[23]若修行如何降伏[24]。

經。佛言。善哉善哉。須菩提。如汝所說。如來善護念諸菩薩。善付囑諸菩薩。

解。是佛讚歎須菩提。善得我心。*五張表 善知我意也。

經。汝今諦聽。當爲汝說。

解。佛欲說法。常先戒敕。令諸聽者。一心靜默。吾當爲說。

經。善男子善女人。發阿耨多羅三藐三菩提心。應如是住。如是降伏其心。

解。阿之言無。耨多羅[25]言上。三之言正。藐之言遍。菩提[26]言知。無者無諸垢染。上者[27]世界無能比。正者正見也。遍者一切智也。知者知一切有情皆有佛性。但能修行。盡得成佛。佛者即是無上清淨般若波羅蜜者[28]。是以一切善男子善女人。若欲修行。應知無上菩提道。應知無上清淨般若波羅蜜多法。以此降伏其心也[29]。

經。唯然世尊。願樂欲聞。

解。唯然者。應諾之辭。願樂者。願佛廣說。令中下根機。盡得開悟。樂者樂聞深法。欲聞者。渴仰慈誨也。

---

(23)〈五〉は、「若」を「問若欲」の三字に作る。
(24)〈五〉は、「伏」の下に「其心」あり。
(25)〈五〉は、「羅」の下に「之」あり。
(26)〈五〉は、「提」の下に「之」あり。
(27)〈五〉は、「世」を「三」に作る。
(28)〈五〉は、「者」を「也」に作る。
(29)〈五〉は、「也」なし。

大乘正宗分第三

佛告須菩提。諸菩薩摩訶薩。應如是住(1)。如是降伏其心。*五張裏

解。前念清淨。後念清淨。名爲菩薩(2)。念念不退。雖在塵勞。心常清淨。名摩訶薩。又慈悲喜捨。種種方便。化導衆生。名爲菩薩(3)。能化所化。心無取著(4)。是名摩訶薩(5)。恭敬一切衆生。即是降伏其(6)心。處眞名不變。契如名不異。遇諸境界。心無變異。名曰眞如。亦云。外不假曰眞。内不亂(7)曰如。念念無差曰是(8)。

經。所有一切衆生之類。

解(9)。集解所引「總標(10)也。次下別列九類。」

經。若卵生。若胎生。若濕生。若化生。若有色。若無色。若有想。若無想。若非有想。若(11)非無想。

解。集解所引「卵生者迷性也。胎生者習性也。濕生者隨邪性也。化生者見趣性也。迷故造諸業。習故常流轉。隨邪心不定。見趣墮阿鼻(12)。起心修心。妄見是非。内不契無相(13)之理。名爲有色。内心守直。不行恭敬(14)供養。但言(15)直心是佛。不修福慧。名爲無色。不了中道。眼見耳聞。心想思惟。愛著法相。口説佛行。心不依行。名爲有想。*六張表 迷人坐禪。一向除妄。不學慈悲喜捨智慧方便。猶如木石。無有作用。名爲無想。不著二法想。故名若非有想。求理心在。故名若非無想。煩惱(16)萬差。皆是垢心。身形無數。總(17)名衆生。如來大悲普化。皆令得入無餘涅槃(18)。」

---

(1)〈大〉〈集〉〈五〉は、「如是住」の三字なし。
(2)〈底〉は、「薩」を「提」に作る。〈五〉によって改む。
(3)〈底〉は、「薩」の下に「心」あり。〈五〉によって削る。
(4)〈底〉は、「心無取著」の四字なく、頭註によって補う。恐らく、異本によるものであろうが、この四字がないと、文章が續かないので補う。〈五〉にも、この四字あり。
(5)〈五〉は、「是」なし。
(6)〈底〉は、「其」を「自」に作る。〈五〉によって改む。
(7)〈羅〉も、「不亂」に作る。
(8)〈底〉は、「曰」の上に、「即是降伏其心也イ」と頭註。
(9)〈五〉は、この一行なし。
(10)〈集〉は、「總」の上に「一切者」の三字あり。
(11)〈大〉〈集〉〈五〉は、「若」なし。
(12)〈五〉は、「墮阿鼻」を「多論壁」に作る。〈底〉は、「阿鼻」に「論壁イ」と頭註。〈羅〉も、「墮阿鼻」に作る。
(13)〈底〉は、「相」に「想イ」と頭註。
(14)〈集〉は、「恭敬」を「敬恭」に作る。
(15)〈五〉は、「言」を「見」に作る。
(16)〈集〉は、「煩惱……涅槃」の三〇字を次節の經文の解義、「如來指示……同諸佛所證也」の下に置く。
(17)〈五〉は、「總」を「惣」に作る。
(18)〈五〉は、「槃」の下に「也」あり。

經。我皆令入無餘涅槃。而滅度之。

解。「如[19]來指示。[集解所引]三界九地衆生[20]。各有涅槃妙心。令自悟入[21]。無餘者。無餘[22]習氣煩惱也。涅槃者。圓滿清淨義。令[23]滅盡一切習氣[24]不生方契[25]也。度者渡生死大海也。佛心平等。普願與一切衆生。同入圓滿清淨無想[26]涅槃。同渡生死大海。同諸佛所證也。」有人雖悟雖修。作有所得心[27]。却生我相。名爲法我。除盡法我。方名滅度也。

經。如是滅度無量無數無邊衆生。實無衆生得滅度者。

解。如是者。指前法也。滅度者。大解脱也。大解脱者。煩惱及習氣。一切諸業障滅盡。更無有餘。是名大解脱。[＊六張裏]一一[28]衆生。各各自有無量無數無邊煩[29]惱貪瞋惡業。若不斷除。終不得解脱。故言。實[30]無衆生得滅度者。一切迷人悟得自性。始知佛。不見自相。不有自智。何曾度衆生。祇爲凡夫不見本[31]心。不識佛意。執著法[32]相。不達無爲之理。我人不除。是名衆生。若離此病。實無衆生得滅度者。故言。妄心無處即菩提。生死涅槃本平等。何[33]滅度之有。

經。何以故。須菩提。若菩薩有我相人相衆生相壽者相。即非菩薩。

解。衆生佛性。本無有異。縁有四相。不入無餘涅槃。有四相即[34]衆生。無四相即是佛。迷即佛[35]衆生。悟即衆生[36]佛。迷人恃有財寶學問族姓。輕慢一切人。名我相。雖行仁義禮智信。而意高自負。不行普敬。言我解[37]仁義禮智信。不合敬爾。名人相。好事歸己。惡事施於[38]人。名衆生相。對境取捨分別。名壽者相。是謂凡夫四相。「[集解所引]修行人亦[39]有四相。[＊七張表]心有能所。輕慢衆生。名我相。自恃持戒。輕破戒者。名人相。厭三塗苦。願生諸天。是衆生相。心愛長年。

(19)〈五〉は、「如」の上に「而滅度之者」の五字あり。
(20)〈集〉は、「衆生」の二字なし。
(21)〈底〉は、「入」の下に「無餘」と脚註。〈五〉に、この二字あり。
(22)〈五〉は、「餘」なし。
(23)〈五〉は、「令」なし。
(24)〈底〉は、「氣」の下に「永」と頭註。〈五〉は、「氣」の下に「令永」の二字あり。
(25)〈集〉〈五〉は、「契」の下に「此」あり。
(26)〈底〉は、「想」に「餘」と頭註。〈五〉は「想」を「餘」に作る。
(27)〈五〉は、「心」の下に「者」あり。
(28)〈五〉は、「一一衆生各各自有」の八字なし。
(29)〈五〉は、「煩」の上に「衆生元各自有一切」の八字あり。
(30)〈五〉は、「實無衆生得滅度者」を「如是滅度無量無數無邊衆生」に作る。
(31)〈五〉は、「本」の上に「自」あり。
(32)〈五〉は、「法」を「諸」に作る。
(33)〈五〉は、「何」の上に「又」あり。
(34)〈底〉は、「即」の下に「是」と頭註。〈五〉に「是」あり。
(35)〈底〉は、「佛」の下に「是」と頭註。〈五〉に「是」あり。
(36)〈底〉は、「生」の下に「是」と脚註。〈五〉に「是」あり。
(37)〈五〉は、「解」の下に「行」あり。
(38)〈五〉は、「於」なし。
(39)〈底〉は、「亦」を「力」に作る。〈集〉〈五〉によって改む。

而勤修福業。法執(40)不忘。是壽者相。有四相即是衆生。無四相即是佛。」

妙行無住分第四

復次須菩提。菩薩於法。應無所住。行於布施。所謂不住色布施。不住聲香味觸法布施。

解。凡夫布施。求(1)身相端嚴。五欲快樂(2)。報盡(3)墮三塗。世尊大慈。教行無相布施者(4)。不求身相端嚴。五欲快樂。但令内破慳心。外利益一切衆生。如是相應。名(5)爲不住色布施。

經。須菩提。菩薩應如是布施。不住於相。

解。（集解所引）「應如無相心布施者。爲無能施之心。不見(6)有施之物。不分別受施之人。故(7)云無相布施。」

經。何以故。若菩薩不住相布施。其福德不可思量。

解。菩薩行施。心無所求(8)。其所獲福德（＊七張裏）(9)。十方諸佛(10)。不能(11)較量。言復次者。連前起後之辭。

一説。布者普也。施者散也。能普散盡心(12)中妄念習氣煩惱。四相泯絶。無所蘊積。是眞布施。又説。布施者(13)。由不住六塵境界有漏(14)分別。惟當(15)返本(16)清淨。了萬法空寂故(17)。若不了此意。唯(18)增諸業。故須内除貪愛。外行布施。内外相應。獲福無量。見人作惡。不見其過。自性不生分別。是名(19)離惡(20)。依教修行。心無能所。是名(21)善法。修行人。心有能所。不名善法。

---

(40)〈五〉は、「法」を「諸」に作る。
(1)〈底〉は、「求」の上に「祗」と頭註。〈五〉は、この位置に「只」あり。
(2)〈五〉は、「樂」の下に「故」あり。
(3)〈五〉は、「盡」の下に「即」あり。
(4)〈底〉は、「布」を缺くが、〈五〉には、この文字あり。後の註釋文中にも、「無住相布施」という言葉が見えるので補う。
(5)〈五〉は、「名爲」を「是名」に作る。
(6)〈決〉に、「六祖注中。不見有施之物。有當作所。他本云。不見布施之物」という。
(7)〈五〉は、「故云無相布施」を「是不住相布施也」に作る。
(8)〈五〉は、「求」を「希」に作る。
(9)〈五〉は、「徳」を「如」に作る。
(10)〈五〉は、「諸佛」を「虚空」に作る。
(11)〈五〉は、「能」を「可」に作る。
(12)〈五〉は、「心」を「胸」に作る。
(13)〈五〉は、「布施者由」を「布者普也」に作る。
(14)〈五〉は、「有」の上に、「又不」の二字あり。
(15)〈五〉は、「當」を「常」に作る。
(16)〈五〉は、「本」を「歸」に作る。
(17)〈五〉は、「故」なし。
(18)〈五〉は、「唯」を「惟」に作る。
(19)〈五〉は、「名」を「爲」に作る。
(20)〈底〉は、「惡」に「相イ」と頭註。〈五〉は、「惡」を「相」に作る。
(21)〈五〉は、「是名」を「即是」に作る。

能所心不滅。終未[22]得解脱。念念常行般若智。其福無量無邊。依如是修行。感得一切人天恭敬供養。是名爲福[23]。常行不住相布施。普敬一切含生。其功徳無有邊際。不可稱計也。

經。須菩提。於意云何。東方虚空。可思量不。不也世尊。

解。縁不住相布施。所得功徳。不可稱量。佛將[24]東方虚空。以[25]爲譬喩。故問須菩提。東方虚空。可思量不。不也世尊者。*八張表 須菩提言。東方虚空。不可思量也[26]。

經。須菩提。南西北方四維上下虚空。可思量不。不也世尊。須菩提。菩薩無住相布施福徳。亦復如是。不可思量。

解。佛言。虚空無有邊際。不可度量[27]。菩薩無住相布施。所得功徳。亦如虚空。不可度量。無有[28]邊際也。世界中大者。莫過虚空。一切性中大者。莫過佛性。何以故。凡有形有[28]相者。不得名爲大。虚空無形相。故得名爲大。一切諸性。皆有限量。不得名爲大。佛性無有[28]限量。故名爲大。此虚空中。本無東西南北。若見東西南北。亦是住相。不得解脱。佛性本無[29]我人衆生壽者。若有此四相可見。即是衆生性[30]。不名佛性。亦所謂住相布施也。雖於妄心中。説有東西南北。在理則何有。所謂東西不眞。南北曷異。但了[31]自性本來空寂。混融無所[32]分別。故如來深讚不生分別也。

經。須菩提。但[33]應如所教住。*八張裏

解。應者順也。但順如上所説之教。住無[34]住相布施。即是[35]菩薩[36]。

---

(22) 〈五〉は、「未」を「不」に作る。
(23) 〈五〉は、「福」の下に「徳」あり。
(24) 〈五〉は、「將」を「以」に作る。
(25) 〈五〉は、「以」なし。
(26) 〈五〉は、「也」なし。
(27) 〈五〉は、「度量」を「思度」に作る。
(28) 〈五〉は、「有」なし。
(29) 〈底〉は、「本」の上に「推」あり。〈五〉によって削る。
(30) 〈五〉は、「性」を「相」に作る。
(31) 〈五〉は、「但了」なし。
(32) 〈五〉は、「所」なし。
(33) 〈大〉〈集〉〈五〉は、「但」の上に「菩薩」あり。
(34) 〈五〉は、「住」なし。
(35) 〈五〉は、「是」なし。
(36) 〈五〉は、「薩」の下に「也」あり。

如理實見分第五

須菩提。於意云何。可以身相見如來不。不也世尊。不可以身相得見如來。何[1]以故。如來所說身相。即非身相。

解。色身即有相。法身即無相。色身者。四大和合。父母所生。肉眼所見。法身者。無有形段。非青[2]黄赤白。無一切相貌。非肉眼能見。慧眼乃能見之。凡夫但見色身如來。不見法身如來。法身者[3]。量等虛空。是故。佛問須菩提。可以身相見如來不。須菩提知。凡夫人[4]但見色身如來。不見法身如來。故言。不也世尊。不可以身相得見如來。

經。何以故。如來所說身相。即非身相。

解。色身是相。法身是性。一切善惡。盡由法身。不由色身。法身若作惡。色身不生善處。法身作善。色身不墮惡處。＊九張表 凡夫唯見色身。不見法身。不能行無住相布施。不能於一切處行平等行。不能普敬一切衆生。見法身者。即能行無住相布施。即能普敬一切衆生。即能修般若波羅蜜行。方信。一切衆生。同一眞性。本來清淨。無有垢穢。具足河[5]沙妙用。

經。佛告須菩提。凡所有相。皆是虛妄。若見諸相非相。即[6]見如來。

解。如來欲顯法身。故說。一切諸相。皆是虛妄。若悟一切諸相。虛妄不實。即見如來無相之理[7]。

---

(1)〈大〉〈集〉〈五〉は、この「何以故。如來所說身相。即非身相」の重複なし。
(2)〈五〉は、「青」の上に「有」あり。
(3)〈五〉は、「者」なし。
(4)〈五〉は、「人」なし。
(5)〈五〉は、「河」を「恒」に作る。
(6)〈大〉は、「即」を「則」に作る。
(7)〈五〉は、「理」の下に「也」あり。

正信希有分第六

須菩提白佛言。世尊。頗有衆生。得聞如是言説章句。生實信不。

解。須菩提言[1]。此法甚深。難信難解。末世凡夫。智慧微劣。云何信入。佛答在次下[2]。

經。佛告須菩提。莫作是説。如來滅後。後五百歳。有持戒修福者。於此章句。能生信心。以此爲實。當知是人。不於一佛二佛（本九張裏）三四五佛而種善根。已於無量千萬佛所。種諸善根。聞是章句。乃至一念生淨信者。

解。於我滅後。後五百歳。若有人[3]。能持大乘無相戒。不妄取諸相。不造生死業。一切時中。心常空寂。不被諸相所縛。即是無[4]住心。於如來深法。心能信入。此人所有言説。眞實可信。何以故。此人不於一劫二劫三四五劫。而種善根。已於無量千萬億劫。種諸善根。是故。如來説。我滅後。後五百歳。有能離相修行者。當知是人。不於一二三四五佛。種諸善根。（集解所引）「何名[5]種諸善根。略述於次下[6]。所謂於諸佛所。一心供養。隨順教法。於諸菩薩善知識師僧父母耆年宿徳尊長之處。常行恭敬供養。承順教命。不違其意。是名種諸善根。於一切[7]貧苦衆生。起慈愍[8]心。不生輕厭。有所須求。隨力惠施。是名種諸善根。於一切惡類。自行柔和[9]忍辱。歡喜逢迎。不逆其意。（本十張表）令彼發歡喜心。息剛戻心。是名種諸善根。於六道衆生。不加殺害。不欺不賤。不毀不辱。不騎不箠。不食其肉。常行饒益。是名種諸善根。信心者。信般若波羅蜜。能除一切煩惱。信般若波羅蜜。能成就一切世出世[10]功徳。信般若波羅蜜。能出生一切諸佛。信自身中[11]佛性。本來清淨。無有染汚。與諸佛性。平等無二。信六道衆生。本來無相。信一切衆生。盡[12]得成佛。是名淨信心也。」

---

(1) 〈五〉は、「言」を「問」に作る。
(2) 〈五〉は、「次」なし。
(3) 〈五〉は、「有」の上に「復」あり。
(4) 〈底〉は、「無」の下に「所」と頭註。〈五〉に「所」あり。
(5) 〈集〉は、「名」を「謂」に作る。
(6) 〈集〉は、「略述於次下」の五字なし。〈五〉は、この五字を「略説次下」の四字に作る。
(7) 〈五〉では、「於一切貧苦衆生‥‥息剛戻心。是名種諸善根」の六四字と、「於六道衆生‥‥常行饒益。是名種諸善根」の三五字が入れ換わっている。
(8) 〈集〉〈五〉は、「愍」を「愍」に作る。
(9) 〈五〉は、「柔和」を「和柔」に作る。
(10) 〈集〉〈五〉は、「世」なし。
(11) 〈集〉は、「中」なし。
(12) 〈五〉は、「得」を「能」に作る。

經。須菩提。如來悉知悉見是諸衆生。得如是無量福德。

解。若有人。能[13]於如來滅後。發般若波羅蜜心。行般若波羅蜜行。修習悟解[14]。得佛深意者。諸佛無不知之。

經。何以故。是諸衆生。無復我相人相衆生相壽者相。無法相。亦無非法相。

解。若有人聞上乘法。一心受持。即能行般若波羅蜜無相無著之行。了無我人衆生壽者四相。無我者。無色[15]受想行識也。無人者。（本十張裏）了四大不實。終歸地水火風也。無衆生者。無生滅心也。無壽者。我身本無。寧有壽者。四相既亡[16]。即法眼明徹。不著有無。遠離二邊。自心如來。自覺自悟[17]。永離塵勞妄念。自知[18]得福無邊。無法相者。離名絶相。不拘文字也。亦無非法相者。不得言無般若波羅蜜法。若言無般若波羅蜜法。即是謗法。

經。何以故。是諸衆生。若心取相。即[19]爲著我人衆生壽者。若取法相。即著我人衆生壽者。何以故。若取非法相。即著我人衆生壽者。

解。取此三相。並著邪見。盡是迷人。不悟經意。故修行人。不得愛著如來三十二相。不得言。我解般若波羅蜜法。亦不得言。不行般若波羅蜜行。而得成佛。

經。是故。不應取法。不應取非法。以是義故。如來常說。汝等比丘。知我說法如筏喩者。法尚應捨。何況非法。

解。法者是般若波羅蜜法。非法者生天等法。（本十一張表）般若波羅蜜法。能令一切衆生。過生死大海。

---

(13)〈五〉は、「能」なし。

(14)〈五〉は、「悟解」を「解悟」に作る。

(15)〈五〉は、「色」なし。

(16)〈底〉は、「亡」を「立」に作り、〈五〉は、「無」に作る。また、五山版（京大人文研、松本文庫所藏）などでは、これを「亡」に作る。恐らく、「立」は「亡」の寫誤であろうから、ここでは、「亡」に改めておく。

(17)〈五〉は、「自覺自悟」を「自悟自覺」に作る。

(18)〈五〉は、「知」を「然」に作る。

(19)〈大〉は、「即」を「則」に作る。

既得過已。尚不應住。何(20)況生天等法而得樂著(21)。

無得無説分第七(1)

須菩提。於意云何。如來得阿耨多羅三藐三菩提耶。如來有所説法耶。須菩提言(2)。如我解佛所説義。無有定法名阿耨多羅三藐三菩提。亦無有定法如來可説。

解。阿耨多羅。非從外得。但心無我所。即是也。祇緣對病設藥。隨宜爲説。何有定法乎。如來説無上正法。心本無得。亦不言不得。但爲衆生所見不同。如來應彼根性。種種方便。開誘化導。俾其離諸執著。指示一切衆生妄心。生滅不停。逐(3)境界動。前念瞥起。後念應覺。覺既不住。見亦不存。若爾。豈有定法如(4)來可説也。阿者心無妄念。耨多羅者心無驕慢。三者心常在正定。藐者心常在正慧。三菩提者心常空寂。一念凡心頓除。本二一張裏 即見佛性(5)。

經。何以故。如來所説法。皆不可取不可説。非法非非法。

解。恐人執著如來所説文字章句。不悟無相之理。妄生知解。故言不可取。如來爲化種種衆生。應機隨量。所有言説。亦何有定乎。學人不解如來深意。但誦如來所説教法。不了本心(6)。終不成佛。故言不可説也。口誦心不行。即非法。口誦心行。了無所得。即非非法。

經。所以者何。一切賢聖。皆以無爲法。而有差別。

解。集解所引「三乘根性。所解不同。見有深淺(7)。故言差別。佛説無爲法者。即是無住。無住即(8)無相。

---

(20)〈五〉は、「何」なし。
(21)〈集〉は、ここで巻之一が終わり、「金剛般若波羅蜜多經巻之一終」の尾題あり。
(1)〈集〉は、以下を巻之二とし、この前に「金剛般若波羅蜜經巻之二」の標題を置く。
(2)〈底〉は、「言」なし。〈大〉〈集〉〈五〉によって補う。
(3)〈底〉は、「逐」を「遂」に作る。〈五〉によって改める。
(4)〈五〉は、「如」の上に「爲」あり。
(5)〈五〉は、「性」の下に「也」あり。
(6)〈底〉は、「心」の下に「不了本心」と頭註した後、それを消している。
(7)〈集〉〈五〉は、「深淺」を「淺深」に作る。
(8)〈五〉は、「即」の下に「是」あり。

無相即無起[8]。無起即無滅[8]。蕩然空寂。照用齊施[9]。鑒覺無礙。乃眞是解脱佛性。佛即是覺。覺即是觀照。觀照即是智慧。智慧即是般若波羅蜜多也[10]。」

依法出生分第八

須菩提。於意云何。若人滿三千大千世界七寶。以用布施（本一二張表）。是人所得福德。寧爲多不。

須菩提言。甚多世尊。何以故。是福德即非福德性[1]。是故。如來説福德多。

解[2]。「（集解所引）三千大千世界七寶。持用布施。得福雖多。於性[3]一無利益。依摩訶般若波羅蜜多修行。令自性不墮諸有。是名福德性。心有能所。即非福德性。能所心滅。是名福德性。心依佛教。行同佛行。是名福德性。不依佛教。不能履踐[4]佛行。即非福德性。」

經。若復有人。於此經中。乃至受持[5]四句偈等。爲他人説。其福勝彼。

解。十二部教大意。盡在四句之中。何以知其然。以諸經中。讃歎四句偈。即是摩訶般若波羅蜜多。以摩訶般若爲諸佛母。三世諸佛。皆依此理[6]修行。方得成佛。般若心經云。三世諸佛。依般若波羅蜜多故。得阿耨多羅三藐三菩提。從師所學曰受。解義修行曰持。自解自行是自利。爲人演説是利他。功徳廣大。無有邊際。

經。何以故（本一二張裏）。須菩提。一切諸佛。及諸佛阿耨多羅三藐三菩提法。皆從此經出。

解。此經者。非指此一卷之文也[7]。要顯當人[8]佛性。從體起用。妙利無窮。般若[9]即智慧也。智

（9）〈底〉は、「施」に「晈」と頭註。〈五〉は、「施」を「收」に作る。

（10）〈五〉は、「也」なし。

（1）〈大〉は、「福德」を「復福」に作る。誤植である。

（2）〈集〉は、この部分に、今一つ別の六祖の註釋を載せる。ただし、これは、元來、別の註釋書からの引用であったと考えられる。これについては、拙稿「慧能に歸される數種の『金剛經』の註釋書について」（『禪文化研究所紀要』二二號、一九九六年五月）を參照。

（3）〈底〉は、「性」の下に「上イ」と頭註。〈五〉に、「上」あり。

（4）〈五〉は、「履踐」を「踐履」に作る。

（5）〈大〉〈集〉〈五〉は、「乃至受持」を「受持乃至」に作る。

（6）〈底〉は、「理」に「經イ」と頭註。〈五〉は、「理」を「經」に作る。

（7）〈五〉は、「也」なし。

（8）〈五〉は、「當人」なし。

（9）〈五〉は、「若」の下に「者」あり。

以方便爲功。慧以決斷爲用。即一切時中覺照心是。一切諸佛。及阿耨多羅三藐三菩提法。
皆從覺照(10)生。故云從此經出。

經。須菩提。菩薩(11)所謂佛法者。即非佛法。

解(12)。所(13)説一切文字章句。如標如指。標(14)者影(15)響之義。依標取物。依指觀月。月不是指(16)。標不是法(16)。但依經取法。經不是法。經文則(17)肉眼可見。法則(17)慧眼能見。若無慧眼者。但見其文(18)。不見其法。若不見法(19)。即不解佛意。既(20)不解佛意。則(21)終誦經不成佛道。

一相無相分第九

須菩提。於意云何。須陀洹能作是念。我得須陀洹果不。

解。須陀洹者梵語。唐言逆流。逆生死流。不順(1)六塵。＊一三張表 一向修無漏業。得麁重煩惱不生。決定不受地獄傍(2)生修羅異類之身。名須陀洹果。若了無相法。即無得果之心。微有得果之心。即不名須陀洹。故言不也。

經。須菩提言。不也世尊。何以故。須陀洹名爲入流。而無所入。不入色聲香味觸法。是名須陀洹。

解。流者聖流也。須陀洹人。已離麁重煩惱。故得入聖流。而無所入者。無得果之心也。須陀洹者。乃修行人初果(3)。

---

(10)〈五〉は、「照」の下に「中」あり。
(11)〈大〉〈集〉〈五〉は、「菩薩」の二字なし。
(12)〈集〉は、この部分に、全く異なる註釋を載せる。しかし、これは、元來、別の註釋書からの引用であったと考えられる。前掲拙稿を參照されたい。
(13)〈五〉は、「所」を「此」に作る。
(14)〈底〉は、「標」の下に「指イ」と脚註。〈五〉に、「指」あり。
(15)〈五〉は、「影」の上に「是」あり。
(16)〈底〉は、「指」に「物」と頭註。異本の文字の註記と考えられるが、〈五〉が、「法」を「物」に作るように、元來、「法」に附すべき校異を、誤って「指」に附したものと考えられる。
(17)〈五〉は、「則」を「即」に作る。
(18)〈五〉は、「文」を「經」に作る。
(19)〈五〉は、「若不見法」の四字なし。
(20)〈底〉は、「既」を「慧」に作る。〈五〉によって改む。
(21)〈五〉は、「則終誦經」を「終」の一字に作る。
(1)〈底〉は、「順」に「染イ」と頭註。〈五〉は、「染」に作る。
(2)〈五〉は、「傍」を「畜」に作る。
(3)〈五〉は、「果」の下に「也」あり。

經。須菩提。於意云何。斯陀含能作是念。我得斯陀含果不。須菩提言。不也世尊。何以故。斯陀含名一往來。而實無往來。是名斯陀含。

解。斯陀含者梵語。唐言一來[4]。捨三界結縛。三界結盡。故名斯陀含。集解所引「斯陀含人[5]。名一往來。行從天上。却到[6]人間生。從人間死。却生天上竟。遂[7]出生死。三界業盡。名斯陀含果。大乘斯陀含者。目覩諸境。心有一生一滅。無第二生滅。故名一往來。＊一三張裏」前念起妄。後念即止。前念有著。後念即離。亦[8]曰斯陀含也。

經。須菩提。於意云何。阿那含能作是念。我得阿那含果不。須菩提言。不也世尊。何以故。阿那含名爲不來。而實無來[9]。是故名阿那含。

解。阿那含者[10]梵語。唐言不還。亦名出欲。出欲者。外不見可欲之境。内無欲心可行[11]。定不向欲界受生。故名不來。而實無[12]來。亦名不還。以欲習永盡。決定不來受生。是故名阿那含[13]。

經。須菩提。於意云何。阿羅漢能作是念。我得阿羅漢道不。

解。諸漏已盡。無復煩惱。名阿羅漢。阿羅漢者。煩惱永盡。與物無諍。若作[14]得果之心。即是有諍[15]。

經。須菩提言。不也世尊。何以故。實無有法名阿羅漢。世尊。若阿羅漢作是念。我得阿羅漢道。是[16]爲著我人衆生壽者。

---

(4)〈五〉は、「來」の上に「往」あり。
(5)〈五〉は、「人」なし。
(6)〈集〉は、「到」を「得」に作る。
(7)〈五〉は、「遂」なし。
(8)〈五〉は、「亦」を「實無往來故」の五字に作る。
(9)〈五〉は、「來」の上に「不」あり。
(10)〈五〉は、「者」なし。
(11)〈五〉は、「行」を「得」に作る。
(12)〈五〉は、「無」の下に「不」あり。
(13)〈五〉は、「含」の下に「也」あり。
(14)〈五〉は、「作」を「有」に作る。
(15)〈五〉は、この下に「若有諍。非阿羅漢」の七字あり。
(16)〈底〉は、「是」に「即」と頭註。〈大〉〈集〉〈五〉は、「是」を「即」に作る。

解。阿羅漢者梵語。[17]唐言無諍。[18]無煩惱可斷。無貪瞋可離。情無違順。心境俱空。內外常寂。[19]
[*一四張表]若有得果之心。即同凡夫。故言不也。

經。世尊。佛說。我得無諍三昧。人中最爲第一。是第一離欲阿羅漢。世尊。[20]我不作是念。我是離欲阿羅漢。世尊。我若作是念。我得阿羅漢道。世尊即[21]不說。須菩提是樂阿蘭那行者。以須菩提實無所行。而名須菩提是樂阿蘭那行。

解。何名無諍三昧。謂阿羅漢。心無生滅去來。唯有本覺常照。故云無諍三昧。[集解所引]「三昧[22]梵音。[23][24]此云正受。亦云正見。遠離九十五種邪見。是名正見。[25]」空中[26]有明闇[27]諍。性中有邪正諍。念念常正。無一念邪心。即是無諍三昧。修此三昧。人中最爲第一。若有一念得果之心。即不名無諍三昧。阿蘭那是梵語。唐言無諍行。無諍[28]即是清淨行。清淨行者。爲除去有所得[29]心也。若存有所得心。即是有諍。有諍即非清淨道。常行無所得心。即是無諍行。

莊嚴淨土分第十

[*一四張裏]佛告須菩提。於意云何。如來昔在然燈佛所。於法有所得不。不也[1]世尊。

解。佛恐須菩提有得法之心。爲遣此疑。大悲[2]故問之。須菩提知。法無所得。而白佛言。不也。

經。世尊[3]。如來在然燈佛所。於法實無所得。

---

(17)〈五〉は、「者」なし。
(18)〈五〉は、「諍」の下に「無諍者」の三字あり。
(19)〈五〉は、「寂」の下に「是名阿羅漢」の五字あり。
(20)〈大〉〈五〉は、「世尊」の二字なし。
(21)〈大〉は、「即」を「則」に作る。
(22)〈五〉は、「昧」の下に「是」あり。
(23)〈五〉は、「音」を「語」に作る。
(24)〈五〉は、「此云」を「唐言」に作る。
(25)〈五〉は、「見」の下に「也」あり。
(26)〈五〉は、「空」の上に「然」あり。
(27)〈五〉は、「闇」を「暗」に作る。
(28)〈五〉は、「諍」の下に「行」あり。
(29)〈五〉は、「所」なし。

(1)〈大〉〈集〉は、「不也」の二字なし。
(2)〈五〉は、「大悲」の二字なし。
(3)〈大〉〈集〉〈五〉には、この「世尊」の重複なし。

解。集解所引(4)「然燈佛是釋迦牟尼佛授記之師。故問須菩提。我於師處聽法。有法可得不。須菩提知(5)。法即因師開示。而實無所得(6)。但悟自性。本來清淨。本無塵勞。寂而常照。即自成佛。當知世尊。在然燈佛所。於法實無所得(7)。」如來法者。譬如日光明照。無有邊際。而不可取。

經。須菩提。於意云何。菩薩莊嚴佛土不。不也世尊。何以故。莊嚴佛土者即(8)非莊嚴。是名莊嚴。

解。清淨佛土(9)。無相無形。何物而能莊嚴耶。唯以定慧之寶。假名莊嚴。事理(10)莊嚴有三。第一莊嚴世(11)佛土。造寺寫經布施供養是也。第二莊嚴身佛土。見一切人普行恭敬是也。本一五張表 第三莊嚴心佛土。心淨即佛土淨。念念常行無所得心是也。

經。是故。須菩提。諸菩薩摩訶薩。應如是生清淨心。不應住色生心。不應住聲香味觸法生心。應無所住而生其心。

解。諸修行人。不應見(12)他是非。自言我能我解。心輕末(13)學。此非清淨心也。自性常生智慧。行平等慈。下心恭敬一切衆生。是修行人清淨心也。若不自淨其心。愛著清淨處。心有所住。即是著法相。見色著色。住色生心。即是迷人。見色離色。不住色生心。即是悟人。住色生心。如雲蔽天。不住色生心。如空無雲。日月長照。住色生心。即是妄念。不住色生心。即是眞智。妄念生則(14)暗。智慧(15)照即明。明即煩惱不生。暗即六塵競起也(16)。

經。須菩提。譬如有人身如須彌山王。於意云何。是身爲大不。須菩提言。甚大世尊。何以故。佛說非身是名大身。

---

(4)〈集〉は、「佛」なし。
(5)〈五〉は、「知」を「即謂」の二字に作る。
(6)〈集〉は、「所」なし。
(7)〈五〉は、「得」の下に「也」あり。
(8)〈大〉は、「即」を「則」に作る。
(9)〈五〉は、「清淨佛土」を「佛土清淨」に作る。
(10)〈五〉は、「事理」の二字なし。
(11)〈五〉は、「世」の下に「間」あり。
(12)〈五〉は、「見」を「說」に作る。
(13)〈五〉は、「末」を「未」に作る。
(14)〈五〉は、「則」を「即」に作る。
(15)〈五〉は、「智慧」を「眞智」に作る。
(16)〈五〉は、「也」なし。

解。色身雖大[17]。内心量小。不名大身。*一五張裏 内心量大[18]。[19]是名大身[20]。

無爲福勝分第十一

須菩提。如恆河中所有沙數[1]。如是沙等恆河。於意云何。是諸恆河沙。寧爲多不。須菩提言。甚多世尊。但諸恆河尚多無數。何況其沙。須菩提。我今實言告汝。若有善男子善女人。以七寶滿爾所恆河沙數三千大千世界。以用布施。得福多不。須菩提言。甚多世尊。佛告須菩提[2]。善男子善女人。於此經中。乃至受持四句偈等。爲他人説。而此福德勝前福德。

解。布施七寶。得三界中[3]富貴報。講説大乘經典。令諸聞者生大智慧。成無上道。當知。受持福德。勝前七寶福德[4]。

尊重正教分第十二

復次須菩提。隨説是經。乃至四句偈等。當知此處。一切世間天人阿修羅。皆應供養如佛塔廟。

解。集解所引 *一六張表 「所在之處。見人[1]即説是經。若念念[2]常行無念心[3]。無所得心。不作能所心説[4]。若能遠離諸心。常依無所得心。即此身中。有如來全身舍利。故言如佛塔廟。」以無所得心。説此經者。感得天龍八部悉來聽受。心若不清淨。但爲名聞利養。而説是經者。死墮三塗[5]。有

---

(17)〈底〉は、「雖」なし。〈五〉によって補う。
(18)〈底〉は、「大」の下に「等虚空界方」と頭註。
(19)〈五〉は、「是」を「等虚空界方」に作る。
(20)〈底〉は、「身」の下に「色身縦如須彌。終不爲大也」と傍註。〈五〉は、この位置に「色身縦如須彌。終不爲大」の一〇字あり。

(1)〈大〉は、「有」を「所」に作る。誤植である。
(2)〈大〉〈集〉〈五〉は、「善」の上に「若」あり。
(3)〈五〉は、「中」なし。
(4)〈五〉は、「徳」の下に「也」あり。

(1)〈五〉は、「見」を「如有」に作る。〈決〉に、「六祖註中。如有人即説是經。若念念常行無念心云云。如有人。他本作見人」という。
(2)〈集〉は、「若念念」の三字を缺く。
(3)〈集〉は、「無念心」の三字を缺く。
(4)〈集〉は、「不作能所心説。若能遠離諸心。常依無所得心」の一八字なし。
(5)〈五〉は、「塗」を「涂」に作る。

何利益。「（集解所引）心(6)清淨而說是經(7)。令諸聽者除迷妄心。悟得本來佛性。常行眞實。感得天人阿修羅人非人等。皆來供養持經之人也(8)。」

經。何況有人。盡能受持讀誦。須菩提。當知是人成就最上第一希有之法。若是經典所在之處。(9)則爲有佛若尊重弟子。

解。「（集解所引）自心誦得此經。自心解得經義。(10)自心體得無著無相之理。所在之處。常修佛行。(11)念念無有間歇。即自心是佛。故言。所在之處。(12)則爲有佛。」

如法受持分第十三

（＊一六張裏）爾時。須菩提白佛言。世尊。當何名此經。我等云何奉持。佛告須菩提。是經名爲金剛般若波羅蜜。以是名字。汝當奉持。所以者何。須菩提。佛說般若波羅蜜(1)則非般若波羅蜜。(2)是名般若波羅蜜。

解。佛說般若波羅蜜。令諸學人。用智慧除却愚心(3)。生滅滅盡。即到彼岸。若心有所得。即不到彼岸。心無一法可得。即是(4)彼岸。口說心行。乃是到彼岸(5)。

經。須菩提。於意云何。如來有所說法不。須菩提白佛言。世尊。如來無所說。

解。佛問須菩提。如來說法。(6)有所得心不。須菩提知。如來說法。心無所得。故言不也(7)。如來意者。欲令世人。離(8)有得心。(9)說般若波羅(10)蜜法。令一切人聞之。皆發菩提心。悟無生理。

---

(6)〈五〉は、「心」の下に「若」あり。
(7)〈五〉は、「經」の下に「者」あり。
(8)〈五〉は、「也」なし。
(9)〈集〉〈五〉は、「則」を「即」に作る。
(10)〈五〉は、「自心」を「更能」に作る。
(11)〈集〉は、「念念無有間歇」の六字を缺く。
(12)〈集〉〈五〉は、「則」を「即」に作る。
(1)〈五〉〈集〉は、「則」を「即」に作る。
(2)〈大〉〈集〉〈五〉は、「是名般若波羅蜜」の七字なし。
(3)〈五〉は、「心」の下に「生滅」の二字あり。
(4)〈五〉は、「彼」の上に「到」あり。
(5)〈五〉は、「岸」の下に「也」あり。
(6)〈五〉は、「有所得心不」を「心有所得不」に作る。
(7)〈底〉は、「不也」に「無所說」と頭註。〈五〉は、「不也」を「無所說也」に作る。
(8)〈五〉は、「有得心」を「有所得之心」に作る。
(9)〈五〉は、「說」の上に「故」あり。
(10)〈底〉は、「蜜」の上に重ねて「蜜」と頭註。

成無上道(11)。

經。須菩提。於意云何。三千大千世界。所有微塵。是爲多不。須菩提言。甚多世尊。須菩提。諸微塵。如來說非微塵。是名微塵。如來說。世界[*一七張表]非世界。是名世界。

解。如來說。衆生性中妄念。如三千大千世界中。所有微塵。一切衆生。被妄念微塵。起滅不停。遮蔽佛性。不得解脱。若能念念眞正。修般若波羅蜜無著無相行。了妄念塵勞。即清淨法性。妄念既無。即非微塵。是名微塵。了眞即妄(12)。無別有法。故云是名微塵。性中無塵勞。即是佛世界。心中有塵勞。即(13)衆生世界。了諸妄念空寂。故云非世界。證得如來法身。普現塵刹。應用無方。是名世界。

經。須菩提。於意云何。可以三十二相見如來不。不也世尊。不可以三十二相得見如來。何以故。如來說。三十二相即是非相。是名三十二相。

解。三十二相者。(14)事相可知。凡夫但愛著如來三十二相。自不修行(15)。終不得(16)見如來也(17)。

經。須菩提。若有善男子善女人。以恆河沙等身命布施。若復有人。於此經中。乃至受持四句偈等。爲他人說[*一七張裏]。其福甚多。

解。世間重者。莫過於身命。菩薩爲法。於無量劫中。捨施身命。與(18)一切衆生。其福雖多。亦不如受持此經四句之福。多劫捨身。不了空義。妄心不除。元是衆生。一念持經。我人頓盡。妄想既除。言下成佛。故知。多劫捨身。不如持經四句之福。

---

(11) 〈五〉は、「道」の下に「也」あり。

(12) 〈底〉は、「妄」の下に「了妄即眞。眞妄俱泯」と頭註。〈五〉に、この八字あり。

(13) 〈五〉は、「即」の下に「是」あり。

(14) 〈五〉は、「事相可知凡夫」を「是三十二清淨行。於五根中修六波羅蜜。於意根中修無相無爲。是名三十二清淨行。常修此三十二清淨行。即得成佛。若不修三十二清淨行。終不成佛」に作る。

(15) 〈五〉は、「行」の上に「三十二」の三字あり。

(16) 〈五〉は、「得」なし。

(17) 〈五〉は、「也」なし。

(18) 〈五〉は、「與」の上に「分」あり。

離相寂滅分第十四

爾時。須菩提聞説是經。深解義趣。涕涙悲泣。而白佛言。希有世尊。佛説如是甚深經典。我從昔來。所得慧眼。未曾得聞如是之經。世尊。若復有人。得聞如(1)是之經。信心清淨。則(2)生實相。當知是人成就第一希有功德。

解。自性不癡名慧眼。聞性(3)自悟名法眼。須菩提是阿羅漢。於五百弟子中。解空第一。已曾勤奉多佛。豈有(4)不聞如是深法。於(5)釋迦牟尼佛所始言(6)聞也。然或是須菩提。於往昔所得。乃聲聞慧眼。今方悟佛意。始[*一八張表]得聞如是深經。悲昔未悟。故涕涙悲泣。聞經諦會。謂之清淨。從清淨體(7)中。流出般若波羅蜜多深法。當知決定成就諸佛功德。

經。世尊。是實相者。即(8)是非相。是故。如來説名實相。

解。雖行清淨行。若見染(9)淨二相當情。竝是垢心。非(10)清淨心也。但心有所得。即非實相。

經。世尊。我今得聞如是經典。信解受持。不足爲難。若當來世。後五百歲。其有衆生。得聞是經。信解受持。是人則(11)爲第一希有。何以故。此人無我相(12)人相(12)衆生相(12)壽者相。所以者何。我相即是非相。人相衆生相壽者相即是非相。何以故。離一切相(13)。即(14)名諸佛。

解。須菩提深悟佛意。呈自見處。業盡垢除。慧眼明徹。信解受持。即無難也。世尊在世。説法之時。亦有無量衆生。不能信解受持。何必獨言後五百歲。佛(15)在之日。雖有中(16)下根不信

(1)〈大〉〈五〉は、「如是之」を「是」に作る。
(2)〈集〉〈五〉は、「則」を「即」に作る。
(3)〈底〉は、「性」に「法」と頭註。〈五〉は、「性」を「法」に作る。
(4)〈五〉は、「有」を「得」に作る。
(5)〈五〉は、「於」の上に「今」あり。
(6)〈五〉は、「言」なし。
(7)〈五〉は、「體」なし。
(8)〈大〉は、「即」を「則」に作る。
(9)〈五〉は、「染」を「垢」に作る。
(10)〈五〉は、「非」の上に「即」あり。
(11)〈集〉〈五〉は、「則」を「即」に作る。
(12)〈集〉〈五〉は、「相」の下に「無」あり。
(13)〈集〉〈大〉は、「相」の上に「諸」あり。
(14)〈大〉は、「即」を「則」に作る。
(15)〈五〉は、「佛」の上に「蓋」あり。
(16)〈五〉は、「中」なし。

及懷疑者。即往問佛。佛即隨宜爲説。無不契悟。（本一八張裏）佛滅度後(17)五百歲。漸至末法。去聖遥遠。但存言教。人若(18)有疑。無處諮決。愚迷抱執。不悟無生。著相馳求。輪廻(19)諸有。於此時中。得聞深經。清心敬信。悟無生理者。甚爲希有(20)。故言第一希有。於如來滅後(21)五百歲。若有人。能於般若波羅蜜甚深經典。信解受持者(22)。即知此人無我人衆生壽者相。無此四相。是名實相。即是佛心。故云。離一切諸相。即名諸佛(23)。

經。佛告須菩提。如是如是。

解。佛印可須菩提所解。善契我心。故重言如是也。

經。若復有人。得聞是經。不驚不怖不畏。當知是人甚爲希有。

解。聲聞久著法相。執有所(24)解。不了諸法本空。一切文字。皆是假立(25)。忽聞深經。諸相不生。言下即佛。所以驚怖。唯是上根菩薩。得聞此理。歡喜受持。心無怖畏退轉。如此之流。甚爲希有(26)。

經。何以故。須菩提。如來説。第一波羅蜜非(27)第一波羅蜜。（本一九張表）是名第一波羅蜜。

解。口説心不行即非。口説心行即是。心有能所則(28)非。能所不生則(29)是。

經。須菩提。忍辱波羅蜜。如來説非忍辱波羅蜜。

---

(17) 〈五〉は、「後」の下に「後」あり。
(18) 〈五〉は、「人若」を「若人」に作る。
(19) 〈五〉は、「廻」を「迴」に作る。
(20) 〈五〉は、「有」の下に「也」あり。
(21) 〈五〉は、「後」の下に「後」あり。
(22) 〈五〉は、「者」なし。
(23) 〈五〉は、「佛」の下に「也」あり。
(24) 〈五〉は、「所」を「爲」に作り、「爲解一作所解」と割註。
(25) 〈底〉は、「立」を「修」に作る。〈五〉によって改む。
(26) 〈五〉は、「有」の下に「也」あり。
(27) 〈集〉は、「蜜」の下に「即」あり。
(28) 〈五〉は、「則」を「即」に作る。
(29) 〈五〉は、「能所不生則」を「心無能所即」に作る。

解。見有辱境當情即非。不見[30]辱境當情即是。見有身相。當彼所害即非。不見有身相。當彼所害即是。

經。何以故。須菩提。如我昔爲歌利王。割截身體。我於爾時。無我相。無人相。無衆生相。無壽者相。何以故。我於往昔。節節支解時。若有我相人相衆生相壽者相。應生瞋恨。

解。如來因中。在初地時[31]。爲忍辱仙人。被歌利王割截身體。無一念痛惱之心。若有痛惱之心。即生瞋恨。集解所引「歌利王是梵語。此云無道極惡君也。」一說。如來因中。曾爲國王。常[32]行十善。利益蒼生。國人歌讚[33]此王。故云歌利王。求無上菩提。修忍辱行。爾時天帝釋。化作旃陀羅。乞王身肉。王即割施。殊無瞋惱。今存二說。於理俱通。

本一九張裏 經。須菩提。又念過去。於五百世。作忍辱仙人。於爾所世[34]。無我相。無人相。無衆生相。無壽者相。

解。集解所引「世者生也。如來因中五百[35]生。修行忍辱波羅蜜。以得四相不生。」如來自述往因者。欲令一切修行人。成就忍辱波羅蜜。行忍辱波羅蜜人。[36]先須不見一切人過患[37]。冤親平等。無是無非。被他打罵殘害。歡喜受之。倍加恭敬。行如是行者。即能成就忍辱波羅蜜。

經。是故須菩提。菩薩應離一切相。發阿耨多羅三藐三菩提心。不應住色生心。不應住聲香味觸法生心。應生無所住心。

---

(30)〈五〉は、「見」の下に「有」あり。
(31)〈五〉は、「時」の下に「曾」あり。
(32)〈五〉は、「常」を「嘗」に作る。
(33)〈五〉は、「讃」を「稱」に作る。
(34)〈底〉は、「爾」の下に「時」と頭註。
(35)〈五〉は、「五」の上に「於」あり。
(36)〈五〉は、「先」の上に「既行忍辱行」の五字あり。
(37)〈五〉は、「患」を「惡」に作る。

解。不應住色生心者。是都標也。聲香等別列其名也。於此六塵。起憎愛心。由此妄心。積集無量業結。覆蓋佛性。雖種種勤苦(38)。不除心垢。終無解脱(39)理。推其根本。都由色上住心。如能念念常行般若波羅蜜。推諸法空。不生計著。念念常自精進。一心守護。無令放逸。（本二〇張表）淨名經云。求一切智。無非時求。大般若經云。菩薩摩訶薩。晝夜精勤(40)。常住般若波羅蜜多。相應作意。無時暫捨。

經。若心有住。則(41)爲非住。

解。若心住涅槃。非是菩薩住處。不住涅槃。不住諸法。一切處不住。是(42)菩薩住處。上文說。應無所住而生其心(43)。是也。

經。是故佛說。菩薩心不應住色布施。

解。（集解所引）「菩薩不爲求望(44)自身五欲快樂。而行布施。但爲内破慳心。外利益一切衆生。而行布施。」

經。須菩提。菩薩爲利益一切衆生。應如是布施。

解。菩薩者。行法財等施。利益無疆(45)。若作能利益心。即是非法。不作利(46)益心。是名無住。無住即是佛心(47)。

經。如來說。一切諸相即是非相。又說。一切衆生即(48)非衆生。

---

(38)〈五〉は、「苦」の下に「修行」の二字あり。
(39)〈五〉は、「脱」の下に「之」あり。
(40)〈五〉は、「勤」を「進」に作る。
(41)〈集〉〈五〉は、「則」を「即」に作る。
(42)〈五〉は、「是」の上に「方」あり。
(43)〈五〉は、「心」の下に「者」あり。
(44)〈五〉は、「求望」の二字なし。
(45)〈五〉は、「疆」を「彊」に作る。
(46)〈五〉は、「利」の上に「能」あり。
(47)〈五〉は、「心」の下に「也」あり。
(48)〈大〉は、「即」を「則」に作る。

解。如者不生。來者不滅。不生者我人不生。不滅者覺照不滅。下文云。如來者。無所從來。亦無所去。故名如來。「如來(49)說。（集解所引）我人等相(50)。畢竟可破壞。（本二〇張裏）非眞實(51)體也。一切衆生。盡是假名。若離妄心。即無衆生可得。故言即非衆生(52)。」

經。須菩提。如來是眞語者。實語者。如語者。不誑語者。不異語者。

解。眞語者說。一切有情無情。皆有佛性。實語者說。衆生造惡業。定受苦報。如語者說。衆生修善法。定有(53)樂報。不誑語者說。般若波羅蜜法。出生三世佛(54)。決定不虛。不異語者。如來所有言說。初善中善後善。旨意微妙。一切天魔外道。無有能超勝。及破壞佛語者(55)。

經。須菩提。如來所得法。此法無實無虛。

解。「無實者。（集解所引）以法體空寂。無相可得。然中有恆沙性德。用之不匱。故言無虛。」欲言其實。無相可得。欲言其虛。用而無間。是故。不得言有。不得言無。有而不有。無而不無。言辭不及者。其唯眞智乎。若不離相修行。無由臻此(56)。

經。須菩提。若菩薩心住於法。而行布施。如人入暗(57)。則(58)無所見。

解。於一切法。（本二一張表）心有住著。則不了三輪體空。如盲者(59)處暗。無所曉了。華嚴經云。聲聞在如來會中聞法。如盲(60)如聾。爲住法相故。

經。若菩薩心不住於(61)法。而行布施。如人有目。日光明照。見種種色。

---

(49)〈底〉は、「如來」に衍字の符合を付すも、〈五〉などにもあり。今、この二字を殘す。
(50)〈五〉は、「相」の上に「四」あり。
(51)〈五〉は、「實」を「覺」に作る。
(52)〈五〉は、「生」の下に「也」あり。
(53)〈五〉は、「有」を「受」に作る。
(54)〈五〉は、「佛」の上に「諸」あり。
(55)〈五〉は、「者」の下に「也」あり。
(56)〈五〉は、「此」の下に「也」あり。
(57)〈大〉は、「暗」を「闇」に作る。
(58)〈集〉〈五〉は、「則」を「即」に作る。
(59)〈五〉は、「者」なし。
(60)〈底〉は、「盲」を「善」に作り、「盲イ」と頭註。〈五〉によって改む。
(61)〈大〉〈集〉〈五〉は、「於」なし。

解。若菩薩常行般若波羅蜜多無著無相行。如人有目。處於皎日之中。何所不見也。

經。須菩提。當來之世。若有善男子善女人。能於此經。受持讀誦。則[62]爲如來。以佛智慧。悉知是人。悉見是人。皆得成就無量無邊功德。

解。當來之世。即是[63]如來滅後[64]五百歲。濁惡之時。邪法競起。正法難行。於此時中。若有善男子善女人。得遇此經。從師稟授。讀誦在心。精進[65]不忘。依義修行。悟入佛之知見。故[66]能成就阿耨[67]菩提。以是三世諸佛。無不知之。[68]

持[1]經功德分第十五

須菩提。若有善男子善女人。初日分以恒河沙等身布施。*二張裏 中日分復以恒河沙等身布施。後日分亦以恒河沙等身布施。如是無量百千萬億劫以身布施。若復有人。聞此經典。信心不逆。其福勝彼。何況書寫受持讀誦。爲人解說。

解。佛說。末法之時。得聞此經。信心[2]不逆。四相不生。即是佛之知見。此人功德。勝前多劫捨身功德。百千萬億。不可譬喻。一念聞經。其福尚多。況[3]更能書寫受持讀誦。爲人解說。當知此人決定成就阿耨多羅三藐三菩提。所以種種方便。爲說如是甚深經典。俾離諸相。得阿耨多羅三藐三菩提。所得福[4]德。無有邊際。蓋緣多劫捨身。不了諸法[5]本空。有能捨[6]所捨心在。元未離衆生之見。如能聞經悟道。我人頓盡。言下即佛。將彼捨身有漏之福。比持此[7]經無漏之慧。實不可及。故[8]雖十方聚寶三世捨身。不如持經四句偈[9]。

(62)〈集〉〈五〉は、「則」を「即」に作る。
(63)〈五〉は、「即是」の二字なし。
(64)〈五〉は、「後」の下に重ねて「後」の字あり。
(65)〈五〉は、「精進」を「專精」に作る。
(66)〈五〉は、「故」を「則」に作る。
(67)〈五〉は、「耨」の下に「多羅三藐三」の五字あり。
(68)〈集〉は、ここで巻之二が終わり、「金剛般若波羅蜜經巻之二終」の尾題あり。〈五〉は、ここで上巻が終わり、「金剛般若波羅蜜經上」の尾題あり。

(1)〈集〉は、以下を巻之三とし、この前に「金剛般若波羅蜜經巻之三」の標題を置く。〈五〉は、以下を下巻とし、この前に「金剛般若波羅蜜經下」の標題を置く。
(2)〈底〉は、「心不逆」を缺き、この三字を頭註。〈五〉にも、この三字あり。今、補う。
(3)〈五〉は、「況」の上に「何」あり。
(4)〈五〉は、「福」を「功」に作る。
(5)〈五〉は、「法」を「相」に作る。
(6)〈底〉は、「有能捨」に「心有能所」と頭註。〈羅〉も、「有能捨所捨心在。元未離衆生之見」に作る。
(7)〈五〉は、「此」なし。
(8)〈五〉は、「故」なし。
(9)〈五〉は、「偈」を「之偈也」の三字に作る。

經。須菩提。以要言之。是經有不可思議不可稱量（＊二三張表）無邊功德。

解。持經之人。心無我所。無我所故。即是佛心。佛心功德。無有邊際。故言不可稱量。[10]

經。如來爲發大乘者說。爲發最上乘者說。

解。大乘者。智慧廣大。善能建立一切法。最上乘者。不見垢法可厭。不見淨法可求。不見衆生可度。不見涅槃可證。不作度衆生心。[11]亦不作不度衆生心。[11]是名最上乘。亦名一切智。亦名無生忍。亦名大般若。有人發心求佛[12]無上道。聞此無相無爲甚深之法。聞已即當便[13]解受持。爲人解說。令其深悟。不生毀謗。得大忍力。大智慧力。大方便力。即能流通此經。

經。若有人能受持讀誦。廣爲人說。如來悉知是人。悉見是人。皆得成就不可量不可稱無有邊不可思議功德。

解。上根之人。聞此深經。得悟佛意。持自心經。見性究竟。復能起利他之行。爲人解說。令諸學者。自悟無相之理。得見本性如來。（＊二三張裏）成無上道。當知說法之人。所得功德。無有邊際。不可稱量也。[14]

經。如是人等。則[15]爲荷擔如來阿耨多羅三藐三菩提。

解。聞經解義。如教修行。復能廣爲人說。令諸衆生得悟。修行無相無著之行。以能行此行。即有大智慧光明。出離塵勞。以離塵[16]。即得阿耨多羅三藐三菩提。故名荷擔如來。當知

---

(10)〈五〉は、「量」の下に「也」あり。

(11)〈五〉は、「生」の下に「之」あり。

(12)〈五〉は、「佛」なし。

(13)〈五〉は、「當便」を「便信」に作る。

(14)〈五〉は、「也」なし。

(15)〈集〉〈五〉は、「則」を「即」に作る。

(16)〈底〉は、「以離塵」に「雖離塵勞。不作離塵勞之念」と頭註。〈五〉は、「以離塵」をこの一一字に作る。

持經之人。自有無量無邊不可思議功德。

經。何以故。須菩提。若樂小法者。著我見人見衆生見壽者見。則[17]於此經。不能聽受讀誦爲人解說。

解。何名[18]樂小法者。爲二乘聲聞人樂小果。不發大心。以不發大心故。即於如來深法。不能受持讀誦。爲人解說。

經。須菩提。在在處處。若有此經。一切世間。天人阿修羅。所應供養。當知此處則[19]爲是塔。皆應恭敬作禮圍繞。以諸花[20]香而散其所[21]。

解。若人口誦般若。心行般若。在在處處。常行無爲無相之行。（＊二三張表）此人所在之處。如有佛塔。感得一切人天各持供養。作禮恭敬。與佛無異。能受持此經[22]。是人心中自有世尊。故云如佛塔廟。當知。所得[23]福德。無量無邊。

能淨業障分第十六

復次須菩提。善[1]男子善女人。受持讀誦此經。若爲人輕賤。是人先世罪業。應墮惡道。以今世人輕賤故。先世罪業。則[2]爲銷[3]滅。當得阿耨多羅三藐三菩提。

解。「佛言（從容所引）。持經[4]人合得一切天[5]人恭敬供養。爲多生有重業障故。今生雖得[6]受持。諸佛如來甚深經典。常被人輕賤。不得人[7]恭敬供養。自以受[8]持經[9]故。不起我人[10]等相。不問冤親。常行

---

(17)〈集〉〈五〉は、「則」を「即」に作る。

(18)〈五〉は、「何名」の二字なし。

(19)〈集〉〈五〉は、「則」を「即」に作る。

(20)〈大〉〈集〉〈五〉は、「花」を「華」に作る。

(21)〈底〉は、「所」に「處」と頭註。〈大〉〈集〉〈五〉は、「所」を「處」に作る。

(22)〈五〉は、「此經」を「經者」に作る。

(23)〈五〉は、「所得」を「是人所作」に作る。

(1)〈集〉は、「善」の上に「若」あり。

(2)〈集〉〈五〉は、「則」を「即」に作る。

(3)〈大〉〈集〉〈五〉は、「銷」を「消」に作る。

(4)〈五〉〈從〉は、「經」の下に「之」あり。

(5)〈從〉は、「天」なし。

(6)〈從〉は、「得受…經典」の一一字を「持此理」に作る。

(7)〈從〉は、「人恭敬供養」の五字を「敬養」に作る。

(8)〈從〉は、「受」なし。

(9)〈五〉は、「經」の下に「典」あり。

(10)〈五〉は、「我人」を「人我」に作る。

恭敬。心[11]無惱恨。蕩然無所計較。念[12]念常行般若波羅蜜。曾[13]無退轉。以能如是修行故。得從無量劫。以至今生。所有極[14]惡罪障。悉皆銷[15]滅。又約理而言。先世[16]即是前念妄心。今世[16]即是後念覺心。以後念覺心。[*二三張裏]輕賤前念妄心。妄不能住。故云。先世罪業。即爲銷[17]滅。妄念既滅。罪業不成。即得菩提也[18]。」

經。須菩提。我念過去無量阿僧祇劫。於然燈佛前。得值八百四千萬億那由他諸佛。悉皆供養承事。無空過者。若復有人。於後末世。能受持讀誦此經。所得功德[19]。於我所供養諸佛功德。百分不及一。千萬億分。乃至算數譬喩所不能及。

解。供養恆沙諸佛。施寶滿三千界。捨身如微塵數。種種福德。不及持經一念悟無相理。息希望心。遠離衆生顚倒知見。即到波羅彼岸。永出三塗苦。證無餘涅槃。

經。須菩提。若善男子善女人。於後末世。有受持讀誦此經。所得功德。我若具説者。或有人聞。心則[20]狂亂。狐疑不信。

解。佛言。末法衆生。德薄垢重。嫉妬彌深。衆聖潛隱。邪見熾盛。於此時中。如有善男子善女人。受持讀誦此經。圓離諸[21]相。了無所得。[*二四張表]念念常行。慈悲喜捨。謙下柔和。究竟成就無上菩提。或有聲聞。小見不知如來正法。常在不滅。聞説如來滅後。後五百歲。有人能成就無相心。行無相行。得阿耨多羅三藐三菩提者[22]。心生驚怖。狐疑不信。

經。須菩提。當知是經義不可思議。果報亦不可思議。

---

(11)〈從〉は、「心無……計較」の一〇字を「有犯不校」に作る。
(12)〈從〉は、「念念常行」を「常修」に作る。
(13)〈從〉は、「曾無……罪障」の二六字を「歴劫重罪」に作る。
(14)〈五〉は、「惡罪」を「重惡」に作る。
(15)〈五〉〈從〉は、「銷」を「消」に作る。
(16)〈五〉は、「世」の下に「者」あり。
(17)〈五〉〈從〉は、「銷」を「消」に作る。
(18)〈從〉は、「也」なし。
(19)〈底〉は、「德」を「後」に作る。〈大〉〈集〉〈五〉によって改む。
(20)〈集〉〈五〉は、「則」を「即」に作る。
(21)〈底〉は、「諸」に「成法イ」と頭註。ただし、五山版等によるに、この註記は、元來、「離諸」の二字に附すべきものと思われる。
(22)〈五〉は、「者」を「則」に作る。

解。是經義者。即[23]無著無相行也[24]。云不可思議者。讚歎無著無相行。能成就阿耨多羅三藐三菩提也。

究竟無我分第十七

爾時。須菩提白佛言。世尊。善男子善女人。發阿耨多羅三藐三菩提心。云何應住。云何降伏其心。佛告須菩提。善[1]男子善女人。發阿耨多羅三藐三菩提心[2]者。當生如是心。我應滅度一切衆生。滅度一切衆生已。而無有一衆生實滅度者。

解。（集解所引）「須菩提問佛。如來滅後。後五百歲。若有人發阿耨多羅三藐三菩提心者。（＊二四張裏）依何法而住。如何降伏其心。佛言。當發度脱一切衆生心。度脱一切衆生。盡得成佛已。不得見有一衆生。是我度[3]者。何以故。爲除能所心也。除有衆生見[4]也。亦除我見[5]也。」

經。何以故。須菩提[6]。若菩薩有我相人相衆生相壽者相。即[7]非菩薩。

解。菩薩若見有衆生可度。即是我相。有能度衆生心。即是人相。謂涅槃可求。即是衆生相。見有涅槃可證。是[8]壽者相。可[9]有此四相。即非菩薩[10]。

經。所以者何。須菩提。實無有法。發阿耨多羅三藐三菩提心[11]者。

解。有法者。我人等[12]四法是也[13]。若不除四法。終不得菩提。若言我不發菩提心者。亦是我人等法。我人等法。即是煩惱根本。

---

(23)〈五〉は、「即」の下に「是」あり。
(24)〈五〉は、「也」なし。
(1)〈五〉は、「善」の上に「若」あり。
(2)〈大〉〈集〉は、「心」なし。
(3)〈集〉は、「度」の上に「滅」あり。
(4)〈集〉は、「見」を「心」に作る。
(5)〈集〉は、「見」の下に「心」あり。
(6)〈集〉〈五〉は、「須菩提」の三字なし。
(7)〈大〉は、「即」を「則」に作る。
(8)〈五〉は、「是」の上に「即」あり。
(9)〈五〉は、「可」なし。
(10)〈五〉は、「薩」の下に「也」あり。
(11)〈大〉〈集〉は、「心」なし。
(12)〈五〉は、「等」を「衆生壽者」の四字に作る。
(13)〈五〉は、「是」なし。

經。須菩提。於意云何。如來於然燈佛所。有法得阿耨多羅三藐三菩提不。不也世尊。如我解佛所説義。佛於然燈佛所。無有法得阿耨多羅三藐三菩提。佛言。如是如是。

解。*二五張表 集解所引「佛告須菩提。我於師處。不除四相。得授(14)記不。須菩提深解無相之理。故言不也。」善契佛意。故言如是。如是之(15)言。是印可之辭。

經。須菩提。實無有法。如來得阿耨多羅三藐三菩提。須菩提。若有法。如來得阿耨多羅三藐三菩提(16)。然燈佛則(17)不與我授(18)記。汝於來世當得作佛。號釋迦牟尼。以實無有法。得阿耨多羅三藐三菩提。是故。然燈(19)與我授(20)記作是言。汝於來世當得作佛。號釋迦牟尼。何以故。如來者即諸法如義。

解。佛言。實無我人衆生壽者。始得授菩提記。我若有發菩提心。然燈佛則(21)不與我授記。以實無所得。然燈(22)始與我授菩提記。此一段文。總(23)成須菩提無我義。言諸法如義者。諸法即是色聲香味觸法。於此六塵中。善能分別。而本體湛然。不染不著。曾無變異。如空不動。圓通瑩澈(24)。歴劫常存。是名諸法如義。菩薩瓔珞經云。*二五張裏毀譽不動。是如來行。入佛境界經云。諸欲不染。故敬禮無所觀。

經。若有人言。如來得阿耨多羅三藐三菩提。須菩提。實無有法。佛得阿耨多羅三藐三菩提。須菩提。如來所得阿耨多羅三藐三菩提。於是中。無實無虚。

解。佛言。實無所得心。而得菩提。以所得心不生。是故得菩提。離此心外。更無菩提可得。故言無實也。所得心寂滅。一切智本有。萬行悉圓備。恆沙性德(25)。用無乏少。故言無虚(26)。

---

(14)〈五〉は、「授」を「受」に作る。
(15)〈底〉は、「之」を「人」に作る。〈五〉によって改む。
(16)〈大〉〈集〉〈五〉は、「提」の下に「者」あり。
(17)〈集〉〈五〉は、「則」を「即」に作る。
(18)〈大〉は、「授」を「受」に作る。
(19)〈大〉〈集〉〈五〉は、「燈」の下に「佛」あり。
(20)〈大〉は、「授」を「受」に作る。
(21)〈五〉は、「則」を「即」に作る。
(22)〈五〉は、「燈」の下に「佛」あり。
(23)〈五〉は、「總」を「惣」に作る。
(24)〈五〉は、「澈」を「徹」に作る。
(25)〈五〉は、「性德」を「德性」に作る。
(26)〈五〉は、「虛」の下に「也」あり。

經。是故如來說。一切法皆是佛法。須菩提。所言一切法者即非一切法。是故名一切法。

解。能於諸法。心無取捨。亦無能所。熾然建立一切法。而心常空寂。故知一切法皆是佛法。恐迷者貪著一切法。以爲佛法。爲遣此病。故言即非一切法。心無能所。寂而常照。定慧齊行。體用一致。是故名一切法。(27)

經。須菩提。譬如人身長大。須菩提言。世尊。*二六紙表 如來說。人身長大則(28)爲非大身。是名大身。

解。如來說。人身長大則(29)爲非大身者。以顯一切衆生。法身不二。無有限量。是名大身。法身本無處所。故言則(29)非大身。又以色身雖大。內無智慧。即非大身。(30)色身雖小。內有智慧。得名大身。雖有智慧。不能依行。即非大身。依教修行。悟入諸佛無上知見。心無能所限量。是名大身也。(31)

經。須菩提。菩薩亦如是。若作是言。我當滅度無量衆生。(32)則不名菩薩。何以故。須菩提。實無有法名爲菩薩。是故佛說。一切法無我無人無衆生無壽者。

解。菩薩若言。因我說法。除得彼人煩惱。即是法我。若言我能度得衆生。即有我所。雖度脫衆生。心有能所。我人不除。不得名爲菩薩。熾然說種種方便。化度衆生。心無能所。即是菩薩也。

---

(27)〈五〉は、「法」の下に「也」あり。

(28)〈集〉〈五〉は、「則」を「即」に作る。

(29)〈五〉は、「則」を「即」に作る。

(30)〈五〉は、「身」の下に「也」あり。

(31)〈五〉は、「也」なし。

(32)〈集〉〈五〉は、「則」を「即」に作る。

經。須菩提。若菩薩作是言。我當莊嚴佛土。是不名菩薩。何以故。如來說。〔本二六張裏〕莊嚴佛土者則(33)非莊嚴。是名莊嚴。

解。菩薩若言。我能建立世界者。即非菩薩。雖能建立世界。心有能所。即非菩薩。熾然建立世界。能所(34)不生。是名菩薩。最(35)勝妙定經云。假使有人。造得白銀精舍。滿三千大千世界。不如一念禪定心。心有能所。即非禪定。能所不生。是名禪定。禪定即是淸淨心也。

經。須菩提。若菩薩通達無我法者。如來說名眞是菩薩。

解。於諸法相。無所滯礙。是名通達。不作解法心。是名無我法。無我法者。如來說名眞是菩薩。隨分行持。亦得名爲菩薩。然未爲眞菩薩。解行圓滿。一切能所心盡。方得名(36)眞是菩薩(37)。

一體同觀分第十八

須菩提。於意云何。如來有肉眼不。如是世尊。如來有肉眼。須菩提。於意云何。如來有天眼不。如是世尊。如來有天眼。〔本二七張表〕須菩提。於意云何。如來有慧眼不。如是世尊。如來有慧眼。須菩提。於意云何。如來有法眼不。如是世尊。如來有法眼。須菩提。於意云何。如來有佛眼不。如是世尊。如來有佛眼。

解。一切人盡有五眼。爲迷所覆。不能自見故。佛教除却迷心。即五眼開(1)明。念念修行般若波羅蜜法。初除迷心。名爲肉眼。見一切衆生皆有佛性。起憐憫心。是名天眼。癡心不生。

---

(33)〈大〉〈集〉〈五〉は、「則」を「即」に作る。
(34)〈五〉は、「所」の下に「心」あり。
(35)〈底〉は、「最」を「是」に作る。〈五〉によって改む。
(36)〈五〉は、「名」の下に「爲」あり。
(37)〈五〉は、「薩」の下に「也」あり。
(1)〈五〉は、「開」を「圓」に作る。

名爲慧眼。著法心除。名爲法眼。細惑永盡。圓明遍照。名爲佛眼。又云。見色身中有法身。(2)(3)名爲天眼。見一切衆生。各具般若性。名爲慧眼。見性明徹。能所永除。(4)一切佛法。本來自備。名爲法眼。見般若波羅蜜。能生(5)三世一切法。名爲佛眼。(6)

經。須菩提。於意云何。(7)恆河中所有沙。佛説是沙不。如是世尊。如來説是沙。須菩提。於意云何。如一恆河中所有沙。有如是等(8)恆河。是諸恆河所有沙數佛世界。（*二七張裏）如是寧爲多不。甚多世尊。

解。（集解所引）「恆河者。西國祇洹精舍側近之河也。(9)如來説法。常指此河爲喩。佛説。此河中沙。一沙況一佛世界。以爲多不。須菩提言。甚多世尊。」佛舉此衆多國土者。欲明其中所有衆生。一一衆生。皆有爾許心數。

經。佛告須菩提。爾所國土中。所有衆生。若干種心。如來悉知。何以故。如來説。諸心皆爲非心。是名爲心。

解。（集解所引）「爾所國土中。所有衆生。一一衆生。皆有若干差別心數。(10)心數雖多。(11)總名妄心。識得妄心非心。」是名爲心。此心即是眞心。常心。佛心。般若波羅蜜心。清淨菩提涅槃心也。

經。所以者何。須菩提。過去心不可得。現在心不可得。未來心不可得。

解。過去心不可得者。前念妄心。瞥爾已過。追尋無有處所。現在心不可得者。眞心無相。憑何得見。未來心不可得者。本無可得。習氣已盡。更不復生。（*二八張表）了此三心不可得。是名爲佛。(12)

---

(2)〈五〉は、「身」の下に「名爲肉眼」あり。
(3)〈五〉では、「名爲天眼…名爲慧眼」の一八字と「見性明徹。能所永除」の八字が入れ換わっている。
(4)〈五〉は、「一」の上に「見」あり。
(5)〈五〉は、「生」の上に「出」あり。
(6)〈五〉は、「眼」の下に「也」あり。
(7)〈五〉は、「恆」の上に「如」あり。
(8)〈五〉は、「等」の上に「沙」あり。
(9)〈集〉は、「也」なし。
(10)〈集〉は、「心數」の二字なし。
(11)〈五〉は、「總」を「惣」に作る。
(12)〈五〉は、「佛」の下に「也」あり。

法界通化分第十九

須菩提。於意云何。若有人(1)。滿三千大千世界七寶。以用布施。是人以是因緣。得福多不。如是世尊。此人以是因緣。得福甚多。須菩提。若福德有實。如來不說得福德多。以福德無故。如來說得福德多。

解。七寶之福。不能成就佛果菩提。故言無也。以其無(2)量數。假(3)名曰多。如能超過數量(4)。即不說多也。

離色離相分第二十

須菩提。於意云何。佛可以具足色身見不。不也世尊。如來不應以具足色身見。何以故。如來說。具足色身即非具足色身。是名具足色身。

解。佛意恐衆生不見法身。但見三十二相。八十種好。紫磨金輝(1)。以爲如來眞身。爲遣此迷故。問須菩提。佛可以具足色身見不。*二八張裏 三十二相即非具足色身。內具三十二淨(2)行。是名具足色身。清淨行者。即六波羅蜜是也。於五根中。修六波羅蜜。於意根中。定慧雙修。是名具足色身。徒愛如來三十二相。內不行三十二清淨行。即非具足色身。不愛如來色相。能自持清淨行。亦得名具足色身也(3)。

經。須菩提。於意云何。如來可以具足諸相見不。不也世尊。如來不應以具足諸相見。何以故。如來說。諸相具足即非具足。是名諸相具足。

---

(1)〈底〉は、「有」なし。〈大〉〈集〉〈五〉によって補う。
(2)〈五〉は、「無」を「在」に作る。
(3)〈五〉は、「假」を「故」に作る。
(4)〈五〉は、「數量」を「量數」に作る。

(1)〈五〉は、「輝」を「舩」に作る。
(2)〈五〉は、「淨」の上に「清」あり。
(3)〈五〉は、「也」なし。

解。如來者。即無相法身是也。非肉眼所見。慧眼乃得見之(4)。慧眼未明。具足我人等相。以觀三十二相。爲如來者。即是(5)名爲具足也。慧眼明徹。我人等相不生。正智光明常照。是名諸相具足。三毒未泯。言見如來眞身者。固無此理。縱有見者。祇是化身。非眞實無相之法身也。

(1)非説所説分第二十一

須菩提*二九張表。汝勿謂。如來作是念。我當有所説法。莫作是念。何以故。若人言。如來有所説法。即爲謗佛。不能解我所説故。須菩提。説法者無法可説。是名説法。

解。凡夫説法。心有所得故。佛告須菩提。如來説法。心無所得。凡夫作能解心説。如來語默皆如。所發言辭。如響應聲。任運無心。不同凡夫生滅心説。若言如來説法。心有生滅者。即爲謗佛。維摩經云。夫説法者。無説無示。聽法者。無聞無得。了萬法空寂。一切名言。皆是假立。於自空性中。熾然建立一切言辭。演説諸法無相無爲。開導迷人。(2)令見本性。修證無上菩提。是名説法(3)。

無法可得分第二十二

須菩提白佛言。世尊。佛得阿耨多羅三藐三菩提。爲無所得耶。如是如是。須菩提。我於阿耨多羅三藐三菩提。乃至無有少法可得。是名阿耨多羅三藐三(1)菩提。*二九張裏

解。須菩提言。所得心盡。即是菩提。佛言如(2)是如是。我於菩提。實無希求心。亦無所得心。以如是故。得名(3)阿(4)耨(5)菩提。

---

(4)〈五〉は、「得」を「能」に作る。
(5)〈底〉は、「是イ本無」と頭註。〈五〉は、「是」を「不」に作る。

(1)〈底〉は、「二年。今見在濠州鍾離寺石碑上記。六祖解在前。故無解。今亦存之。於非説所説分入之」と頭註。後の註(3)に見るように、〈集〉などにこれと類似した一節があるから、異本に基づく註記と認められる。
(2)〈底〉は、「令」を「今」に作る。〈五〉によって改む。
(3)〈集〉は、この下に、以下の經文、竝びに註記あり。
「爾時。慧命須菩提白佛言。世尊。頗有衆生。於未來世。聞説是法。生信心不。佛言。須菩提。彼非衆生。非不衆生。何以故。須菩提。衆生衆生者。如來説非衆生。是名衆生。
靈幽法師加此慧命須菩提六十二字。是唐長慶二年。今在濠州鍾離寺石碑上記。六祖解在前。故無解。今亦存之。」
〈大〉にも、この經文あり。〈五〉は、この經文と「幽冥禪師續加」の註記あり。

(1)〈底〉は、「菩」の字、寫眞の不備のため讀めず。〈大〉〈集〉〈五〉によって補う。
(2)〈底〉は、「是如」の二字、寫眞の不備のため讀めず。〈五〉によって補う。
(3)〈五〉は、「名」の下に「爲」あり。
(4)〈五〉は、「耨」の下に「多羅三藐三」の五字あり。
(5)〈五〉は、「提」の下に「也」あり。

淨心行善分第二十三

復次須菩提。是法平等。無有高下。是名阿耨多羅三藐三菩提。以無我無人無衆生無壽者。修一切善法。則(1)得阿耨多羅三藐三菩提。

解。此(2)菩提法者。上至諸佛。下至昆蟲。盡含種智。與佛無異。故言平等無有高下。以菩提無二故。但離四相。修一切善法。則(3)得菩提。若不離四相。而(4)修一切善法。轉增我人。欲證解脱之心。無由可得。若離四相。而修一切善法。解脱可期。修一切善法者。於一切法。無有染著。對一切境。不動不搖。於世出世法。不貪不愛。於一切處。常行方便。隨順衆生。使之歡喜信服。爲説正法。令悟菩提。如是始名修行。*三〇張表 故言修一切善法。

經。須菩提。所言(5)善法者。如來説非(6)善法。是名善法。

解。修一切善法。希望果報。即非善法。六度萬行。熾然俱作。心不望報。是名善法(7)。

(1)福智無比分第二十四

須菩提。若三千大千世界中。所有諸須彌山王。如是等七寶聚。有人持用布施。若人以此般若波羅蜜經。乃至四句偈等。受持讀誦(2)。爲他人説。於前福德。百分不及一。百(3)千萬億分。乃至算數譬喩所不能及。

解。大鐵圍山。高廣二百二十四萬里。小鐵圍山。高廣一百一十二(4)萬里。須彌山。高廣三百三十六萬里。以此名爲三千大千世界。就(5)理而言。即貪瞋癡妄念。各具一千也。如爾許山。

---

(1)〈集〉〈五〉は、「則」を「即」に作る。
(2)〈五〉は、「此」なし。
(3)〈五〉は、「則」を「即」に作る。
(4)〈五〉は、「而」なし。
(5)〈集〉は、「言」を「謂」に作る。
(6)〈五〉は、「非」の上に「即」あり。
(7)〈集〉は、ここで巻之三が終わり、「金剛般若波羅蜜經巻之三終」の尾題あり。

(1)〈集〉は、以下を巻之四とし、この前に「金剛般若波羅蜜經巻之四」の標題を置く。
(2)〈集〉は、「讀誦」の二字なし。
(3)〈集〉は、「百」なし。
(4)〈底〉は、「二」に衍字の符合を附し、「二。イ本ニハナシ」と頭註。
(5)〈五〉は、「就」を「約」に作る。

盡如須彌。以況七寶數。持用布施。所得福德。無量無邊。終是有漏之因。而無解脱之理。摩訶般若波羅蜜多。四句經文雖少。依之修行。即得成佛。(*三〇張裏) 是知。持經之福。能令衆生。證得菩提。故不可比。(6)

化無所化分第二十五

須菩提。於意云何。汝等(1)勿謂。如來作是念。我當度衆生。須菩提。莫作是念。何以故。實無有衆生如來度者。若有衆生如來度者。如來則(2)有我人衆生壽者。

解。須菩提意謂。如來有度衆生心。爲(3)遣須菩提如是疑心。故言莫作是念。一切衆生。本自是佛。若言如來度得衆生成佛。即爲妄語。以妄語故。即是我人衆生壽者。此爲遣我所心也。夫一切衆生。雖有佛性。若不因諸佛説法。無由自悟。憑何修行。得成佛道。

經。須菩提。如來説。有我者即(4)非有我。而凡夫之人。以爲有我。須菩提。凡夫者。如來説即(4)非凡夫。

解。如來説。有我者。是自性清淨。常樂我淨之我。不同凡夫貪瞋無明。虚妄不實之我。故言。凡夫之人。以爲有我。有我人。即是凡夫。(*三一張表) 我人不生。即非凡夫。心有生滅。即是凡夫。心無生滅。即非凡夫。不悟般若波羅蜜多。即是凡夫。若(5)悟得般若波羅蜜多。即非凡夫。心有能所。即是凡夫。心(6)能所不生。即非凡夫。(7)

---

(6) 〈五〉は、「比」の下に「也」あり。

(1) 〈集〉は、「等」なし。

(2) 〈集〉〈五〉は、「則」を「即」に作る。

(3) 〈五〉は、「爲」の上に「佛」あり。

(4) 〈大〉は、「即」を「則」に作る。

(5) 〈五〉は、「若」なし。

(6) 〈五〉は、「心」なし。

(7) 〈五〉は、「夫」の下に「也」あり。

法身非相分第二十六

須菩提。於意云何。可以三十二相觀如來不。須菩提言。如是如是。以三十二相觀如來。佛言。須菩提。若以三十二相觀如來者。轉輪聖王即(1)是如來。須菩提白佛言。世尊。如我解佛所説義。不應以三十二相觀如來。

解。「(集解所引)世尊大慈。恐須菩提。執相之病未除。故作此問。須菩提未知佛意。乃言如是。如是(2)之言。早是迷心。更言。以三十二相觀如來。又是一重迷心。離眞轉遠故。如來爲説除(3)迷。若以三十二相觀如來者。(4)轉輪聖王即是如來。(5)輪王雖有三十二相。豈得同如來也(6)。世(*三二張裏)尊引此言者。以遣須菩提執相之病。令其所悟深徹(7)。須菩提被質(8)。迷心頓釋。故言(9)。如我解佛所説義。不應以三十二相觀如來。須菩提是大阿羅漢。所悟甚深。(10)方便(11)示其迷路。以(12)冀世尊除遺細惑。令後世衆生。所見不謬也。」

經。爾時世尊。而説偈言。

若以色見我　以音聲求我
是人行邪道　不能見如來

解。若以兩字。是發語之端。色者相也。見者識也。我者是一切衆生身中自性。清淨無爲。無相眞常之體。不可高聲念佛而得成就。(13)念須(14)正念分明。方得(15)悟解。若以色聲二相求之。不可見也。是知。(16)以(17)相觀佛。聲中求法。心有生滅。不悟如來矣。

(1) 〈大〉は、「即」を「則」に作る。
(2) 〈五〉は、「之言」の二字なし。
(3) 〈底〉は、「迷」の上と下に、それぞれ、「彼イ」、「心イ」と頭註。〈集〉〈五〉とも、「迷」を「彼迷心」の三字に作る。
(4) 〈底〉は、「輪」を「轉」に作る。〈集〉〈五〉によって改める。
(5) 〈集〉は、「輪王」を「轉輪聖王」の四字に作る。
(6) 〈集〉は、「也」なし。
(7) 〈底〉は、蟲食いのため、「徹」か「徹」か不明。〈五〉は「徹」、〈集〉は「徹」に作る。
(8) 〈集〉〈五〉は、「質」を「問」に作る。
(9) 〈集〉は、「言」を「云」に作る。
(10) 〈集〉は、「方便」を「得方便門」に作る。
(11) 〈集〉は、「示其」を「不生」に作る。
(12) 〈五〉は、「冀」を「冀」に作る。
(13) 〈五〉は、「念」を「會」に作る。
(14) 〈五〉は、「念」を「見」に作る。
(15) 〈五〉は、「悟解」を「解悟」に作る。
(16) 〈底〉は、「以」に「於イ」と頭註。
(17) 〈底〉は、「觀」の上に「中イ」と頭註。

無斷無滅分第二十七

須菩提。汝若作是念。如來不以具足相故。得阿耨多羅三藐三菩提。莫(1)作是念。如來不以具足相故。得阿耨多羅(＊三一張表)三藐三菩提。汝(2)若作是念。發阿耨多羅三藐三菩提者(3)。說諸法斷滅(4)。莫作是念。何以故。發阿耨多羅三藐三菩提者(5)。於法不說斷滅相。無有是處。

解。須菩提聞說眞身離相。便謂。不修三十二清淨行。得佛菩提。佛語須菩提。莫言。如來不修三十二清淨行。而得菩提。汝若言。不修三十二淨(6)行。得阿耨菩提者。即是斷滅佛種。

不受不貪分第二十八

須菩提。若菩薩。以滿恆河沙等世界七寶。持(1)用布施。若復有人。知一切法無我。得成於忍。此菩薩勝前菩薩所得功德。

解。(集解所引)「通達一切法。無能所心(2)。是名爲忍。此人所得福德。勝前七寶之福(3)。」

經。須菩提。以諸菩薩不受福德故。須菩提白佛言。世尊。云何菩薩不受福德。須菩提。菩薩所作福德。不應貪著。是故說不受福德。(＊三一張裏)

解。菩薩所作福德。不爲自己。意在利益一切衆生。故言不受福德(4)。

---

(1)〈大〉〈集〉〈五〉は、「莫」の上に「須菩提」の三字あり。
(2)〈大〉は、「汝」を「須菩提」の三字に作り、〈集〉〈五〉は、「汝」の上に「須菩提」の三字あり。
(3)〈五〉は、「提」の下に「心」あり。
(4)〈大〉は、「滅」の下に「相」あり。
(5)〈大〉〈五〉は、「提」の下に「心」あり。
(6)〈五〉は、「淨」の上に「清」あり。

(1)〈大〉〈五〉は、「持用」の二字なし。
(2)〈五〉は、「心」の下に「者」あり。
(3)〈五〉は、「福」の下に「也」あり。
(4)〈五〉は、「德」の下に「也」あり。

威儀寂靜分第二十九

須菩提。若有人言。如來若來若去若坐若臥。是人不解我所說義。何以故。如來者。無所從來。亦無所去。故名如來。

解。如來者。非來非不來。非去非不去。非坐非不坐。非臥非不臥。行住坐臥。四威儀中。常在空寂。即是如來。(1)

(1)〈五〉は、「來」の下に「也」あり。

一合理相分第三十

須菩提。若善男子善女人。以三千大千世界。碎爲微塵。(1)寧爲多不。甚多世尊。何以故。(2)是微塵衆實有者。佛則(3)不說是微塵衆。所以者何。佛說。微塵衆則(3)非微塵衆。是名微塵衆。

解。佛說。三千大千世界。以喩一一衆生性上微塵(4)之數。如三千大千世界(5)所有微塵。一切衆生*三三張表性上妄念微塵。即非微塵。聞經悟道。覺慧常照。趣向菩提。念念不住。常在清淨。如是清淨微塵。是名微塵衆。(6)

經。世尊。如來所說。三千大千世界則(7)非世界。是名世界。何以故。若世界實有者。則(7)是一合相。如來說。一合相即(8)非一合相。是名一合相。

解。三千者。約理而言。即貪瞋癡妄念。各具一千數也。心爲善惡之本。能作凡作聖。動靜

(1)〈大〉〈集〉〈五〉は、「塵」の下に「於意云何是微塵衆」の八字あり。
(2)〈大〉〈集〉〈五〉は、「是」の上に「若」あり。
(3)〈集〉〈五〉は、「則」を「即」に作る。
(4)〈五〉は、「微」の上に「妄念」あり。
(5)〈五〉は、「界」の下に「中」あり。
(6)〈五〉は、「衆」の下に「也」あり。
(7)〈集〉〈五〉は、「則」を「即」に作る。
(8)〈大〉は、「即」を「則」に作る。

不可測度。廣大無邊。故名大千世界。(9)心中明了。莫過悲智二法。由此二法。而得菩提。説一合相者。心有所得故。則(10)非一合相。心無所得。是名一合相。一合相者。不壞假名。而譚(11)實相。

經。須菩提。一合相者。即(12)是不可説。但凡夫之人。貪著其事。

(13)解。由悲智二法。成就佛果菩提。説不可盡。妙不可言。凡夫之人。貪著文字事業。不行悲智二法。若(14)不行悲智二法。而求無上菩提。何由可得。

知見不生分第三十一 *三三張眞

須菩提。若人言。佛説我見人見衆生見壽者見。須菩提。於意云何。是人解我所説義不。世尊。是人不解如來所説義。何以故。世尊説。我見人見衆生見壽者見。即非我見人見衆生見壽者見。是名我見人見衆生見壽者見。

解。如來説此經。令一切衆生自悟般若智(1)。自修行菩提果。凡夫之人。不解佛意。便謂(2)如來説我人等見。不知如來説。甚深無相無爲般若波羅蜜法。如來所説我人等見。不同凡夫我人等見。如來説。一切衆生。皆有佛性。是眞我見。説一切衆生。無漏智性。本自具足。是人見。説一切衆生。本無煩惱。是衆生見。説一切衆生。性本(3)不生不死(4)。是壽者見(5)。

經。須菩提。發阿耨多羅三藐三菩提心者。於一切法。應如是知。如是見。如是信解。

---

(9)〈底〉は、「世」なし。〈五〉によって補う。
(10)〈五〉は、「則」を「即」に作る。
(11)〈五〉は、「譚」を「談」に作る。
(12)〈大〉は、「即」を「則」に作る。
(13)〈集〉は、この部分に、別の六祖の註釋を載せる。しかし、これは、元來、別の註釋書からの引用であったと考えられる。これについては、前掲拙稿參照。
(14)〈五〉は、「若不行悲智二法」の七字なし。

(1)〈底〉は、「智」の下に「慧イ」と頭註。
(2)〈五〉は、「謂」を「爲」に作る。
(3)〈五〉は、「本」の下に「自」あり。
(4)〈五〉は、「死」を「滅」に作る。
(5)〈五〉は、「見」の下に「也」あり。

不生法相。須菩提。所言法相者。如來說即非法相。（*三四張表）是名法相。

解。發菩提心者。應見一切衆生。皆有佛性。應見一切衆生。無漏種智。本自具足。應信一切衆生。自性本無生滅。雖行一切智慧。方便接物利生。不作能所[6]心。口說無相法。[7]心有能所。即非法相。口說無相法。心行無相行。[8]所得心滅。是名法相[9]。

應化非眞分第三十二

須菩提。若有人。[1]以滿無量阿僧祇世界七寶。持用布施。若有善男子善女人。發菩薩心者。持於此經。乃至四句偈等。受持讀誦。爲人演說。其福勝彼。云何爲人演說。不取於相。如如不動。

解。七寶之福雖多。不如有人。發菩提[2]心。受持此經四句[3]。爲人演說。其福勝彼。百千萬[4]億。不可譬喩。說法善巧方便。觀根應量。種種隨宜。是名爲人演說。所聽法人。有種種相貌不等。不得作（*三四張裏）分別心。但了空寂如[5]如之[6]心。無所得心。無勝負心。無希望心。無生滅心。是名如如不動。（庚戌）

經[7]。何以故。

一切有爲法　如夢幻泡影
如露亦如電　應作如是觀

解。夢者是妄心[8]。幻者是妄念。泡者是煩惱。影者是業障。夢幻泡影業。是名有爲法。眞實

（6）〈五〉は、「所」の下に「之」あり。
（7）〈五〉は、「心」の上に「而」あり。
（8）〈五〉は、「所得心滅」を「而心無能所」に作る。
（9）〈五〉は、「相」の下に「也」あり。

（1）〈五〉は、「以」なし。
（2）〈五〉は、「提」を「薩」に作る。
（3）〈五〉は、「句」の下に「偈等」あり。
（4）〈五〉は、「億」を「倍」に作る。
（5）〈五〉は、「如如」を「一如」に作る。
（6）〈底〉は、「心」の字、蟲食い。〈五〉によって補う。
（7）〈底〉は、「經」なし。今、補う。
（8）〈五〉は、「心」を「身」に作る。

離名相。悟者無諸業。

經。佛説是經已。長老須菩提。及諸比丘比丘尼。優婆塞優婆夷。一切世間。天人阿修羅。聞佛所説。皆大歡喜。信受奉行。(9)

(1)金剛般若波羅蜜經(2)

---

(9)〈底〉は、この位置に、「般若無盡藏眞言」「金剛心陀羅尼」「補闕圓滿眞言」「收經偈」あり。

(1)〈集〉は、「金」の上に「集註」の二字あり。

(2)〈五〉は、「經」の下に「下」あり。〈集〉は、同じく「終」あり。〈大〉は、尾題の後に眞言あり。

(1)永嘉眞覺大師。自像法決疑經内。被見先生負人[＊三五張表]□(2)來。讀誦金剛經歸之也。

子年者負	一萬二千貫	四巻讀
丑年者負	二十八萬貫	九十一巻
(3)寅年者負	九萬貫	三十巻
卯年者負	八萬貫	三十三巻
辰年者負	八萬貫	二十巻
巳年者負	七萬貫	二十四巻
午年者負	二十六萬貫	七十九巻
未年者負	十萬貫	三十三巻
申年者負	四萬貫	十四巻
酉年者負	五萬貫	十七巻
[＊三五張裏]戌年者負	貳萬貫	七巻
亥年者負	九千貫	三巻

[＊三六張表]天文十九年　壬五月二十一日。誂東性坊修複功畢。右解尺(ママ)。雖他家述釋。爲愚鈍潤色安置之。是偏爲興隆佛法。報恩謝徳也矣

惠潤(ママ)二十五才

藤福寺居住之時

佐竹兵亂之節

以祈念寸暇批之

(1) 以下、〈五〉になし。

(2) 〈底〉の文字、判讀できず。

(3) 〈底〉は、「寅」を「刀」に作る。今、改む。